

田野町文化財調査報告書 第39集

元野河内遺跡

県営農地保全整備事業元野地区に
伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2001

宮崎県宮崎郡田野町教育委員会

報告書抄録

ふりがな	もとのかわちいせき
書名	元野河内遺跡
副書名	県営農地保全整備事業元野地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	田野町文化財調査報告書
シリーズ番号	第39集
編著者名	田野町教育委員会 文化財調査事務所 金丸武司
編集機関	田野町教育委員会
所在地	宮崎県宮崎郡田野町甲2818番地
発行年月日	2001年3月
ふりがな	もとのかわちいせき
所収遺跡名	元野河内遺跡
ふりがな	たのちょうこうもとのあざもとのかわち
遺跡所在地	田野町甲元野字元野河内
調査期間	1996年8月21日～1997年1月31日
調査面積	約12,000 m ²
調査原因	農業関連
主な時代	旧石器時代 繩文時代 古代
主な遺跡	ナイフ形石器、三稜尖頭器、剥片尖頭器、細石刃核、槍先形尖頭器、爪形文土器、円筒貝殻文土器、押型文土器、手向山式土器、天道ヶ尾式土器、妙見式土器、平格式土器、塞ノ神式土器、轟I式土器、曾畠式土器、春日式土器、石鎚、スクレイバー、石匙、石斧、礫器、原石、石核、須恵器、布痕土器
主な遺構	集石遺構、土坑

例　　言

1. 本書は平成8年度県営農地保全整備事業元野地区に伴い、宮崎県中部農林振興局の依頼を受けて実施した「元野河内遺跡」の調査結果を報告するものである。

2. 本遺跡の現地調査及び室内整理は、宮崎県中部農林振興局からの受託事業を文化庁の国庫補助事業を得て田野町教育委員会が実施した。調査体制は以下の通りである。

3. 平成8年度の調査は、次の体制で実施した。

調査主体 田野町教育委員会 教育長 鎌倉 政信

調査担当 社会教育課 社会教育課長 前田 久育

同 社会教育課長補佐兼係長 川口 博文

調査・庶務担当 社会教育課 主任 森田 浩史

調査担当 同 主事 金丸 武司

4. 平成12年度の室内整理及び資料整理作業は、次の体制で実施した。

調査主体 田野町教育委員会 教育長 堀内 優

調整担当 社会教育課 主査 森田 浩史

庶務担当 同 主査 森田 浩史

調査担当 同 主査 森田 浩史

同主任主事 金丸 武司

5. 現地の作業員として、田野町内からの方から多数の参加をいただいた。

6. 本書で用いた方位は磁北、標高は海拔絶対高である。

7. 本書における遺構の表示には、下記の記号を用いた。

集石遺構：S I 土坑：S C

8. 本書に用いた土色は、農林省農林水産技術会事務局監修の「標準土色帳」による。

9. 本書に用いたスクリーントーン番号は、LETRASET JAPANの規格に基づく。

10. 本書の執筆及び編集は金丸が行った。

11. 出上遺物は田野町教育委員会文化財調査事務所に保管している。

本文目次

第I章 序説

第1節 調査に至る経緯 1

第2節 遺跡の位置と歴史的環境 1

第II章 調査の結果

第1節 調査全体の概要 3

第2節 緒序 3

第3節 各調査区の概要 5

第4節 検出遺構 11

第5節 出土遺物 49

第III章 まとめ 91

図版目次

第1図 元野河内遺跡周辺地形図 2

第2図 調査区位置図 2

第3図 調査区十層柱状模式図 4

第4図 A区遺構配置図 6

第5図 B区遺構配置図(1) V層上面 7

第6図 B区遺構配置図(2) V層中位 7

第7図 C区遺構配置図 9

第8図 E区遺構配置図 10

第9図 F区遺構配置図 12

第10図 A区集石遺構実測図 14

第11図 A区集石遺構実測図 15

第12図 A区集石遺構実測図 16

第13図 A区集石遺構実測図 18

第14図 A区集石遺構実測図 19

第15図 A区集石遺構実測図 21

第16図 A区集石遺構実測図 22

第17図 B区集石遺構実測図 24

第18図 B区集石遺構実測図 26

第19図 B区集石遺構実測図 28

第20図 B区集石遺構実測図 29

第21図 B区集石遺構実測図 30

第22図	C区集石遺構実測図	32
第23図	E区集石遺構実測図	34
第24図	E区集石遺構実測図	36
第25図	E区集石遺構実測図	38
第26図	F区集石遺構実測図	40
第27図	F区集石遺構実測図	42
第28図	土坑実測図	43
第29図	上坑実測図	45
第30図	土坑実測図	47
第31図	遺構内出土遺物実測図	48
第32図	出土石器実測図	50
第33図	山上石器実測図	51
第34図	出土石器実測図	53
第35図	山上土器実測図	55
第36図	出土土器実測図	56
第37図	山上土器実測図	58
第38図	出土土器実測図	59
第39図	山上土器実測図	60
第40図	出土土器実測図	62
第41図	山上土器実測図	63
第42図	出土土器実測図	64
第43図	出土土器実測図	65
第44図	出土土器実測図	67
第45図	出土土器実測図	69
第46図	出土土器実測図	70
第47図	出土石器実測図	72
第48図	出土石器実測図	74
第49図	出土石器実測図	75
第50図	出土石器実測図	76
第51図	出土石器実測図	77
第52図	出土石器実測図	78
第53図	出土石器実測図	80
第54図	出土石器実測図	81

表 目 次

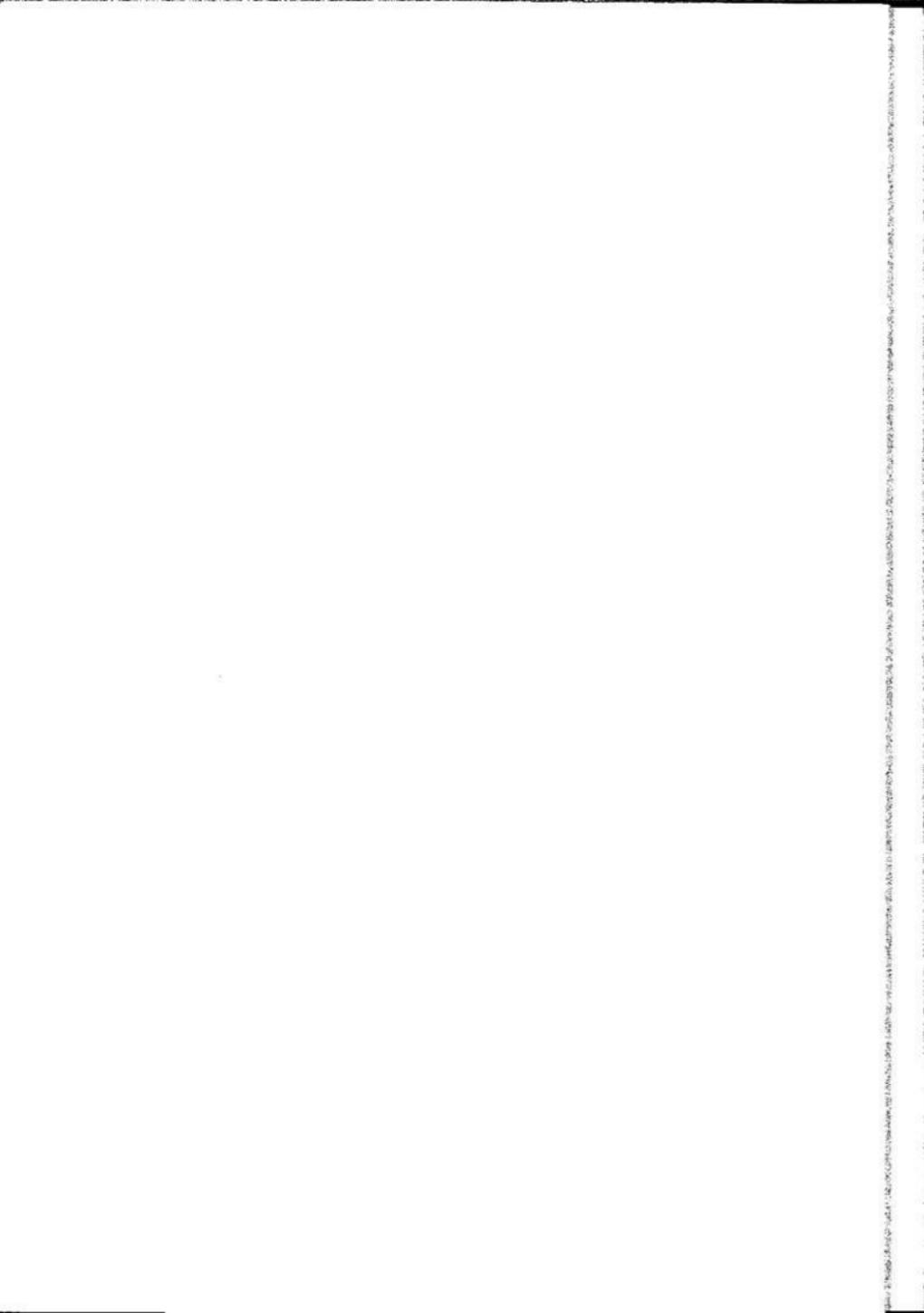
表1 調査区分別石器利用石材表	71
表2 山上石器観察表(1)	82
表3 出土土器観察表(1)	83
表4 出土土器観察表(2)	84
表5 出土土器観察表(3)	85
表6 出土土器観察表(4)	86
表7 出土土器観察表(5)	87
表8 山上石器観察表(2)	88
表9 出土石器観察表(3)	89
表10 出土石器観察表(4)	90

写 真 図 版 目 次

図版1 (元野河内遺跡調査前遠景)	97
図版2 (A区近景、遺構検出状況、S I -01検出状況)	98
図版3 (A区S I -01完掘状況、S I -02検出状況、S I -02完掘状況)	99
図版4 (A区S I -03検出状況、S I -04検出状況、S I -05検出状況)	100
図版5 (A区S I -06検出状況、S I -06完掘状況、S I -07検出状況)	101
図版6 (A区S I -08検出状況、S I -08完掘状況、S I -11検出状況)	102
図版7 (A区S I -11完掘状況、S I -12検出状況、S I -14検出状況)	103
図版8 (A区S I -14完掘状況、S I -16検出状況、S I -17検出状況)	104
図版9 (A区S I -17完掘状況、S I -18検出状況、S I -19検出状況)	105
図版10 (A区S I -20検出状況、S I -21検出状況、S I -22検出状況)	106
図版11 (A区S I -23検出状況、S I -23完掘状況、S I -24検出状況)	107
図版12 (A区S I -25検出状況、S I -26検出状況、S I -27検出状況)	108
図版13 (A区S I -27完掘状況、S I -28検出状況、S I -29検出状況)	109
図版14 (A区S I -29完掘状況、S I -30検出状況、S I -31検出状況)	110
図版15 (A区S I -31完掘状況、S I -32検出状況、S I -33検出状況)	111
図版16 (A区S I -34検出状況、S I -35検出状況、S C -01検出状況)	112
図版17 (A区S C -02検出状況、S C -03検出状況、B区遺構検出状況)	113
図版18 (B区V層上面遺構検出状況、土坑検出状況、土坑断面)	114
図版19 (B区礫群検出状況、S I -01検出状況、S I -02検出状況)	115
図版20 (B区S I -03検出状況、S I -04検出状況、S I -05検出状況)	116
図版21 (B区S I -05完掘状況、S I -06検出状況、S I -06完掘状況)	117

図版22 (B区S I -07検出状況、S I -07完掘状況、S I -08検出状況)	118
図版23 (B区S I -08完掘状況、S I -09検出状況、S I -11検出状況)	119
図版24 (B区S I -13検出状況、S I -17検出状況、S I -17完掘状況)	120
図版25 (B区S I -19検出状況、S I -20検出状況、S I -21検出状況)	121
図版26 (B区S I -22検出状況、S I -24検出状況、S I -25検出状況)	122
図版27 (B区S I -27検出状況、S I -28検出状況、S I -29検出状況)	123
図版28 (B区S I -30検出状況、S I -31検出状況、S I -32検出状況)	124
図版29 (B区S I -34検出状況、S I -35検出状況、S I -36検出状況)	125
図版30 (C区S I -01検出状況、S I -03検出状況、S I -04検出状況)	126
図版31 (C区S I -05検出状況、S I -06検出状況、S C -01検出状況)	127
図版32 (C区S C -03検出状況、土器出土状況、D区近景)	128
図版33 (E区遺構検出状況、疊群検出状況、集石遺構検出状況)	129
図版34 (E区S I -01検出状況、S I -02検出状況、S I -03検出状況)	130
図版35 (E区S I -04検出状況、S I -05検出状況、S I -05完掘状況)	131
図版36 (E区S I -06検出状況、S I -07検出状況、S I -08検出状況)	132
図版37 (E区S I -09検出状況、S I -10検出状況、S I -11検出状況)	133
図版38 (E区S I -12検出状況、S I -13検出状況、S I -14検出状況)	134
図版39 (E区S I -15検出状況、S I -16検出状況、S I -17検出状況)	135
図版40 (E区S I -18検出状況、S I -19検出状況、S I -20検出状況)	136
図版41 (E区S I -21検出状況、S I -22検出状況、S I -23検出状況)	137
図版42 (E区S I -24検出状況、S I -24完掘状況、S I -25検出状況)	138
図版43 (E区S I -26検出状況、S C -01検出状況、S C -02検出状況)	139
図版44 (E区S C -04検出状況、S C -05検出状況、S C -06検出状況)	140
図版45 (F区遺構検出状況、S I -01検出状況、S I -01完掘状況)	141
図版46 (F区S I -02検出状況、S I -02完掘状況、S I -03検出状況)	142
図版47 (F区S I -04検出状況、S I -04完掘状況、S I -05検出状況)	143
図版48 (F区S I -05完掘状況、S I -06検出状況、S I -06完掘状況)	144
図版49 (F区S I -07検出状況、S I -07完掘状況、S I -08検出状況)	145
図版50 (F区S I -08完掘状況、S C -01検出状況、S C -02検出状況)	146
図版51 遺構内出土遺物（1）	147
図版52 遺構内出土遺物（2）	148
図版53 出土遺物（1）	149
図版54 出土遺物（2）	150
図版55 出土遺物（3）	151
図版56 出土遺物（4）	152
図版57 出土遺物（5）	153

図版58 出土遺物（6）	154
図版59 山上遺物（7）	155
図版60 出土遺物（8）	156
図版61 山上遺物（9）	157
図版62 出土遺物（10）	158
図版63 山上遺物（11）	159
図版64 出土遺物（12）	160
図版65 出土遺物（13）	161
図版66 出土遺物（14）	162
図版67 出土遺物（15）	163
図版68 山上遺物（16）	164
図版69 出土遺物（17）	165
図版70 出土遺物（18）	166
図版71 出土遺物（19）	167
図版72 出土遺物（20）	168
図版73 山上遺物（21）	169
図版74 出土遺物（22）	170



第1章 序 説

第1節 調査に至る経緯

田野町は宮崎市から西方約20kmの地点を中心とする田野盆地と、それを取り囲む鶴塚山をはじめとする山々からなり、1市（宮崎市）及び5町（清武町、高岡町、山之口町、三股町、北郷町）と接している。主な産業は大根やタバコなどを主体とする農業であったが、近年は高速道路や国県道の整備によって交通の要衝の地となり、更に工業団地の整備と企業や専門学校の誘致、宅地開発の進行により、徐々にではあるが発展しつつある。しかし、その一方で農業基盤整備事業や各種開発事業に伴う埋蔵文化財の保存が大きな問題となり、町教育委員会でも調整や調査体制の整備充実を図ってきたが、これらにかかる遺跡の大部分は記録保存の対象となり消滅している。

平成8年度は県営農地保全整備事業元野地区が実施されることとなり、事業地内に元野河内遺跡が所在したので、県文化課が分布範囲等を確認するために試掘調査を実施したところ、低湿地を除く全域に遺物が散布していることが明らかとなった。平成8年4月23日には町教育委員会、県文化課と原因者である宮崎県中部農林振興局の間で遺跡の保存について協議を行い、工事施工上消滅を免れない部分についてのみ、発掘調査による記録保存の措置を講じることで合意に至った。その後平成8年8月21日に同振興局と委託契約を締結し、同年8月22日より発掘調査に着手した。調査は、田野町内の皆様のご協力を得ながら平成9年1月31日に終了した。同遺跡の調査面積は約12,000m²に亘った。

第2節 遺跡の位地と歴史的環境

元野河内遺跡は田野町の中心部から南南西の、鶴塚山系から続く台地部に立地する元野地区の西部、左岸の片井野川へ注ぐ少河川が深い谷を刻みながら横断する複雑な地形上に立地する。同地区は昭和46年に宮崎大学史学研究部考古学班による調査で縄文時代後期の遺物が確認された黒草遺跡が近接するほか、E区、F区の所在する台地の東端には平成4年～7年に調査が行われた高野原遺跡が立地しており、縄文時代早期の集石遺構や前・中期の土器、晩期の掘立柱建物群、弥生時代の花弁状住居を含む集落や占墳時代の地下式横穴などが検出された。

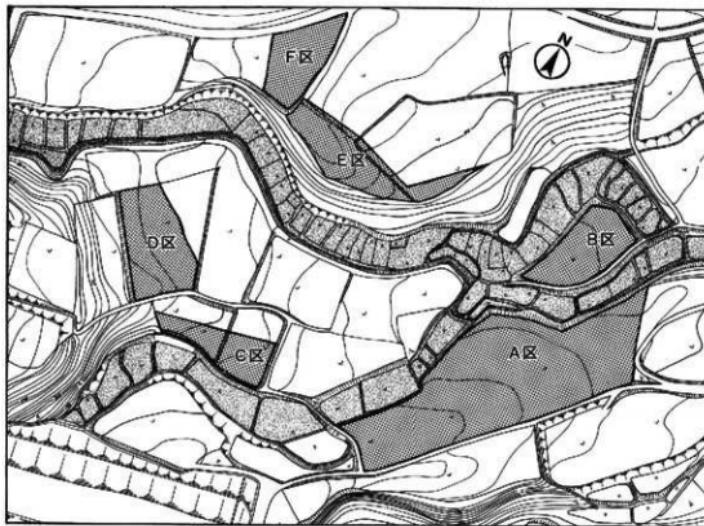
以上のように、当地域一帯は幾度かの断絶期を経ながらもかなり長期にわたって集落が営まれていたことがわかる。なお、前述の遺跡が河川に接した台地縁辺部に立地するのに対し、元野河内遺跡は鶴塚山系を起源とする少河川の影響により、凹凸の激しい地形上にある点が特徴として挙げられる。

（参考文献）

- 「本野遺跡（縄文時代遺物編）」田野町文化財調査報告書第32集 田野町教育委員会 1999
- 「本野遺跡（弥生時代の調査）」田野町文化財調査報告書第33集 田野町教育委員会 2000
- 「高野原遺跡B・C区」 田野町文化財調査報告書第35集 田野町教育委員会 2000
- 「高野原遺跡（E～G区）」 田野町文化財調査報告書第36集 田野町教育委員会 2000



第1図 元野河内遺跡周辺地形図（1 : 30,000）



第2図 調査区位置図（1 : 4,000）
調査区：スクリーントーン101番、旧河川スクリーントーン787番

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 調査全体の概要

調査は設計上で切り土となり遺跡が消滅する部分のみを対象とし、南東部をA区、少河川の浸食による中州となった東部をB区、西側の高地から続く傾斜部の南側をC区、北側をD区とし、谷を隔てた北部の台地縁辺部にE区、F区をそれぞれ設定して実施した。

調査は表土と共にアカホヤ火山灰層の堆積部も含め機械により掘削を行った後、手掘りによる遺物包含層並びに遺構検出作業を行った。調査の手順はどの調査区に於いても共通しているが、確認された層序や出土した遺物、遺構は調査区ごとに変化が見られた。

第2節 層序

I層：10Y R 4／3

耕作土層。土色は区により若干の変化が見られる。

擾乱層：10Y R 2／1

B区、C区東部の傾斜地上、D区において確認された層である。層中に混入物を見ることはほとんどなく、耕作土よりも固く締まっており、粘性も若干ある。東側の高地の崩落により堆積した層であると考えられる。

II層：10Y R 7／8

層中に半透明のガラス質粒子を少量含み、粘性は全くない。層は極めて軟質であり、乾燥すると粉状に碎ける。アカホヤ火山灰の二次堆積層であると考えられる。この層は全ての調査区で確認された。D～F区からは、この層の上面より縄文時代前・中期の遺物が出土している。

III層：10Y R 7／6

II層と比較し固く締まっており、粘性は全くない。層中には半透明のガラス質粒子が多量に含まれるほか、白色粒子を少量、黒色粒子を微量混入する。一般的に言われるアカホヤ火山灰層であるが、こちらは一時堆積層であると考えられる。この層は調査区内ではE区、F区で確認されたのみである。

IV層：2, 5Y 4／4

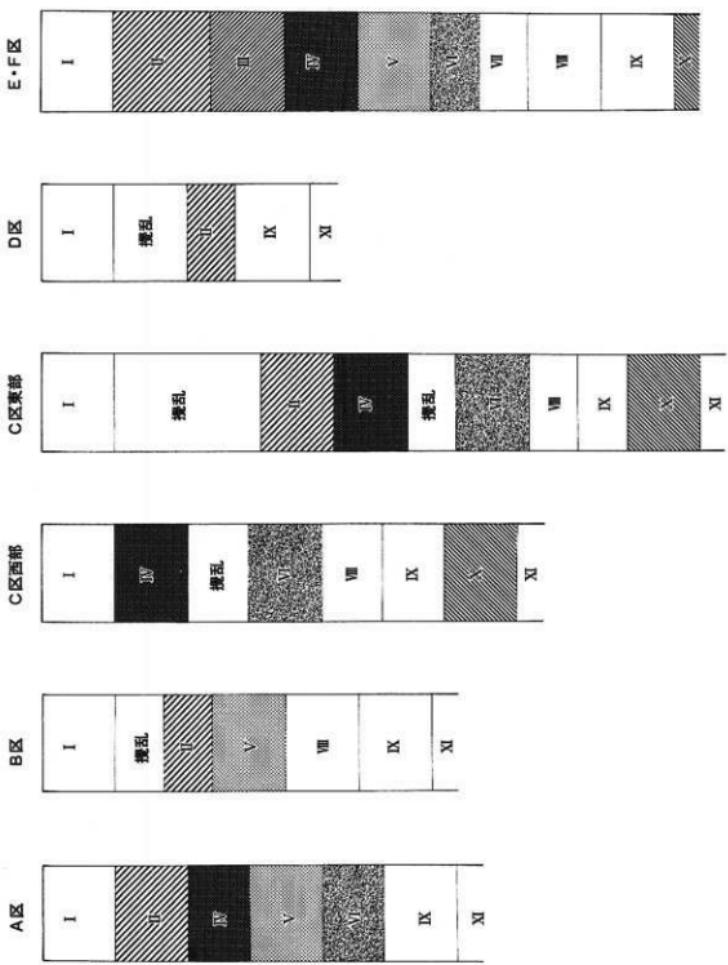
固く締まった層。粘性があり、層中には白色の粒子が数多く認められ、オレンジ色や赤褐色の軟質粒子も少量ではあるが混入する。俗に言う牛の脛ロームと呼ばれる層である。B区とD区を除く調査区の全てから確認された。また、この層は遺物・遺構が多く出土している。

擾乱層：2, 5Y 8／8

C区にのみ認められた層。色調や粒子の大きさはV層に近いが、粘性は殆どなく、ガラス質粒子を含む等の特徴はII層のアカホヤ二次堆積層に近い。両者とV層が混入したものと考えられる。

V層：2, 5Y 4／2

IV層よりも軟質であるが、粘性に富む層である。IV層で見られる白色粒子やオレンジ色の軟質粒子が僅かに確認できる。遺物の出土はこの層が最も多く、また集石遺構の多くが、若干の差を持ちなが



第3図 調査区土層柱状模式図

らもこの層中を検出面としていた。河川の作用により流出したと考えられるD区を除く全ての調査区から確認された。

VI層：10Y R 3／1

小林降下軽石層と考えられる。大変固く締まった黒褐色の層であり、粘性に富み、黑色粒子、白色粒子を少量含む。遺物等は確認されなかった。B区とD区でこの層が確認されなかったのは、河川の浸食によるものと思われる。

VII層：10Y R 4／2

小林降下軽石層の下位のローム層。色調や粘性に富む点はV層に近いと判断される。但し混入物の類は皆無であった。堆積の良好なE、F区以外では確認されない。文化層である可能性を考慮して調査区内に部分的に深掘を行ったが、遺物・遺構等は認められなかった。

VIII層：10Y R 5／3

固く締まった粘性に富む層であり、削ると斑紋が見られる。この層もVII層と同様にE、F区以外では堆積が確認されていない。

IX層：10Y R 4／3

非常に固く締まった粘土層である。粘性はV層に比べ若干劣る。層中には白色粒子が高密に混入するほか、オレンジ色の軟質粒子も微量認められる。これらの混入物は更に下位のX層からのものと考えられる。なお、この層はA区を除く全ての調査区より確認された。

X層：2.5Y 7／8

始良丹沢火山灰層である。層中にはおびただしい量のガラス質粒子が含まれるほか、少量ではあるが指頭の大軽石も認められる。層は固く締まっているものの、乾燥すると砂状に崩れ落ちる。C区とE、F区において確認された。

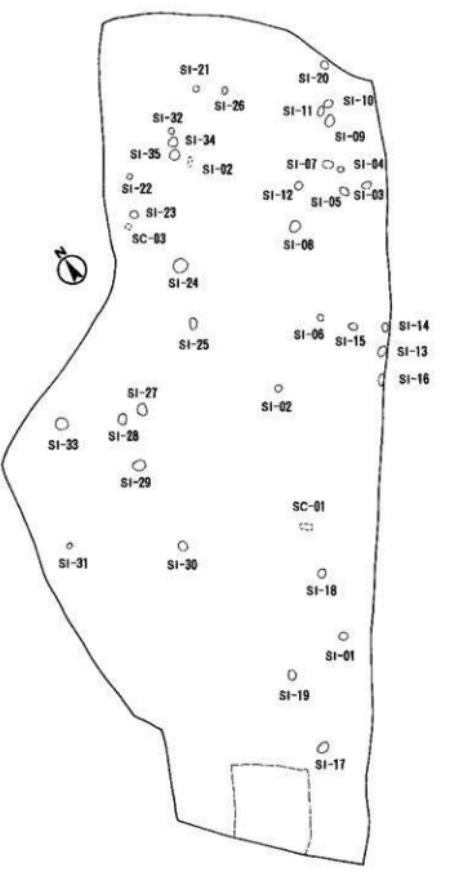
XI層：礫層

親指大の礫が密集する層。礫と礫の間は粘質に富む粘土と大粒の砂利より成り、下位に行くほど礫は大きさを増す。これまでの調査より、元野地区ではATの下位に礫層が堆積する傾向があるが、今回この調査区からも同様の堆積が認められた。

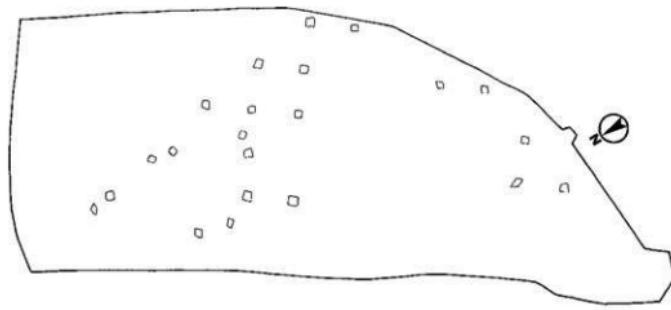
第3節 各調査区の概要

A区（第4図）

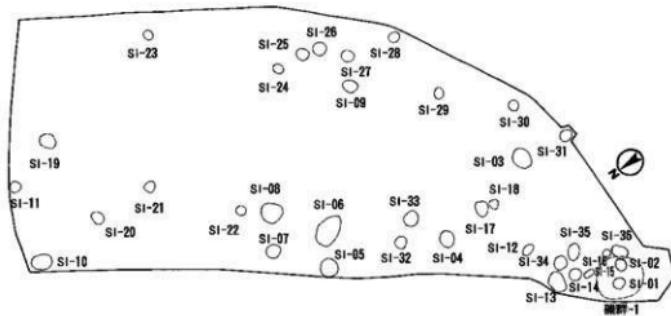
河川に接した南岸に位置する。調査区は東側に緩やかに傾斜しており、河川との高低差が5m前後であることから、氾濫を度々受けていると考えられ、その為調査区南部はIV層が厚く堆積しているのに対し、北部の河川沿いにIV層は認められず、V層の堆積も薄かった。アカホヤ火山灰層の下面まで機械による掘削を行ったところ、集石遺構と思われる礫の集合を数ヶ所確認したため、これより下位を縄文時代早期の文化層と判断し手堀りにより調査したところ、調査区内の全城に遺構・遺物が確認されるに至った。検出された遺構は集石遺構35基、七坑3基、土器は草創期の土器数点を除き全て早期であった。遺物は主に南側に集中が見られた。特に石器類の出土が多く、中でも石鎌は元野河内遺跡全体の約半数に及んだ。このうち張質安山岩製や姫島産黒曜石の石鎌が多かったのは特徴といえる。



第4図 A区造構配図 (1 : 1,600)



第5図 B区造構配置図(1)V層上面 (1 : 800)



第6図 B区造構配置図(2)V層中面 (1 : 800)

他に、石斧や石斧、原石等、石製品の出土も豊富である。なお、調査区西端の破線部は近代の粘土採取所及び瓦の廃棄所であり、IX層の上層まで完全に破壊されていた。

B区（第5図・第6図）

この地点は、かつて河川の影響により形成された中州であったと思われ、四方を湿地に囲まれる。アカホヤ火山灰層を取り除いたところ、調査区の至る所に30cm×30cmの、黒色の埋土を持つ掘り込みを多数確認した（第5図）。そのため、文化層の調査に入る前にこの遺構検出作業を行う。結果、埋土中に石灰やアカホヤのブロックが確認された。地元の古老が訪れた際にこのことを質問すると、この地はかつて赤痢病患者を隔離した施設であるという答えが返ってきた。また、A区東側に隣接する畑の一角には墓石が山積みされているが、地元の作業員によると、ここには以前小さな寺が建てられており、そこに住む僧が患者を看取っていた伝承があるという。見える部分の墓石を見ると、微妙ではあるが明和、寛政等の年号を確認することができ、この墓が建てられた前後、この寺を営む僧の手で河川により開拓され、隔離されたB区を施設としたと考えられる。患者は個別の小屋に収容されていたと伝えられており、正方形の土坑は小屋に設けられた便所穴であったと考えられる。ただし、それに伴う柱穴等は検出されなかった。また、土坑の覆土より検出された石灰は消毒の為、アカホヤのブロックはその代替品であったと思われる。

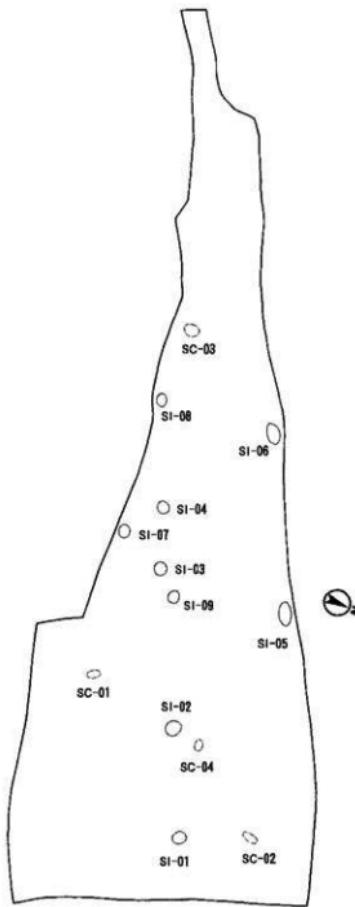
アカホヤ火山灰の下位からは36基の集石遺構と1基の礫群を確認することが出来た（第6図）。集石遺構は調査区内で最も標高が低くなる西端に密集していたが、北部に隣接したS I-05~08を除くと全体的に小振りのものが多い。遺物は土器石器共に、ごく少量の出土に留まった。

C区（第7図）

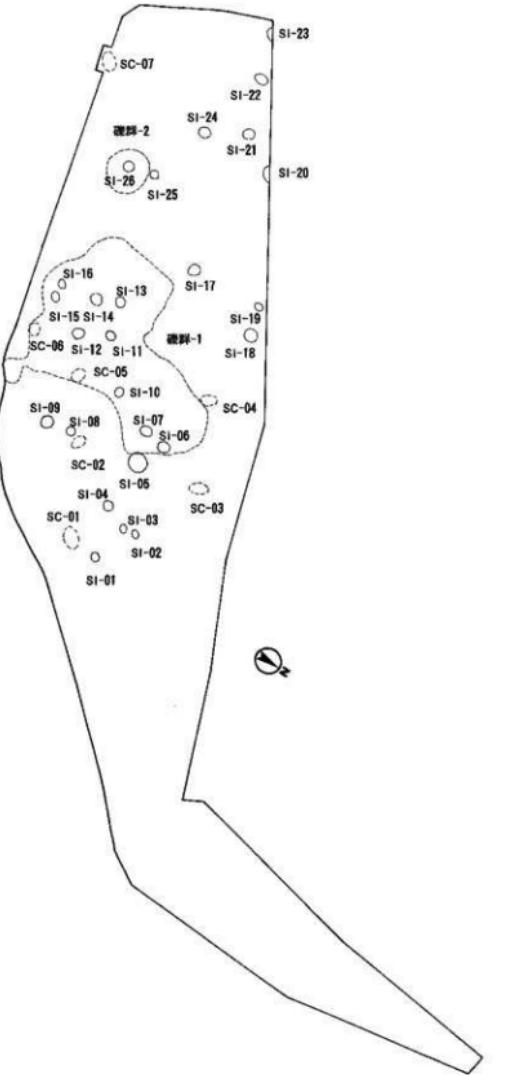
西部の高地から東側に急に傾斜する地点である。この調査区は牛の脛ローム層の上部に擾乱層が確認され、層中より旧石器時代の遺物が多数出土したため、手堀り作業に入る。恐らく西部の高台に旧石器時代の遺跡が形成され、そこから流れ込み調査区内に残存したものと考えられる。この地点はこれ以外にも近接する少河川の浸食の影響もあり、早期の遺物包含層は確認されなかった。しかし、牛の脣ローム上部からは縄文時代早期末の土器が良好な状態で出土しているほか、擾乱層の上面より集石遺構8基、土坑3基が検出された。

D区

西部にある高地の段丘下にあり、東側に緩やかに傾斜する。このD区は河川による幾度もの浸食を受けたと考えられ、縄文時代早期の遺物包含層は全く確認されなかったが、人規模な削平を受けていた西側を除く耕作上下の擾乱層からII層の上面にかけて、縄文時代早期～中期の遺物が少量ながら確認された。調査はII層上面までを機械により掘削し、部分的に残存しているII層の遺物を手堀りにより確認した。これらはC区の擾乱層と同様、段丘が崩落したために調査区内に流入したものと考えられる。なお、旧石器時代や縄文時代早～中期の遺跡であったと考えられる高台は公園として既に整備が行われており、その際の削平によって文化層は完全に消滅していた。



第7図 C区遭撃配置図 (1 : 800)



第8図 E区造構配置図 (1 : 800)

E区（第8図）

JH河川の北岸にあたり、河川からの高低差は1.5mと、他の調査区に比べ標高が高い。東側に緩傾斜する地形を呈している。E区は良好な土層の堆積が認められ、地形的にも河川の浸食作用を全く受けなかったものと考えられる。耕作土を機械により除去したIV層の上面より大規模な礫群が検出され、更に礫を取り除くと下層より大型のもの1基を含む集石遺構が26基検出されたほか、縄文時代中期前後と思われる土坑も7基検出された。土器は押型文土器や下剥峰タイプが多かったものの、早期全般にわたる遺物を見ることが出来る。石器としては石鏃や尖頭状石器が多くあった。また、V層よりナイフ形石器等の旧石器時代の遺物や爪形文土器、槍先形尖頭器といった縄文時代草創期の遺物も出土している。なお、耕作土中ながら須恵器や布痕土器が採集されたのもこの調査区からである。

F区（第9図）

調査区は西側に緩傾斜しており、土層の堆積は良好であった。文化層は削平されていたものの、II層上面に縄文時代前・中期の土器が出土したため、機械による掘削を一時中断し、遺物の採集を行った。その後IV層上面まで機械により掘削を行った後、手掘りにより包含層の調査を行ったところ、IV層からV層にかけて旧石器時代～縄文時代早期にかけての遺物が多数確認された。検出された遺構は礫群1基、集石遺構8基、土坑3基である。

第4節 検出遺構

集石遺構

A区（第10～16図）

(SI-01)

A区南西部のIV層上面より検出された。72cm×58cmの範囲内に角礫がやや集合した遺構である。礫を取り上げると、長軸78cm、短軸70cm、深さ33cmの楕円形を呈する上坑を確認することが出来る。土坑中には炭が少量確認されたが、礫は殆ど見られない。

(SI-02)

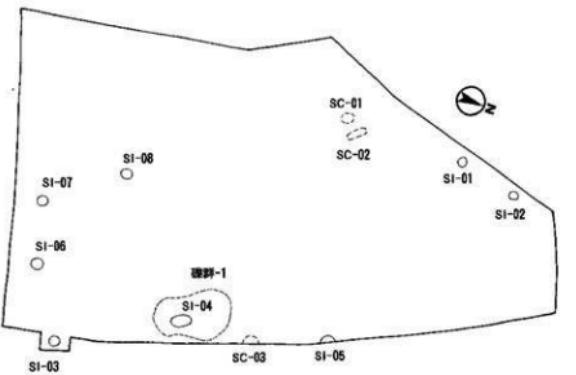
調査区中央部のIV層上部より検出された。132cm×140cmの範囲内に大ぶりの角礫が密集しており、長軸122cm、短軸100cm、深さ15cmの土坑を伴う。土坑は浅いものの、埋土中より大量の炭が確認された。

(SI-03)

南東部の道路際、IV層上部より検出された。165cm×125cmの範囲内に小ぶりの角礫がやや集合する。下位に長軸148cm、短軸122cm、深さ17cmの楕円形を呈する土坑を伴う。

(SI-04)

南東部のIV層上部より検出された。76cm×66cmの範囲内に少數の角礫が疎らながらも集合しており、径約72cm、最深部の深さ13cmの不定形な土坑を伴う。



第9図 F区構造配置図 (1 : 800)

(S I -05)

調査区の南東部、IV層上面より検出された。171cm×100cmの範囲内に大ぶりの角礫の集合が認められる。下部に土坑等は伴わない。

(S I -06)

調査区の南部にあり、IV層上面から検出された。90cm×50cmの範囲内に少數の角礫が若干間隔を持ちながらも集合する。下位には110cm×100cm、深さ10cmの歪な楕円形の土坑を伴う。

(S I -07)

調査区の南東側に位置し、IV層上面より検出された。145cm×95cmの範囲内に小ぶりの角礫ばかりが疎らながらやまとまる。下位にはごく浅い土坑が見られるものの、輪郭等は判然としなかった。

(S I -08)

調査区の南東に位置し、IV層上面より検出された。115cm×132cmの範囲内に大小の角礫が密集する。傾向として、外側にある礫ほど大ぶりのものが多く、内側には小ぶりの破碎した礫が目立つ。集石の下からは径約110cm、深さ25cmの土坑が確認され、土坑上部からは礫が多数確認された。また、土坑の底面付近からは多量の炭も検出されている。

(S I -09)

調査区の南東部、IV層上面より検出された。底辺66cm、高さ82cmの二等辺三角形状を呈しており、大ぶりの角礫が集合する。下部には径約110cm、深さ10cm前後の卵形の土坑を伴う。

(S I -10)

調査区の南東部にあり、IV層上面より検出された。125cm×100cmの範囲内に少量ながら礫が集合する。これらは板状の礫や大ぶりのものが目立つ。下部には長軸120cm、短軸89cmの土坑が確認された。深さは10cm未満と極めて浅いが、これは耕作時に検出面が削平されていた可能性が高い。

(S I -11)

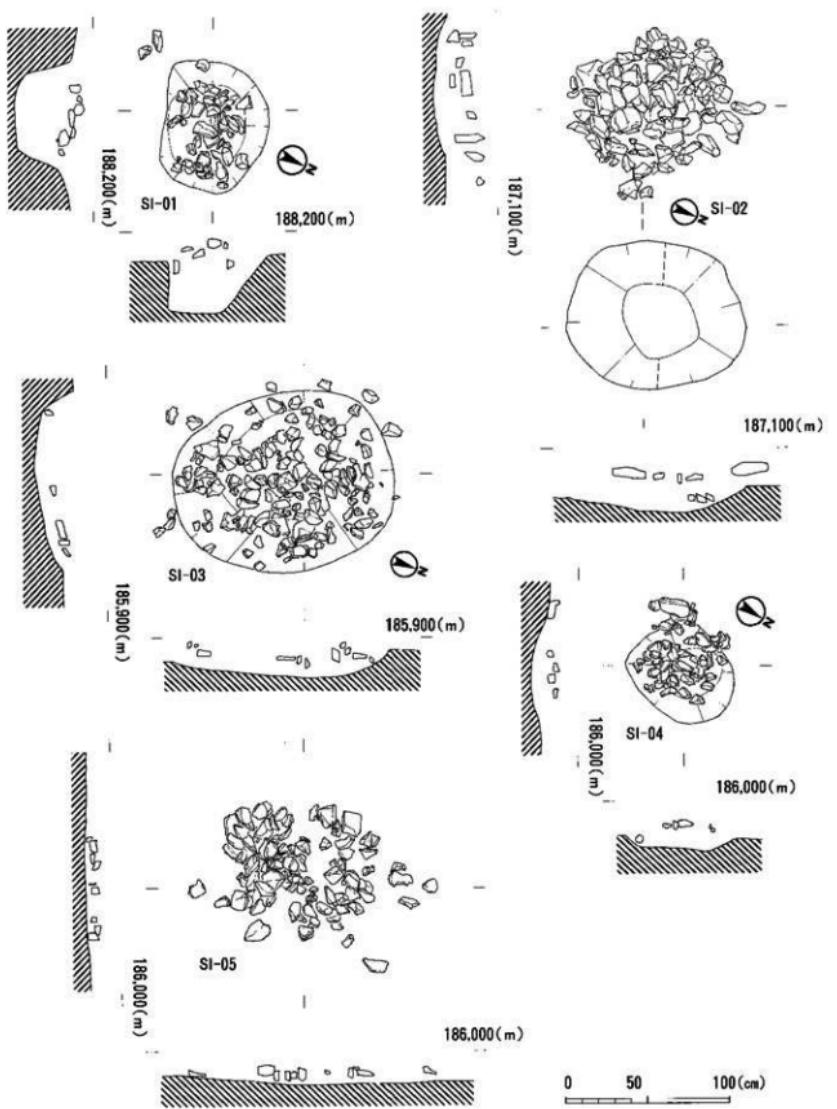
調査区の南東部、S I -09、S I -10等の集石遺構が隣接する地点で、IV層上面より検出された。径115cmの範囲内に大小の礫の密集が見られる。S I -08と同じく、これも外側に大ぶりの石が多く、内側には小ぶりの、熱により破碎したと思われる礫が多い。遺構の下部に径約115cmの土坑が確認されたが、この中は礫が密集しており、覆土からは多量の炭が検出された。また、遺構近くに三角形を呈する板状の礫も確認されている。

(S I -12)

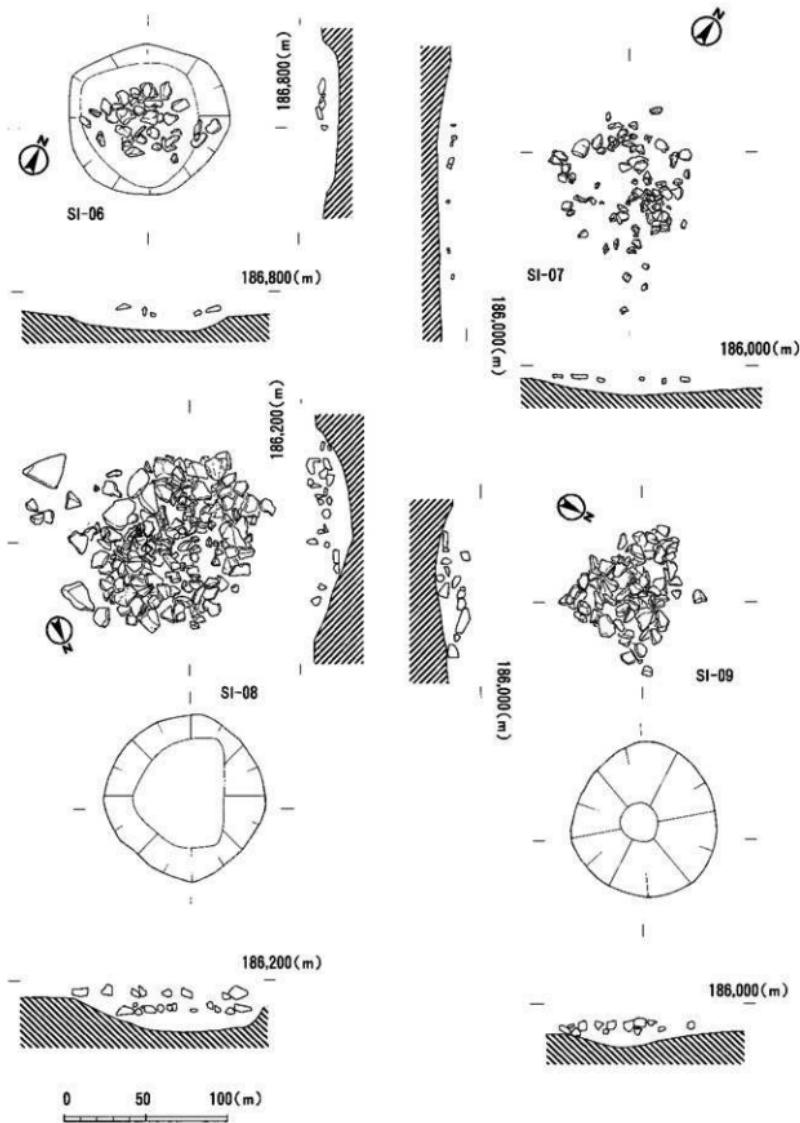
調査区の南東部にて、IV層中より検出された。径約140cmの範囲内に角礫の不規則な集合が見られる。特徴的なのは、この礫の上に扁平な大型の礫が2個並んで配置されている点である。下部には径約138cmの、卵形の土坑があり、土坑中には礫の密集が確認された。なお、この遺構の埋土からも、若干ながら炭が検出された。

(S I -13)

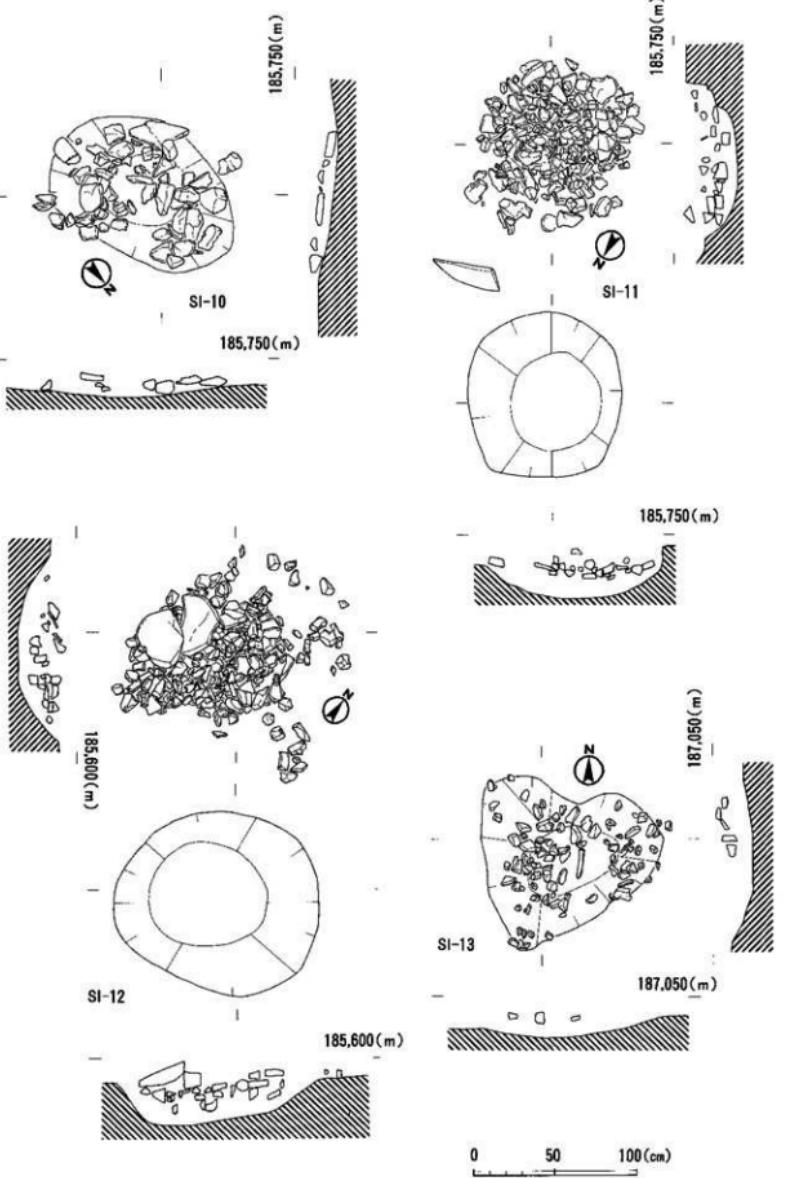
調査区南部の道路に接する地点より確認された。検出面はIV層中部である。132cmの範囲内に間隔を置きながらも小ぶりの角礫が集まる。土坑を伴うが、不定形であり、土坑中に礫や炭等は確認されなかった。



第10図 A区集石造構実測図 (1 : 30)



第11図 A区集石遺構実測図 (1 : 30)



第12図 A区集石遺構実測図 (1 : 30)

(S I -14)

調査区南部の道路に接する地点にあり、IV層中部より検出された。115cmの範囲内に、疎らながら若干の礫のまとまりを見ることが出来る。礫はどれも小ぶりである。また、下部に115cm×82.5cm、深さ15cmの卵形を呈するの土坑が見られる。

(S I -15)

調査区南部、IV層中部より検出された。約70cmの範囲内に、少量ながら礫が集合する。下部に68cm×60cm、深さ約30cmの土坑を伴うことが確認された。土坑中に礫は混入されなかったものの、炭が多量に検出された。

(S I -16)

調査区南部の、道路に接する地点にあり、IV層下部より検出された。150cm程の範囲内に、少量の角礫がややまとまる。中央部には径約50cm、深さ15cmの円形の土坑を伴うことが確認され、埋上により多量の炭が検出された。また、遺構からは楕円文を縦位に施文する押型文土器の口縁部～胴部片が出土した。

(S I -17)

調査区の最も南西部より、IV層下部より検出された。90cmの範囲内に大小の礫が密集する。遺構に伴う径65cm、深さ15cmの土坑からは、大ぶりの礫が配置されていた。

(S I -18)

調査区南西部、IV層下部より検出された。150cm程の範囲内に大小の角礫が集合する。遺構の下部からは深さ10cm前後と浅い不定型な土坑が確認された。

(S I -19)

南西部、IV層下部より検出された。少量の礫が120cmの範囲内に集合する。礫の下部には長軸93cm、短軸75cmの長円形の土坑が確認され、土坑中にも礫が少量ながらも混入することが確認された。

(S I -20)

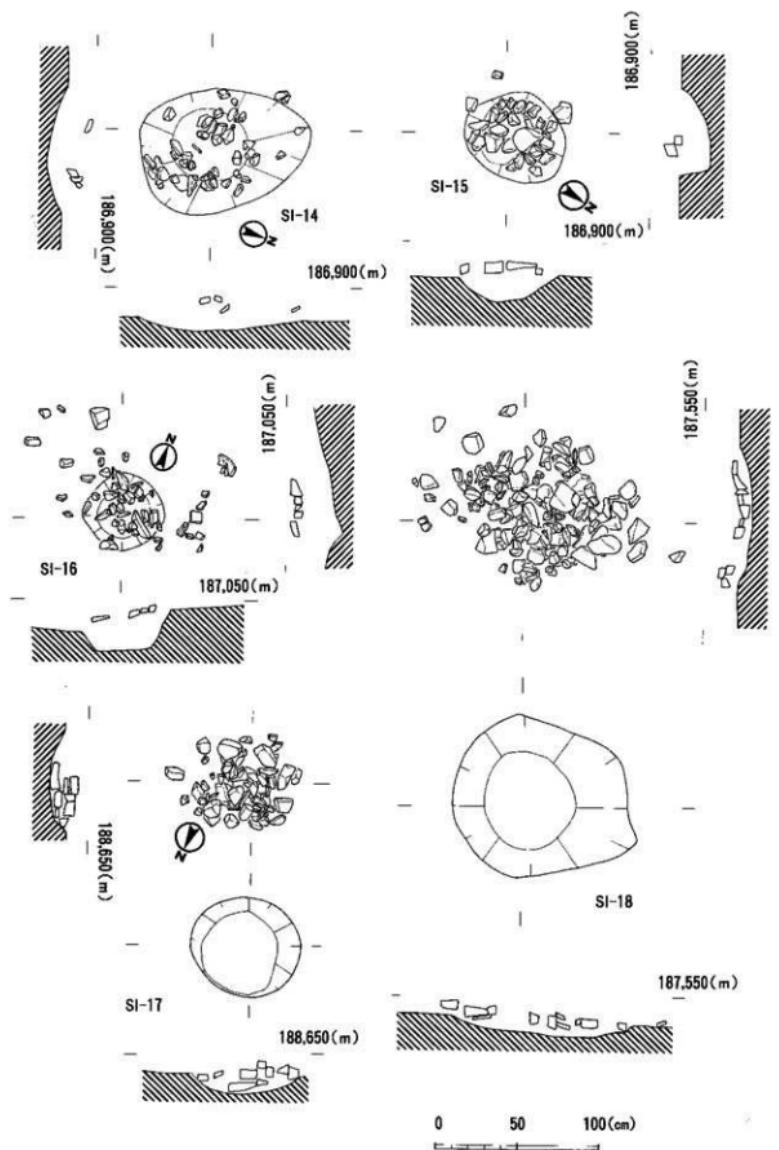
南東部の隅、IV層上部より検出された。礫は散らばっており、まとまりに乏しい。約60cmの範囲内に少量の礫が僅かに集まっているものの、下部に土坑を伴わない。

(S I -21)

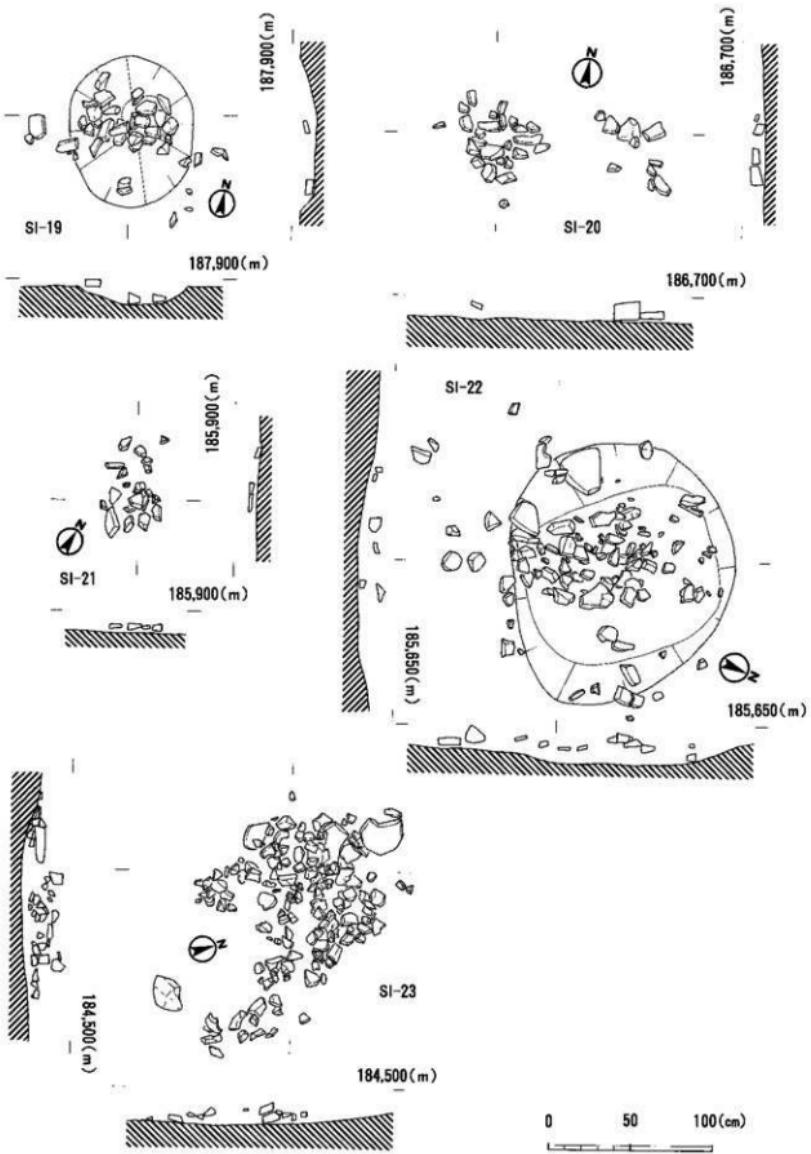
調査区の北東部より、V層上部より検出された。ごく少数の角礫が僅かにまとまったのみの遺構であり、下部に土坑は伴わない。

(S I -22)

調査区の北東部、河川に接する地点付近より確認された遺構である。検出面はV層上部であり、180cmと広い範囲内に疎らながらもまとまりを見ることが出来る。構成する礫の大きさはまちまちである。礫を取り除くと、径約135cm、深さ10cm前後の不定型な土坑を確認することが出来るが、炭等の混入は認められなかった。



第13図 A区集石造構実測図 (1 : 30)



第14図 A区集石遺構実測図 (1 : 30)

(S I -23)

北西部の、河川に接する地点よりV層上部にて検出された。この遺構もS I -22と同じく大小の礫を用いた不定型なまとまりであるが、こちらの方がより密接している。礫の下部には浅い掘り込みを微かに見ることが出来るものの、輪郭が判然としなかった。

(S I -24)

調査区の北西寄りに位置し、V層上部にて検出が確認された。60cmの範囲内に角礫の集中が見られるが、その周囲に大型の扁平な礫が散らばる点が特徴である。土坑は伴わない。

(S I -25)

調査区の中央部やや北部のV層中部を検出面とする遺構である。80cmの範囲内に角礫の密集が見られ、礫の下部には不定型な土坑を伴うことが確認できる。土坑中に炭は確認されなかった。

(S I -26)

調査区の北東に当たる部分より検出された。検出面はV層中部である。約1mの円形を呈し、その範囲内に高密に角礫が存在する。遺構は90cm×110cmの土坑を伴うが、土坑中に礫は少なく、炭が大量に確認された。

(S I -27)

中央部よりやや北部にあり、V層中部を検出面とする。約2mの範囲内に角礫の密集があるが、周辺部は礫が散乱する。遺構は下部に径90cmの土坑を伴う。礫の密集は土坑中からも確認された。

(S I -28)

調査区のやや北部にあたり、V層中部にて検出された。礫はまとまりこそ見られるものの、ほかのものに共通してみられる熱による赤変は見られず、土坑も伴わない。

(S I -29)

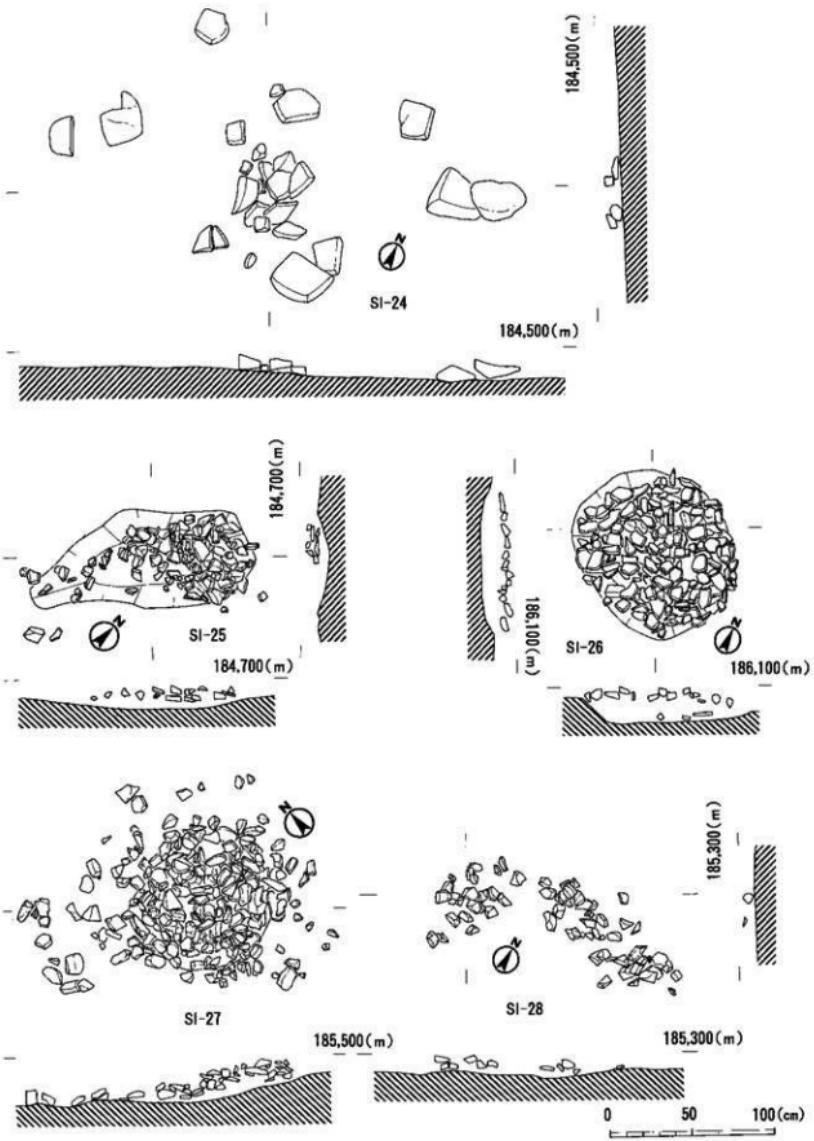
やや北部、V層中部にて検出された。礫は少量であり、まとまりに欠ける。深さ10cm前後、径約60cmの土坑を伴う。

(S I -30)

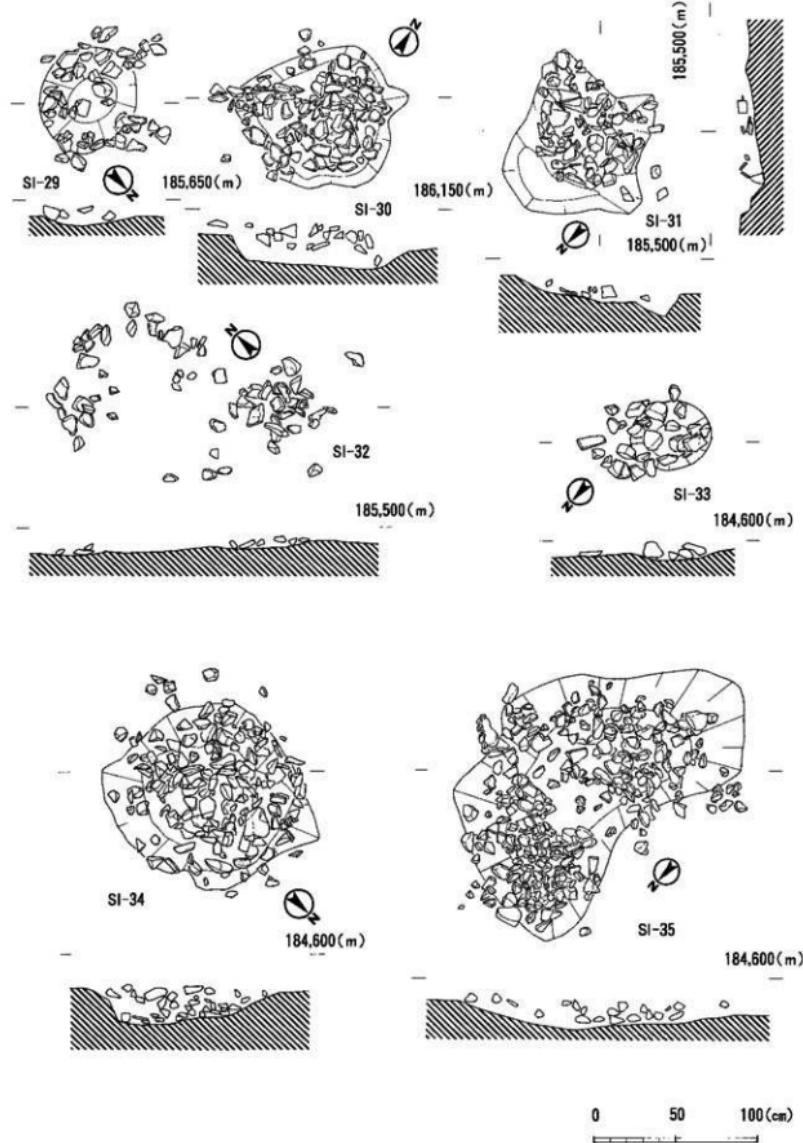
調査区の中央部より北西部に位置し、他の集石より大きく離れた地点に構築されている。110cmの範囲内に角礫の集合があり、下部からも礫が多量に検出された。土坑もその際に確認された。不定形ながら径1m前後、深さ約20cmである。

(S I -31)

調査区の北西部、他の集石と大きく離れた地点でV層下部より検出された。礫の集合は土坑の検出面とはほぼ同一であり、土坑の埋土中には角礫が多数混入していた。土坑の形態は不定形である。



第15図 A区集石造構実測図 (1 : 30)



第16図 A区集石造構実測図 (1 : 30)

(S I - 32)

北東部の、V層中部にて検出された。遺構は東部70cmの範囲で少數ながら礫の集合が認められ、そこから西に礫が散乱する。礫を取り除くと微かな落ち込みが見られたものの、土坑と呼ぶ程明確なものではなかった。

(S I - 33)

調査区の北端より確認された遺構である。検出面はV層下部であり、115cm×50cmの範囲内に礫が集まる。礫は大ぶりの角礫が多く、50cm×40cm、深さ15cmの土坑を伴うが、礫の集合は土坑中にも続いている。

(S I - 34)

調査区の北東部、V層中部より検出された遺構である。径150cmの範囲内に礫が高密に配置される。遺構の下部には径約110cmのやや歪な土坑が確認されたが、その内部にも夥しい量の角礫が検出された。また、埋土中からは炭も多く混入する。

(S I - 35)

調査区の北東部のV層中部より検出された。この周辺からはこのほかにも集石遺構が多数検出された。不定型ながら、200cmの範囲内に角礫が多く集合する。下部にはこれも不定型な土坑を伴い、埋土より礫が多く検出された。

B区（第17～21図）

(S I - 01)

調査区の南西端部より検出された大型の礫群を取り除いた後に確認された。遺構検出面はV層下部である。径約60cmに小ぶりの礫が密集して分布しており、径約40cm、深さ10cmの土坑を伴う。また、礫は土坑中からも確認されている。

(S I - 02)

S I - 01と同じく礫群の下位に構築されたものである。径約100cmの範囲内に大ぶりの礫が散乱している。礫を除くと、遺構の中央部に落ち込みが見られるものの、輪郭が明瞭でない。

(S I - 03)

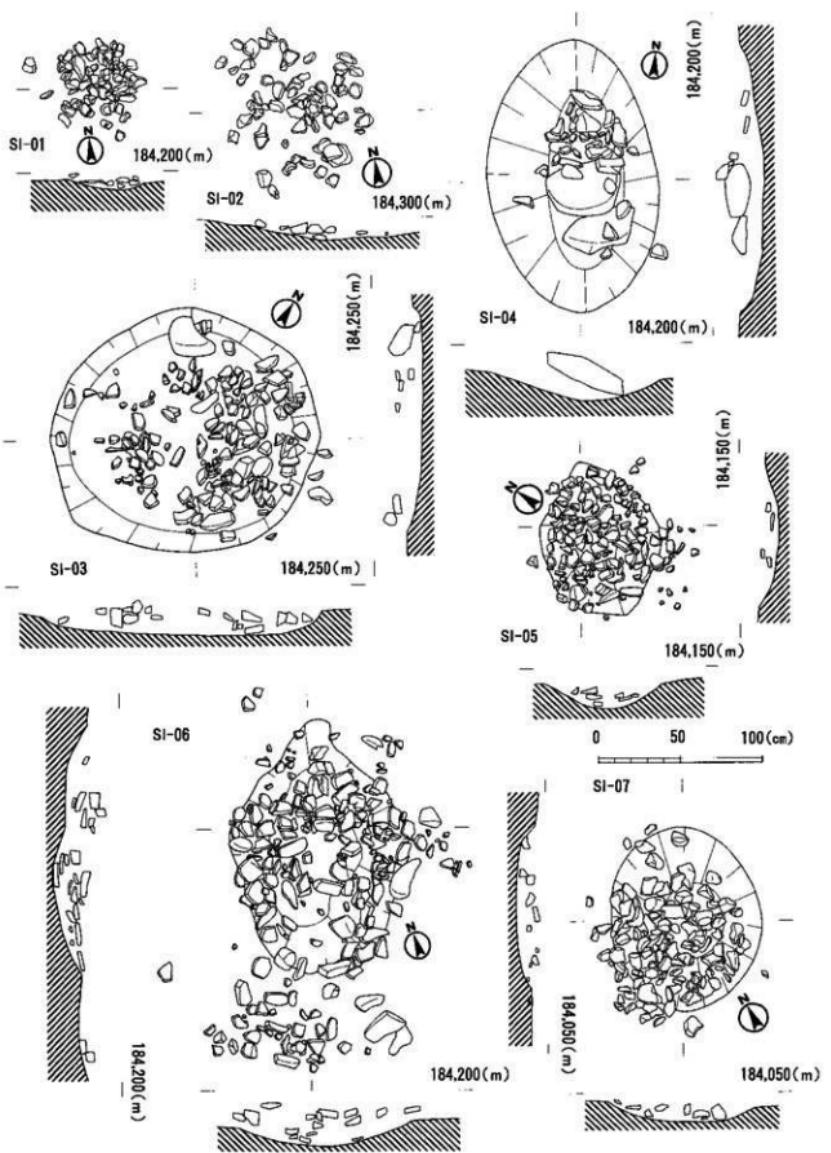
調査区南西部のV層上部より確認された。径約135cmの範囲内に大小の角礫が分布する。径165cm、深さ15cmの上坑を伴い、土坑中にも礫の混入が見られた。

(S I - 04)

調査区の西部、V層上部より確認された。100cm×60cmの範囲内に礫が分布する。特徴的なのは、遺構の南部にひときわ大きい扁平な礫が2個配置される点である。長軸170cm、短軸100cm、深さ20cmの上坑を伴い、土坑中からは炭が少量確認された。

(S I - 05)

調査区の西部より確認された遺構である。検出面はV層上部であり、径約90cmの範囲内に小ぶりの破碎した礫が分布する。100cm×75cm、深さ15cmの、やや歪な長円形の上坑を伴う。土坑中から礫が多く検出された。



第17図 B区集石遺構実測図 (1 : 30)

(S I - 06)

調査区の西部にて検出が確認された。遺構検出面はV層上部である。200cm×150cmの範囲内に大小の礫が分布する。B区は共通して、A区と比較して角礫の割合が少なく、この遺構からも扁平な円礫が多く用いられる。150cm×100cm、深さ20cmの土坑を伴い、土坑内にも礫の密集が認められる。また、炭も少量検出された。

(S I - 07)

調査区西部より、V層上部を検出面として確認された。径100cmの範囲内より礫の集合が認められる。また、114cm×90cm、深さの長円形を呈する土坑を伴う。土坑中には礫が認められたが、炭の検出は微量であった。

(S I - 08)

調査区のやや西よりの地点から確認された。検出面はV層上部である。礫の分布は径約240cmと広汎であるが、高密な集合が認められるのはその中央150cmである。

(S I - 09)

調査区東部より確認された。検出面はV層上部である。径約115cmの範囲に大小さまざまな礫が集合する。115cm×80cm、深さ20cmの土坑を伴う。土坑の上部からは集石より続く礫が確認されたが、下部には炭が少量混入していたものの、礫は検出されなかった。

(S I - 10)

調査区の北端、V層中部より確認された。径約90cmの範囲内に小ぶりの角礫が分布しており、更にその周囲250cm×150cmの範囲に大ぶりの扁平な礫が散乱する。210cm×110cm、深さ15cmの楕円形を呈する土坑を伴う。

(S I - 11)

調査区北東の縁辺部より、V層中部を検出面として確認された。径約120cmの範囲に礫が分布する。遺構下部からは66cmの土坑が確認された。

(S I - 12)

調査区南西部のV層下部より検出された。径約160cmの範囲内に礫が分布する。面的に敷き詰められた状態であり、土坑等は伴わない。

(S I - 13)

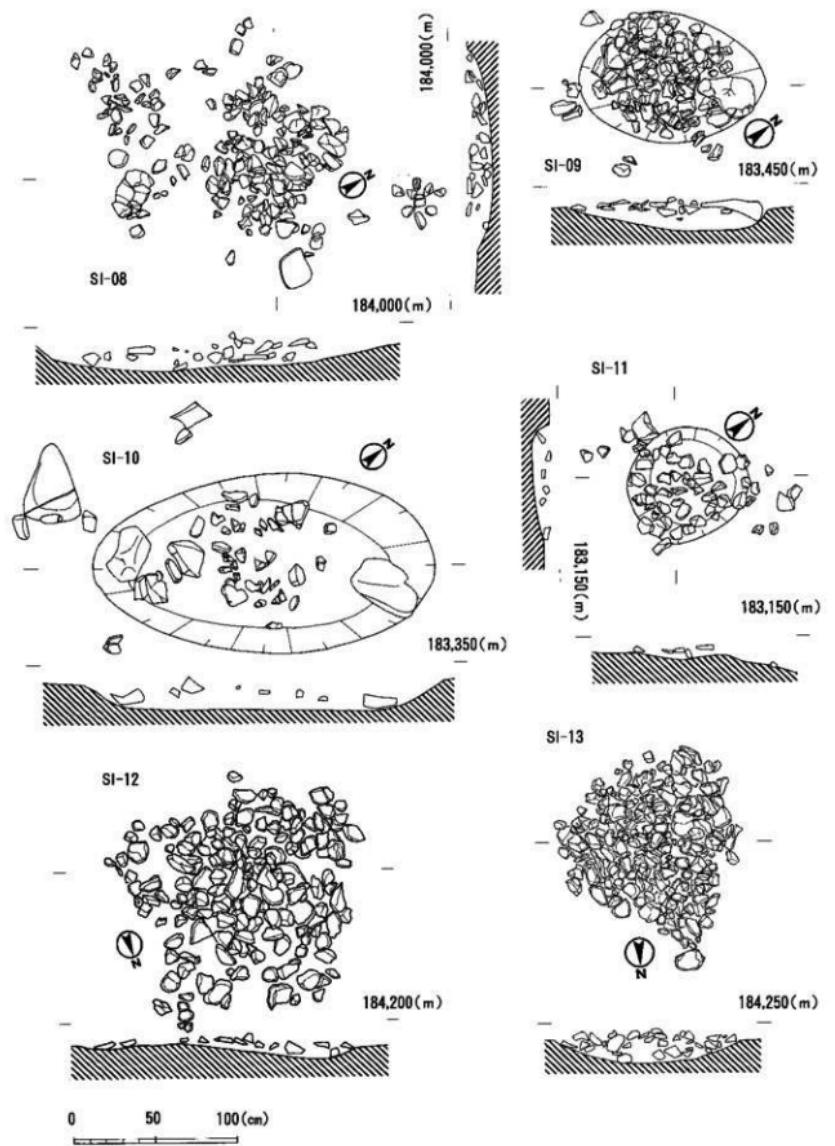
調査区南西の縁辺部にて、V層下部より検出された遺構である。底辺100cm、高さ115cmのに等辺三角形状の範囲に小ぶりの礫が密集しており、深さ20cmの土坑を伴うが、その内部から多くの礫を見ることが出来た。

(S I - 14)

南西部のV層下部より検出された。径約100cmの範囲内に少數の礫が分布する。土坑等は伴わない。

(S I - 15)

調査区南西部、V層下部より検出された遺構であり、径60cmと狭い範囲内に礫が密集する。径約40cm、深さ10cmの土坑内にも礫が密集していた。



第18図 B区集石構造実測図 (1 : 30)

(S I - 16)

調査区南西部、V層下部より、付近の礫群を取り除いた時点で検出された。160cm×80cmの範囲内に礫が見られるが、礫の分布は中央部では疎らであり、周辺部にドーナツ状に固まって分布する。なお、僅かな落ち込みはあるものの、土坑としての明確な落ち込みは見られなかった。

(S I - 17)

調査区のやや西寄りにて、V層より検出された。130cm×100cmの範囲に分布が確認できる。下部には深さ15cmの上坑を伴う。

(S I - 18)

調査区のやや西寄り、S I - 17に隣り合うように検出された。130cm×80cmの範囲に礫が分布する。遺構下部には深さ10cmほどの土坑が確認されたが、覆土からも礫が多数検出された。

(S I - 19)

調査区北東部、V層下部より検出された。径約100cmの範囲内に礫の分布が見られるが、遺構周辺にも礫が散乱しており、輪郭が判然としない。また、深さ10cmの土坑を伴う。

(S I - 20)

調査区北部より、V層下部を検出面として確認された。径約90cmの範囲に礫が分布している。礫はに面的に拡がっており、また明確な土坑に乏しい。

(S I - 21)

調査区のやや北部より検出された。径約84cmに大ぶりの礫が分布する。深さ10cm足らずの土坑を伴うが、土坑中は礫が殆どを占める。

(S I - 22)

調査区中央部よりやや北寄りあり、検出面はV層下部である。径約60cmの範囲中に礫が集中する。深さ20cmの土坑を伴い、土坑中は礫が多く入り込む。

(S I - 23)

調査区北東部、他の集石遺構より大きく離れた位置にある。検出面はV層下部である。約70cmの範囲内に礫が集中する。遺構下部に上坑は認められない。

(S I - 24)

調査区東部より、V層下部にて検出された。径85cmの範囲に礫が集合する。深さ15cmの土坑を伴い、覆土中にも礫が検出される。

(S I - 25)

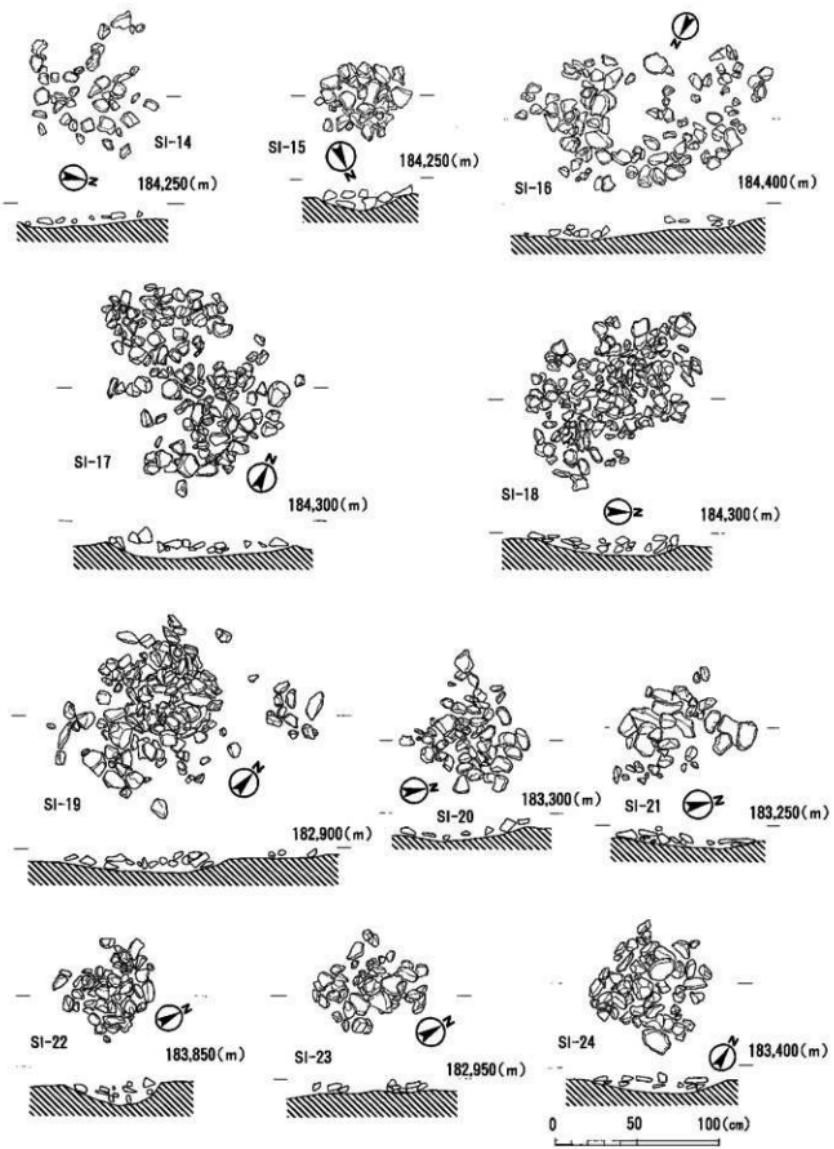
東部のV層下部より検出された。径約100cmの範囲に礫が分布する。下部には僅かな落ち込みが見られるが、輪郭が明瞭でない。

(S I - 26)

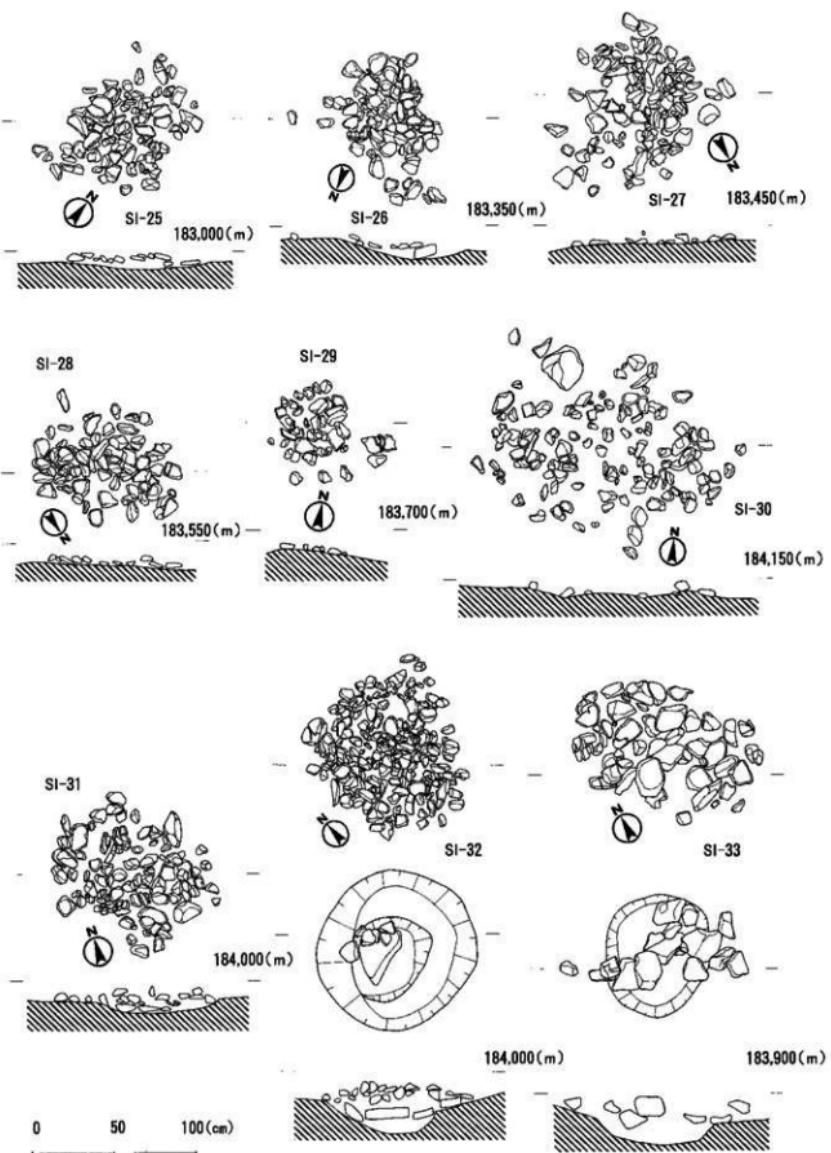
東部より、V層下部を検出面として確認された。100cm×80cmの範囲に礫の密集を見ることが出来る。下部には10cm前後の土坑を伴う。

(S I - 27)

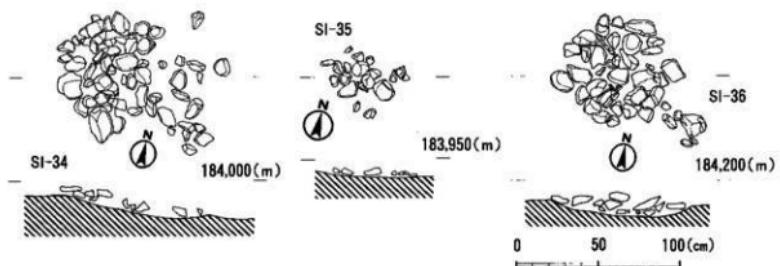
調査区の東部に当たる地点より、V層下部にて検出された。この地点は集石遺構が集中して検出さ



第19図 B区集石遺構実測図



第20図 B区集石造構実測図 (1 : 30)



第21図 B区集石遺構実測図 (1 : 30)

れている。礫の分布は120cmの範囲内であり、面的に敷かれる一方、土坑は確認されなかった。

(S I - 28)

調査区の東部より、V層下部で検出された造構である。100cm程の範囲内に礫が面的に分布している。土坑は伴わない。

(S I - 29)

東部のV層下部にて検出された。45cmの範囲に少数の礫が分布している。土坑として認識すべき落ち込み等は確認されなかった。

(S I - 30)

調査区の南部より、V層下部を検出面として確認された。約185cmの範囲に礫が分布する。構成される礫は大小さまざまである。土坑は伴わない。

(S I - 31)

調査区の南部の壁際に位置する。検出面はV層下部である。約100cmの範囲に礫の分布が認められる。礫の集中は南側にあり、その位置には深さ10cm程度の土坑が確認された。土坑中からも礫が検出されている。

(S I - 32)

調査区の西部より、V層下部にて検出された。120cmの範囲に礫が集中する。構成される礫は小ぶりのものが多い。下部には径1m、深さ30cmを越える土坑が確認された。土坑内に角礫が少数混入していたが、土坑の底部より大型の扁平な礫が数個検出された。

(S I - 33)

調査区のやや西側より、V層下部の調査中に確認された。80cm×130cmの範囲内に礫が分布する。礫は大型のものが多い。下部には70cm×80cmの土坑を伴うが、土坑中より礫は検出されなかった。

(S I - 34)

調査区の南西部、層上部には礫群が検出されたほか、集石造構が密集する地点より、V層下部を検出面として確認された。100cm程の範囲内に礫が分布している。礫を取り除くと僅かに落ち込みが確認されたが、輪郭が判然としなかった。

(S I - 35)

小型の集石造構である。調査区の南西部のV層下部を検出面とする。約40cmの範囲内に少数の礫が分布する。土坑は伴わない。

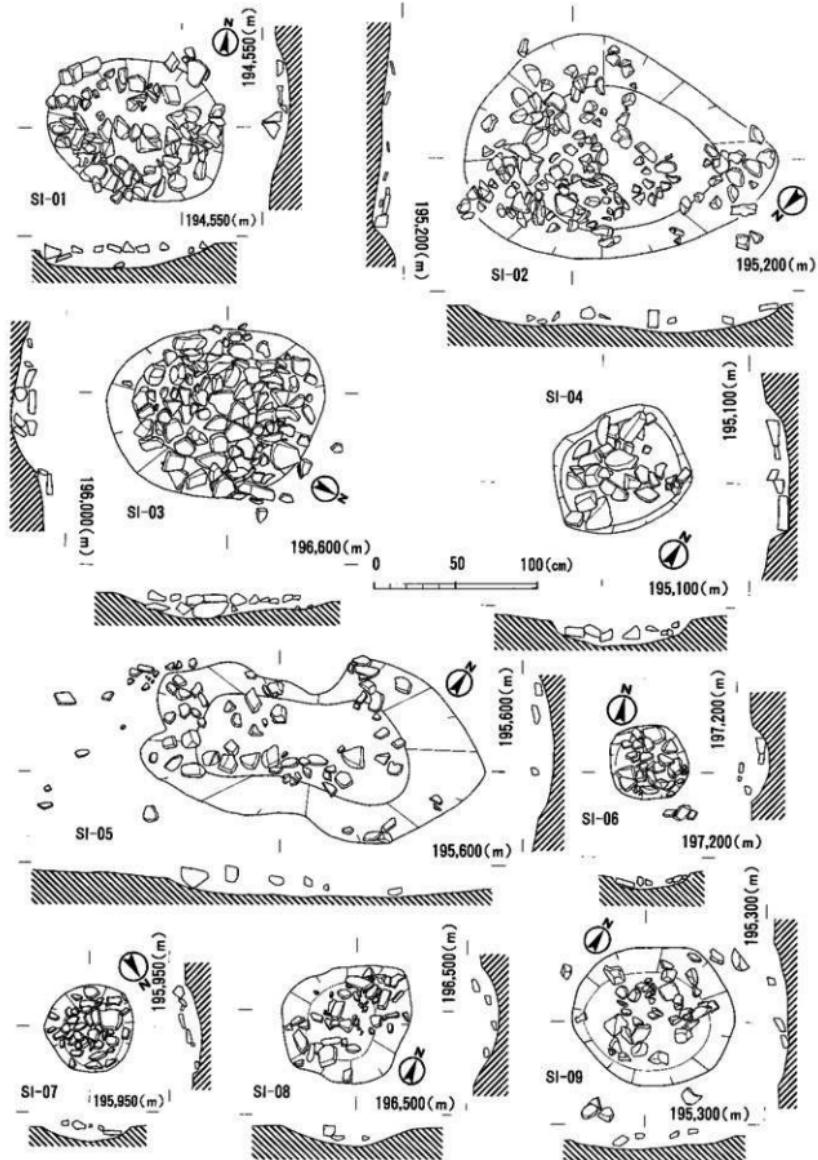
(S I - 36)

調査区南西部の突出した地点より、V層下部にて検出された。約75cmの範囲に礫が分布している。下部には深さ10cmの土坑を伴い、土坑中から小ぶりの礫が多数検出された。

C区（第22図）

(S I - 01)

調査区東部のIV層中部より検出された。120cmの範囲中に大ぶりの角礫が多く分布する。下部には125cm×100cmの楕円形を呈する深さ15cmの土坑を伴う。土坑中には礫は少量のみである。炭等は僅か



第22図 C区集石造構実測図 (1 : 30)

に認められた。

(S I -02)

調査区西部より、IV層中部を検出面として確認された遺構である。200cm×150cmの広い範囲内に疊が分布しているが、それは特に北東部に集中している。構成される疊は小振りのものが多い。疊の分布とほぼ同じ形態の土坑を伴う。

(S I -03)

調査区のほぼ中央部、南東部へ傾斜する地点より検出された。検出面はIV層中部である。径130cmの範囲に大ぶりの角疊が多く集合する。120cm×150cm、深さ10cmの上坑を伴い、上坑の検出中から多くの疊が確認された。また、土坑中央部にはひときわ大ぶりの疊が配置されていた。

(S I -04)

調査区中央部やや南側のIV層下部にて検出された。85cm程の範囲内に少量ながら扁平な疊の多い集合を見ることが出来る。径約80cmの、やや歪んだ土坑を伴い、土坑の底部にまで疊が認められる。

(S I -05)

250cm×100cmの範囲内に疊らながら角疊が分布しているのが認められる。調査区北部の境界付近より、IV層上部を検出面として確認された。不定型な土坑を伴う。

(S I -06)

調査区北西部の境界付近、IV層上部を検出面として検出された。径約50cmの範囲内に角疊の密集が見られ、下部には疊が多数確認された土坑を伴う。

(S I -07)

調査区南部の境界付近より、IV層下部にて検出された。径60cm程の範囲に角疊が分布している。下部には疊の分布と同じ大きさの、深さ10cmの上坑を伴うが、疊の検出は少量のみであった。

(S I -08)

調査区南西部より検出された遺構である。検出面はIV層下部であり、70cm×100cmの範囲に大小の角疊が分布するが、他の遺構と比較すると、疊のは少量である。下部には不定形の土坑を伴う。

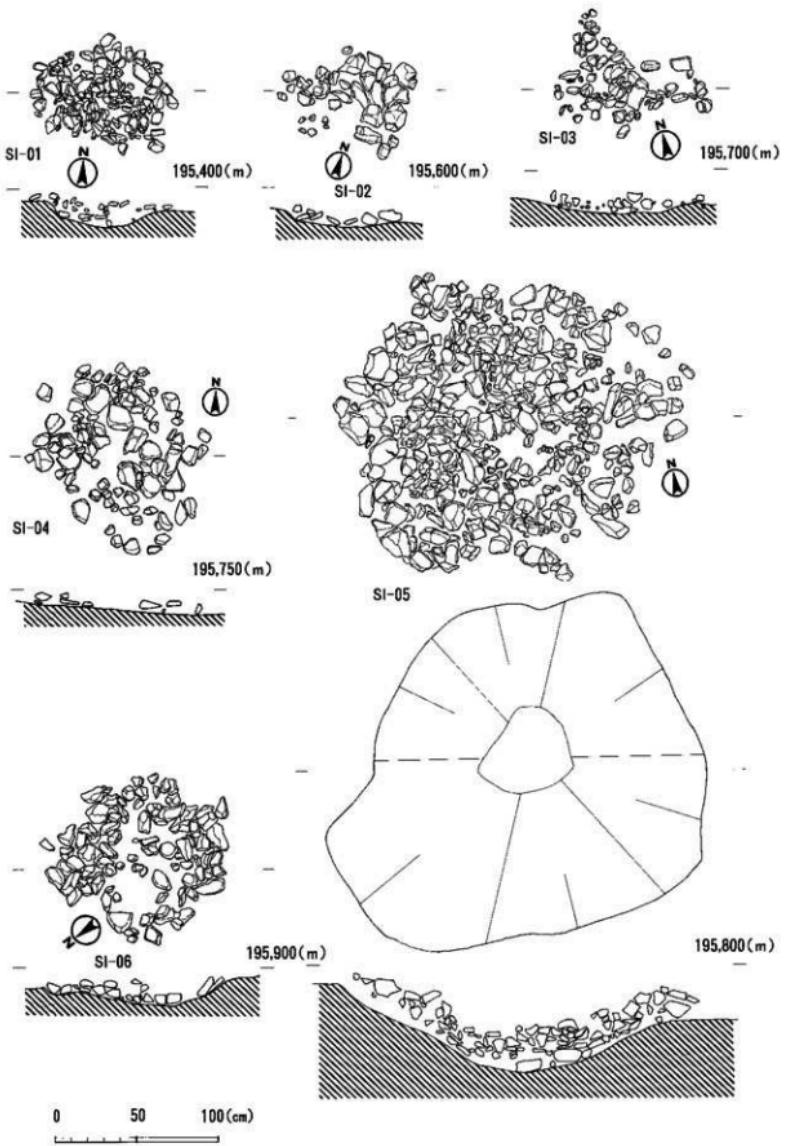
(S I -09)

調査区のほぼ中央部より検出された遺構である。検出面はIV層下部である。径約100cmの不定型な土坑を伴うが、この上坑を中心として少數の疊が分布する。

E区（第23～25図）

(S I -01)

調査区西部の集石遺構の群集する中では最も東側にある。検出面はIV層中～下部100cm×70cmの範囲内に小ぶりの角疊が分布する。下部には深さ20cmを越える、疊の密集した深い土坑を伴う。



第23図 E区集石遺構実測図

(S I -02)

集石遺構の群集するグループの東部、IV層中～下部を検出面とする。用いられる角礫は大ぶりのものが目立つ。径約70cmの範囲内に礫の分布が見られ、下部には10cm未満の浅い土坑を伴う。

(S I -03)

集石の群集からは東部に位置し、IV層中～下部を検出面として確認された。80cm×110cmの範囲に不定型ながら小型の角礫が分布する。下部には輪郭の判然としない深さ10cm程の土坑を伴うが、土坑検出中も覆土より破碎したようた小ぶりの礫が多量に検出された。

(S I -04)

S I -03と同じく東部にあり、IV層中～下部にて検出された。径約120cmの範囲に角礫がやや疎らながら分布する。下部に土坑は伴わない。

(S I -05)

本遺跡中最大の集石遺構である。E区の中央部、集石遺構のグループからは東側に構築される。径約200cmの範囲に大小の角礫が密集する。遺構は周縁部が最も高く中心部で大きく凹む。下部には径約220cmのやや歪な土坑を伴う。この土坑の深さは40cmであり、覆土にも礫が密集していた。土坑の床面付近から検出された礫は、上部に配置される礫よりも大ぶりのものが多い。他にも覆土中からは炭も多く確認されている。

(S I -06)

集石グループのやや東側、上層から検出された礫群一の東端にあたる地点より検山された。検出面はIV層中～下部である。深さ10cmを超える土坑を伴っており、土坑中も礫が多く混入していた。

(S I -07)

集石の群集からはやや東側にあり、IV層中～下部より検出された。100cm×150cmの範囲内にやや疎らながら角礫が分布する。深さ10cm足らずの土坑を伴うが、土坑中からの礫の検山は少量のみに留まった。

(S I -08)

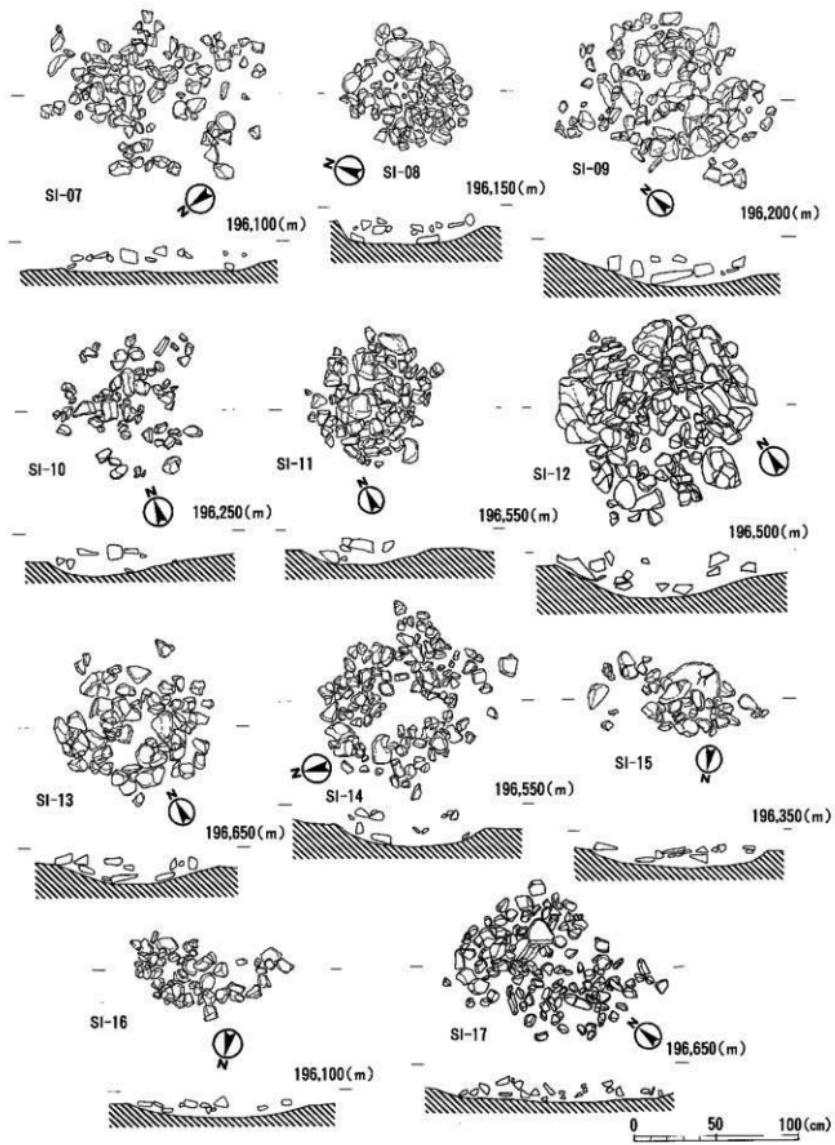
集石の群集地からは東南部にあたる。検出面はIV層中～下部であり、径85cmの範囲より礫の集中が見られる。下部からは深さ20cm近くの土坑が確認され、覆土にも多くの礫が混入していた。

(S I -09)

集石遺構のグループの中では南側に位置し、IV層中～下部より検出された。100cm×150cmの範囲に礫が分布する。下部には深さ15cmの土坑を伴うが、土坑覆土中にも礫が多く検出された。殊に中央部床面付近には、扁平な礫の配置が確認された。

(S I -10)

集石遺構のグループ中ではやや東側に属するIV層中～下部より検出された遺構である。径約95cmの範囲内にやや疎らながら礫が分布する。深さ約15cmの土坑を伴う。



第24図 E区集石遺構実測図 (1 : 30)

(S I -11)

集石造構の群集のほぼ中央部に位置しており、IV層中～下部を検出面とする。約90cmの範囲内に疊が密集する。下部には深さ15cmの土坑を伴い、覆土中からも多量の疊が検出された。

(S I -12)

集石造構のグループからは南側にある。上層の疊群一を取り除いたIV層中～下部にて検出された。径140cmの範囲に疊が集中しているが、周縁部に大ぶりの疊が用いられ、中央部の疊は小ぶりであったり、破碎したりしている。下部には深さ20cmを超える土坑を伴うが、疊はその覆土からも多く検出されている。

(S I -13)

集石造構の群集の中央部付近にあり、検出面は他のものと同じくIV層中～下部である。径約90cmの範囲内に角疊が分布する。深さ15cmの土坑を伴い、覆土からも疊が多量に検出された。

(S I -14)

集石造構のグループの中央部寄り、IV層中～下部を検出面とする。径約130cmの範囲内に角疊が集合するが、疊は特に周縁部に多く、中心部には空洞状である。下部に土坑を伴うが、土坑中からも多数の疊が確認されている。

(S I -15)

集石造構の群集からは南部にあたるIV層中～下部より検出された。径約80cmの範囲に疊の集合が認められるが、疊は一部周辺にも散乱している。深さ20cm足らずの土坑を伴い、疊はそこからも検出されている。また、用いられる疊は板状のものが多いのも特徴である。

(S I -16)

集石造構群の南部、IV層中～下部より検出された。50cm×100cmの範囲に疊が分布する。疊を取り除くと僅かな落ち込みが認められるが、輪郭が判然としない。

(S I -17)

集石造構群の中央部よりやや北側、他の集石造構より離れた位置にある。検出面はIV層中～下部であり、140cm×100cmの中に疊が分布する。下部には明確な土坑は確認されなかった。

(S I -18)

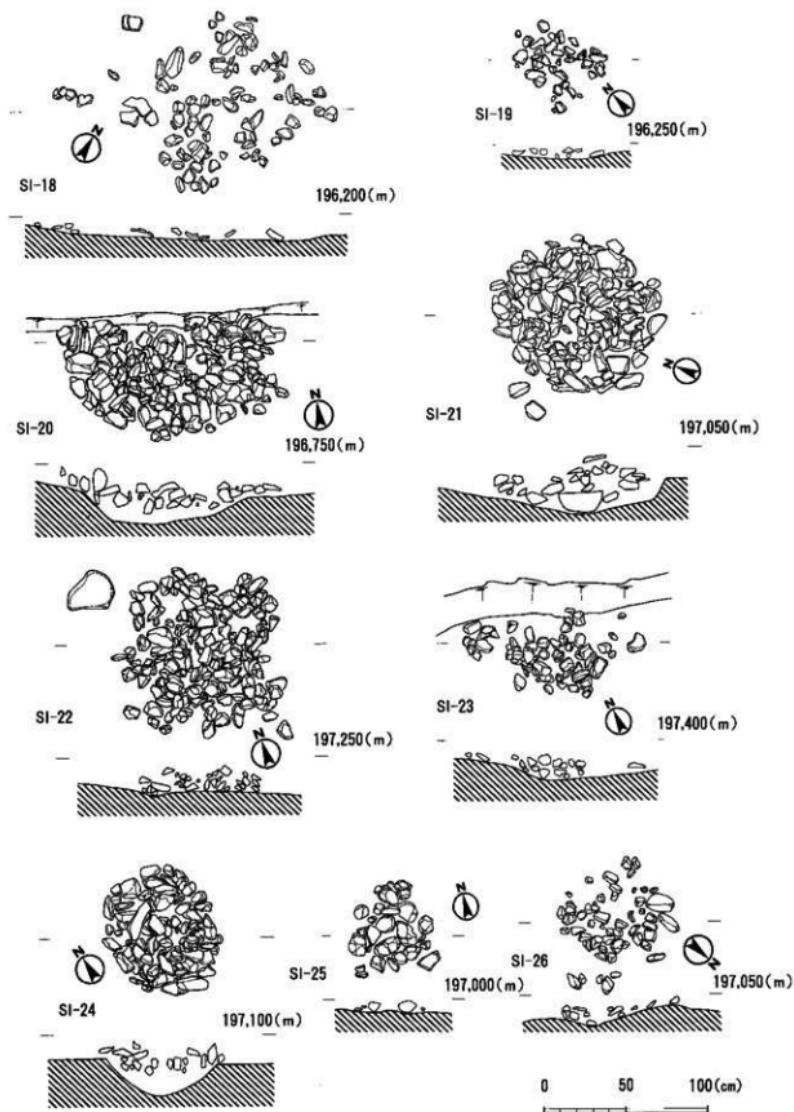
集石造構群の北部より、IV層中～下部にて検出された。径約180cmの範囲内に疊ながら角疊の分布が認められる。土坑は伴わない。なお造構内から、外面に条痕が施文された、円筒状の器形を持つ土器片が検出された。

(S I -19)

集石造構の群集の北部、調査区の境界部近くで検出された。径約60cmの範囲に小ぶりの角疊が分布する。下部には僅かな落ち込みがあるものの、明瞭な輪郭は確認できなかった。

(S I -20)

集石造構群の北西部より、IV層中～下部にて確認された。境界部であったため、南半分しか検出できなかった。径約150cmの範囲内に角疊の密集が見られる。下部には深さ20cmの土坑が検出され、覆土から多くの疊が確認されたが、床面付近に疊は見られず、炭が検出されたのみであった。



第25図 E区集石遺構実測図 (1 : 30)

(S I -21)

集石遺構の群集からは西側にあたる。遺構検出面はIV層中～下部であり、径100cmの範囲に高密な礫の分布を見ることができる。下部には深さ20cmを超える土坑を作り、その検出中にも礫が多量に検出された。床面付近からは一際人型の礫が配置されていた。

(S I -22)

集石遺構の群集のうち西側にあたる。検出面はIV層下部であるが、礫は多くが浮き上がっており、本来ならば他の集石遺構と同じIV層中～下部であったと推測される。径約100cmの範囲中に礫が分布する。また、遺構北西部には扁平な礫が配置されている。土坑は確認されなかった。

(S I -23)

検出された集石遺構の中で最も西側の、IV層中～下部で検出された。調査区の境界付近であったため、遺構の一部は調査できなかったが、径約100cmの範囲内に礫が分布する、円形の遺構であったと考えられる。下部には土坑を伴っており、礫の混入が確認された。

(S I -24)

集石遺構のグループからは西部にあたる。検出面はIV層中～下部であり、径約85cmの範囲に礫が密集していた。下部には深さ25cmとなる、断面がポウル状の土坑を作り、礫の検出は上部のみであり、下部からは炭が多く混入していた。

(S I -25)

集石遺構群の西側にあたる、IV層中～下部より検出された。径60cmの範囲内に、少量ながら礫の分布が認められる。土坑は伴わない。

(S I -26)

集石遺構のグループ西側、上層に礫群—2の検出された地点にあたる。検出面はIV層中～下部であり、径85cmの範囲に小ぶりの礫が分布する。礫を取り除いた時点で落ち込みを認め、不定型な深さ10cm前後の土坑を作ることが分かった。

F区（第26、27図）

(S I -01)

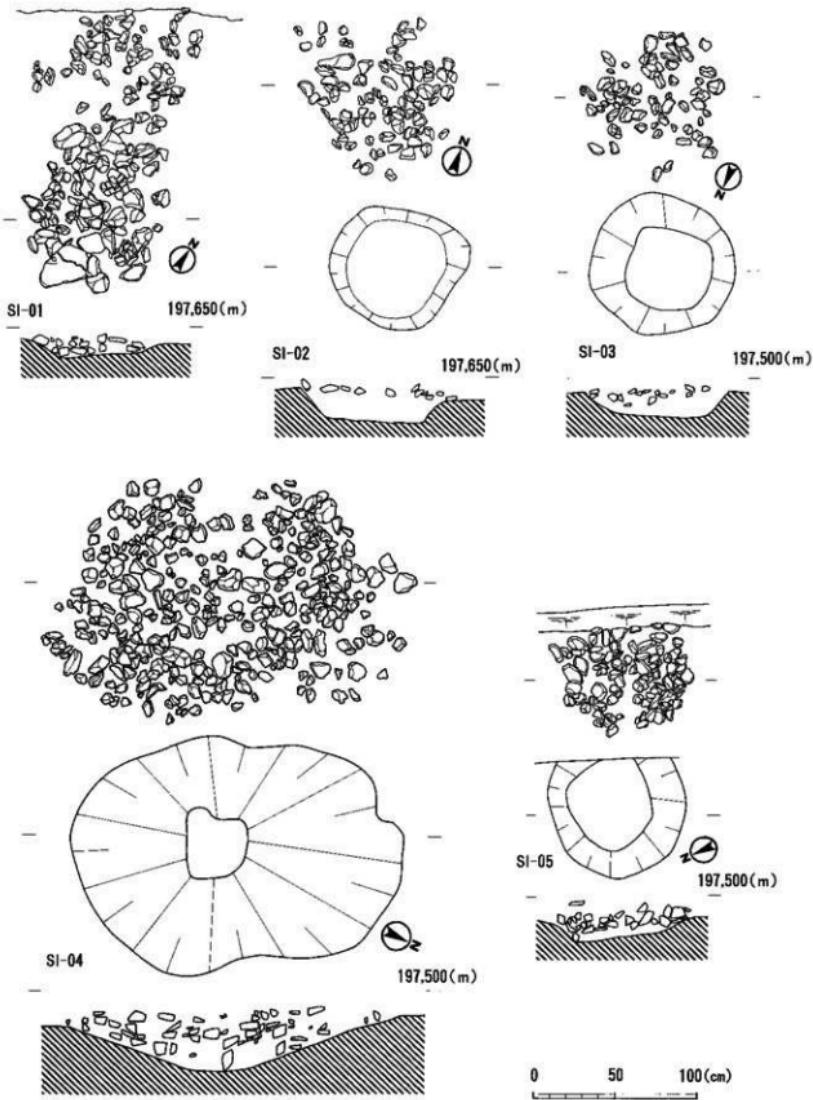
調査区北部のIV層中部より検出された。径約90cmの範囲に礫の密集が認められるが、西部の境界に向かい礫が散乱する。密集地の下部には深さ10cmを超える土坑が確認され、その覆土からも礫が多く検出された。

(S I -02)

調査区北部にて、IV層中部より検出された。径約100cmの範囲内にやや疎らながら角礫が分布する。径約85cm、深さ15cmの土坑を作り、覆土中には炭が少量確認されたのみで礫は混入されなかった。

(S I -03)

調査区の南東部の境界部、IV層中部より検出された。径約100cmの範囲内にやや疎らながら角礫が分布している。下部には径約90cm、深さ15cm程の土坑を作り、覆土から多くの礫が検出された。



第26図 F区集石遺構実測図 (1 : 30)

(S I - 04)

調査区南東部で検出された、礫群一を取り除いたIV層下部より検出された。250cm×170cmの範囲内に礫の密集が認められる。下部には礫の密集とほぼ同じ形態の土坑を確認することが出来、E区S I - 05と同じくロート状の断面を呈す。覆土からも礫の密集が確認された。

(S I - 05)

調査区東側にて検出された。検出面はIV層下部である。遺構は調査区の境界にかかっており、全体の形態は判別しづらいが、径約90cmの円形を呈していたものと考えられる。下部には集石部とほぼ同じ大きさの、深さ10cmを超す土坑が確認され、覆土からも礫が多く検出された。

(S I - 06)

調査区の南東部より、V層上面を検出面として確認された遺構である。径約90cmの範囲内より大小の礫が分布する。礫は周縁部のものほど大きく、中心部に向かうほど小振りのものが多い傾向にある。下部には不定型な深さ10cmの土坑を伴い、土坑内からは礫が多く検出された。

(S I - 07)

調査区の南部のV層上面より検出された。径約120cmの範囲内に角礫の密集が見られる。下部に不定型な、深さ25cmの土坑を作り、土坑の調査中にも多くの礫が検出された。

(S I - 08)

調査区の南部、IV層下部を検出面として確認された。径約100cmの範囲に礫が分布するが、一部北側に向けて礫が散乱する。下部には不定型な深さ10cm未満の土坑を伴うが、土坑中から礫は検出されなかった。

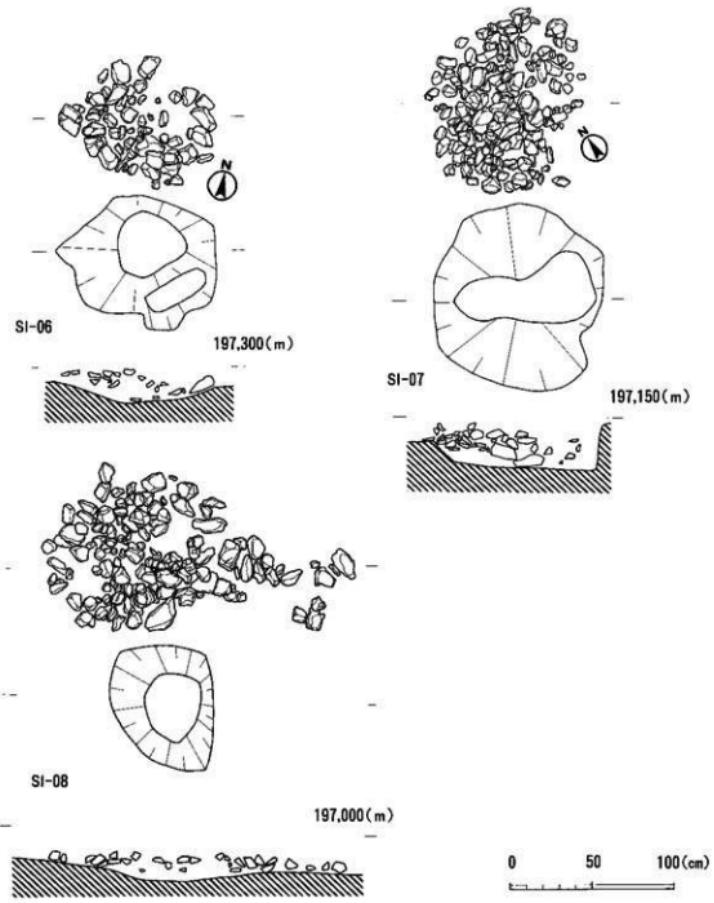
土坑（第28図～30図）

(A区SC-1)

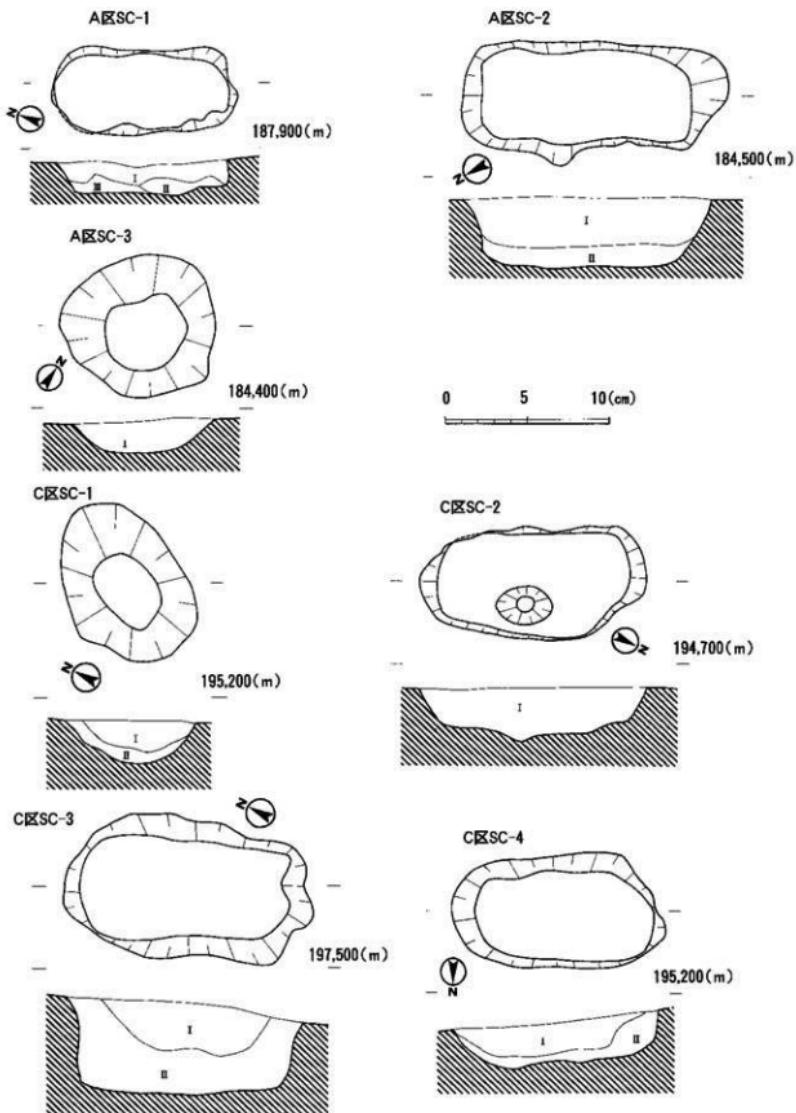
調査区中央や東側の、IV層上面にて検出された。長軸125cm、短軸55cmの長円形を呈す。検出面から高い傾斜で床面に達する。深さは18cmと浅い。床面に大きな凹凸は認められない。覆土I層は砂粒と黄橙色の軽石が高密に混入する。II層はI層とIII層の漸移層であり、III層は粘質を伴う明黄褐色の層である。III層からは炭と共に焼礫が3個検出された。遺構と壁面及び床面の境界は極めて明瞭であるため、近世以降のものと考えられる。

(A区SC-2)

調査区北部、集石遺構が密集する地点のV層上部より検出された。長軸175cm、短軸70cmの、やや歪んだ長円形を呈す遺構である。深さは約50cm、床面は平坦である。覆土はI層が黒褐色の硬質な層であり、今回の調査でIV層と設定した層である。II層はその漸移層である。床及び壁面との境界は明瞭とは言い難い。なお、図面に記した点は遺物が出土した地点である。出土した石器は砂岩製であり、打面調整を密に行う。



第27図 F区集石造構実測図 (1 : 30)



第28図 土坑実測図 (1 : 30)

(A区SC-3)

調査区の北部より、V層上部にて検出された遺構である。やや不定形ながら、径約100cmの円形に近く、土坑の断面はボウル状であり、平坦な床面を形成しない。覆土はSC-02と同じくIV層であり、他層の堆積を観察することはない。遺物等は確認されなかった。

(C区SC-1)

調査区の南東部の傾斜地付近より、V層中部にて検出された。長軸115cm、短軸75cmの楕円形を呈する。深さは約30cm、土坑の断面形はボウル状であり、明確な床面を持たない。覆土のI層は褐色の堅く締まった層である。粘性は殆ど認められない。II層は粘土質になっており、色調はI層よりも白味を帯びる。遺物や混入物は認められなかった。

(C区SC-2)

調査区の西部、V層中部にて検出された。長軸150cm、短軸75cmのやや歪な楕円形である。土坑は急な傾斜を保ったまま深さ30cmで床面に達している。床面は平坦に近いが、遺構東部に25cm×35cmの楕円形の落ち込みを確認することができる。覆土はSC-1 I層と全く同じであり、またそれ以外の土層は確認できなかった。

(C区SC-3)

調査区の西端部に位置し、V層中部を検出面とする。形態は長軸165cm、短軸95cmのやや歪な楕円形を呈する。遺構は約60cmで平坦を保った床面に至る。覆土のI層、II層はそれぞれSC-1のI層、II層と同一である。断面を見る限り、土坑の構築時の生活面は更に上層であったと考えられる。

(C区SC-4)

調査区の東側にあり、これもV層中～下部を検出面とする。長軸145cm、短軸75cmのやや歪んだ長円形を呈しており、床面までの深さは25cmである。覆土のI層はSC-1と同じであるが、II層の色調は黒褐色であり、大変固く締まっている。調査区のV層の上質に近い。

(E区SC-1)

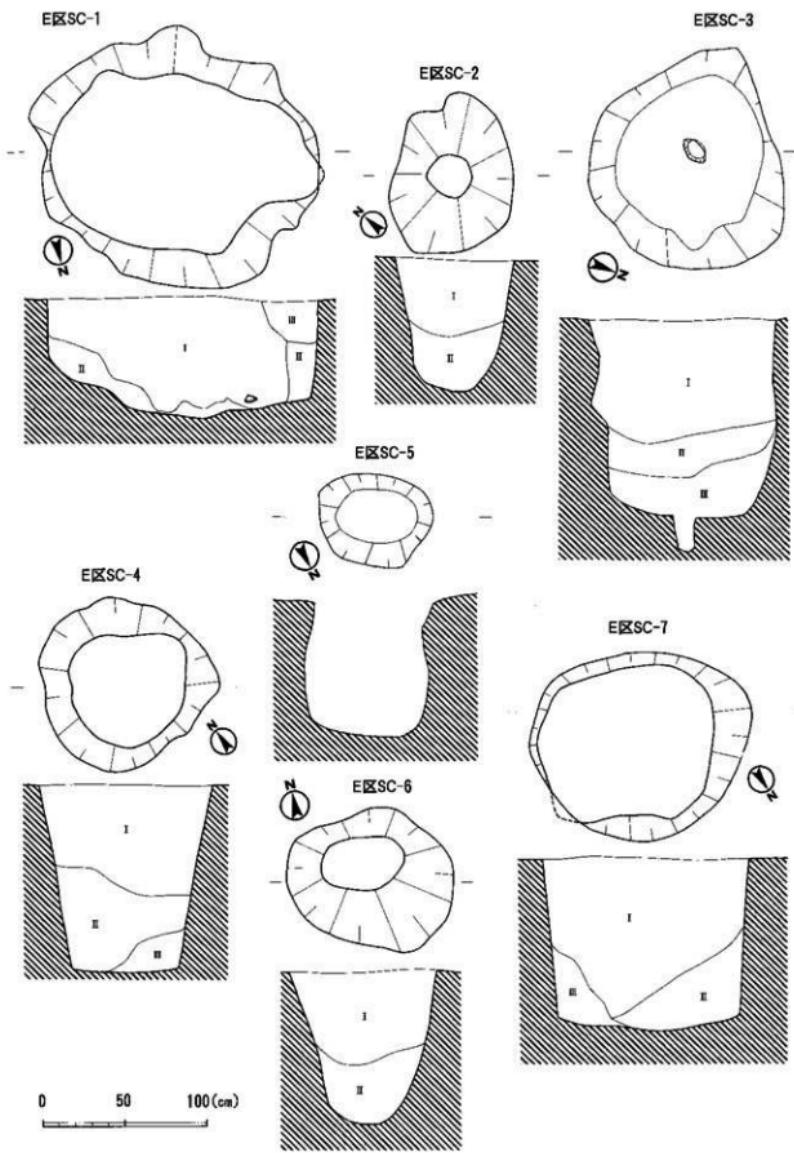
調査区の東側にある遺構であり、やや不定形ながら径約210cmの円形に近い形態である。IV層上位を検出面とする。ほぼ垂直に掘り込まれており、検出面から70cmのところに床面があるが、床面にはやや凹凸が見られる。覆土I層は明黄褐色のアカホヤ火山灰（二次堆積層）である。II層はI層と壁面が混入した層である。III層は近世以降の掘り込みである。床面付近から礫が1点確認されたが、遺物の混入はなかった。

(E区SC-2)

集石遺構の集中する地点の中でもほぼ中央に位置し、検出面はIV層上位である。やや歪ながら、長軸110cm、短軸75cmの楕円形を呈し、検出面から床面にかけて窄まりながら落ち込み、約80cmで床面に達する。床面は球状であり平坦面を持たない。覆土I層はアカホヤ火山灰（二次堆積層）であり、II層も褐色の火山灰層である。層中には白色粒及びガラス質粒子を少量含む。

(E区SC-3)

調査区の東部にあり、IV層上面を検出面とする。形態はやや歪んだ円形を呈しており、径は約140cmである。遺構は湾曲しながらも概して垂直に掘り込まれ、120cmで平坦な床面に達する。なお、平



第29図 土坑実測図 (1 : 30)

埴部の中央には径10cm前後、深さ25cmの落ち込みが見られる。覆土Ⅰ層は他の造構と同じくアカホヤ火山灰（二次堆積）である。Ⅱ層は鈍い黄褐色の軟質層であり、ガラス質粒子を含むことから、これも火山灰であると考えられる。Ⅲ層はシルト層であり、Ⅰ層、Ⅱ層と比較し硬質であり、粘性を帯びる。

（E区SC-4）

調査区の北寄り、礫群一に隣接する位置にあり、IV層上部にて検出された。形態はやや歪ながら径110cmの円形であり、やや窄まりながら深さ110cmの平坦な床面に向かって直線に掘り込まれる。覆土Ⅰ層はアカホヤ火山灰（二次堆積）であり、Ⅱ層は褐色の火山灰層、Ⅲ層はシルト層である。床面付近から、砂岩製の石器が3点出土した。（1）は同一方向からの加擊により剥離を行う石核から作出された剥片を利用し、片側縁が鋸歯状になるよう剥離を行ったものである。（2、3）は二次的な加工は行われない。

（E区SC-5）

調査区の南側、礫群一に囲まれた形でIV層上部より検出された。形態は70cm×60cmの長円形であり、造構は深さ40cm前後で一端袋状に拡がる。床面までの深さは約70cmであり、やや傾斜しながらも平坦を保つ。造構内からは石器が2点出土したが、二次的な加工はどちらも行われない。

（E区SC-6）

調査区の南端部、礫群一の端部に位置し、IV層上部を検出面とする。形態は歪ながら105cm×90cmの格円形であり、やや窄まりながら90cmで床面に達する。床面は球形であり平坦面を持たない。覆土Ⅰ層はアカホヤ火山灰（二次堆積）、Ⅱ層は黄褐色の火山灰層である。遺物等は確認されなかった。

（E区SC-7）

調査区南西部の、調査区の境界付近より確認された。IV層上部を検出面とする。径約120cmの円形を呈し、深さ100cmの平坦な床面まで垂直に近い角度で掘り込まれる。覆土のⅠ層はアカホヤ火山灰（二次堆積）、Ⅱ層は褐色の火山灰層、Ⅲ層はシルト質の硬質な層である。土坑の床面からは、縄文時代中期と思われる波状口縁を呈す土器の口縁部片が出土した。

（F区SC-1）

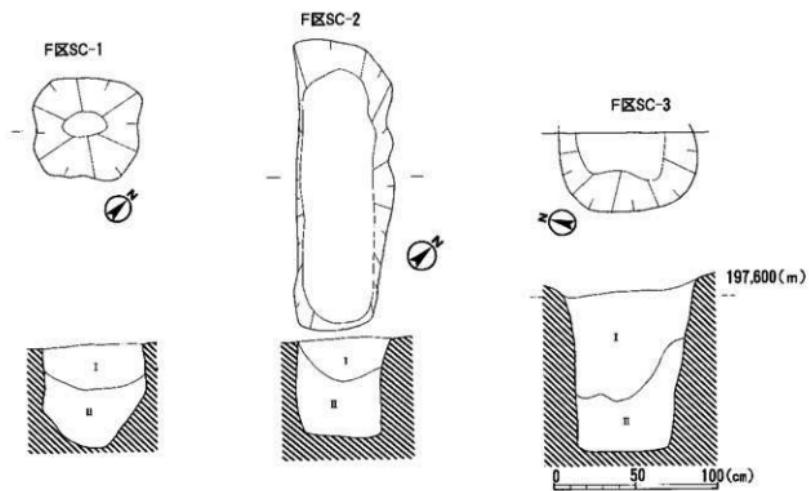
調査区北部より、SC-2と隣り合って検出された。検出面はIV層中位である。一辺60cmの隅丸方形を呈しており、ほぼ垂直に掘り込まれるが深さ65cmの床面に平坦面は見られない。覆土Ⅰ層はアカホヤ火山灰（二次堆積）、Ⅱ層は褐色のやはり火山灰層である。

（F区SC-2）

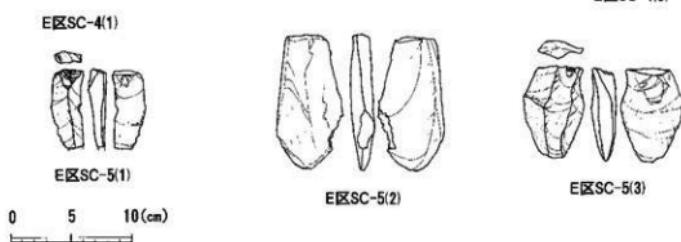
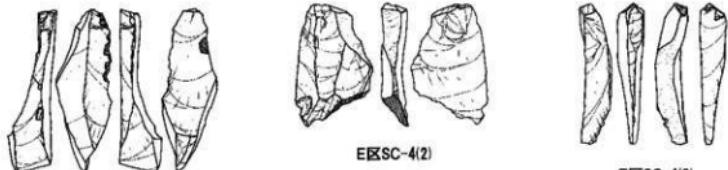
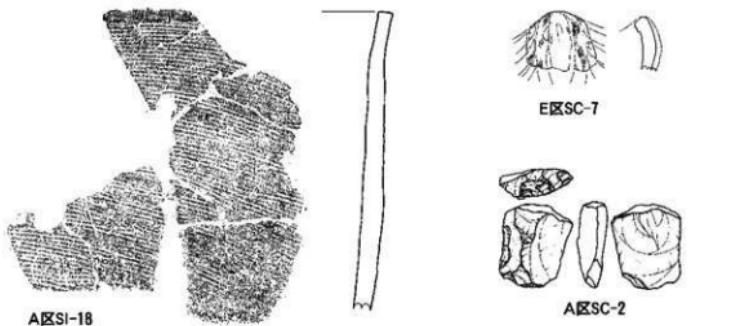
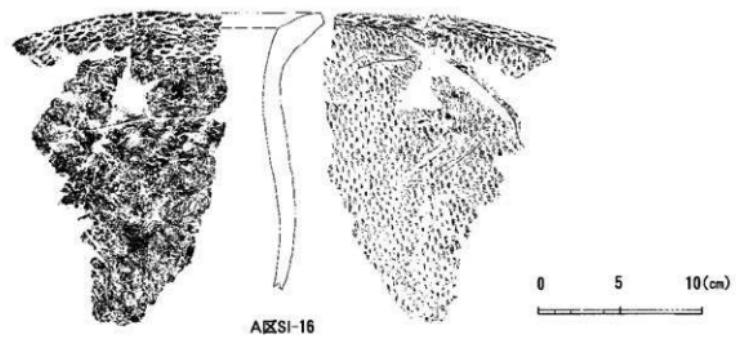
調査区北部より、IV層中位を検出面とする。長軸140cm、短軸60cmの方形に近い形態であり、垂直に近い角度で掘り込まれる。深さは約60cmであり、Ⅰ層にはアカホヤ火山灰層が、Ⅱ層には褐色の火山灰が堆積する。

（F区SC-3）

東部の壁面から検出された。断面であるため形態は不明であるが、それによりIV層上面から掘り込まれていることが判明した。Ⅰ層にはアカホヤ火山灰層が、Ⅱ層には褐色の火山灰層が堆積する。また、E、F区の土坑より検出された褐色の火山灰は、アカホヤ火山灰層が周囲の層や水分の影響を受



第30図 土坑実測図 (1 : 30)



第31図 造構内出土遺物実測図

けながら遺跡内で残存したために生じたものである可能性が考えられる。

第5節 出土遺物

旧石器時代

ナイフ形石器（第32図1, 2）

1は小型であり、斜軸状に剥離された剥片上部の二側縁に刃潰しを意図した調整を加え、剥片の末端部を刃部としている。2は剥片の片側縁のみに刃潰し調整を行ったものである。末端部付近の折断面を刃部に設定しているが、通常のナイフ形石器よりも急角度である。

角錐状石器（第32図3, 5）

3は連続的な縦長剥片剥離技術により作成された剥片の左側縁と右側縁の下部に連続的な加工を行ったものである。この加工は、成形を意図しながらも低い角度の剥離が多いことから刃部調整と考え、角錐状石器とした。石材は人分県人野川流域で卓越する流紋岩と酷似する。5も同様の工程上により石核から剥離された剥片を用いたものであり、右側縁と左側縁下部に調整を行う。右側縁に行われる加工は角度が低いため、刃潰し調整ではなく、成形及び刃部作出によるものと判断した。

剥片尖頭器（第32図4）

礫面付近の縦長剥片を用い、剥片上部の両縁に調整を行い浅い抉りを付けることで成形したものである。剥片末端部に調整は行われない。石材は砂岩である。

三稜尖頭器（第32図6）

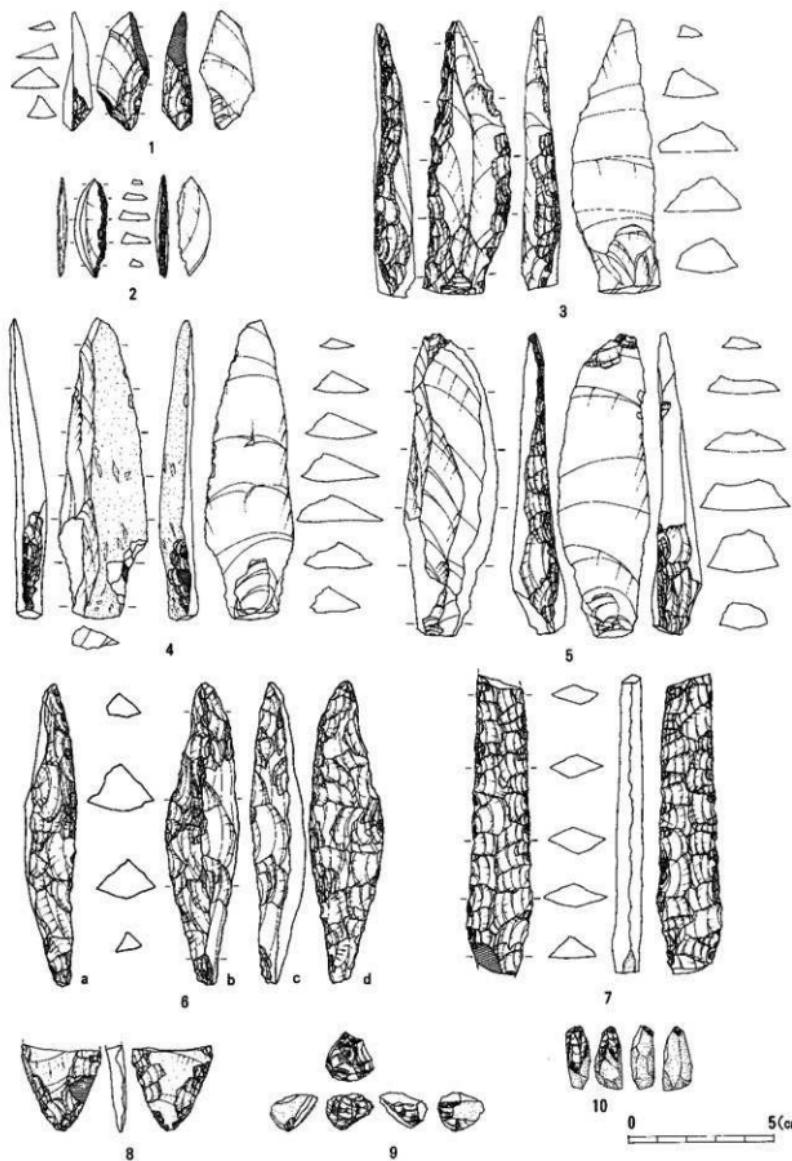
三面加工の三稜尖頭器である。うち一面は調整が疎らであり、この面に残る大規模な剥離痕は、素材時の剥離面であったと考えられる。

槍先形尖頭器（第32図7）

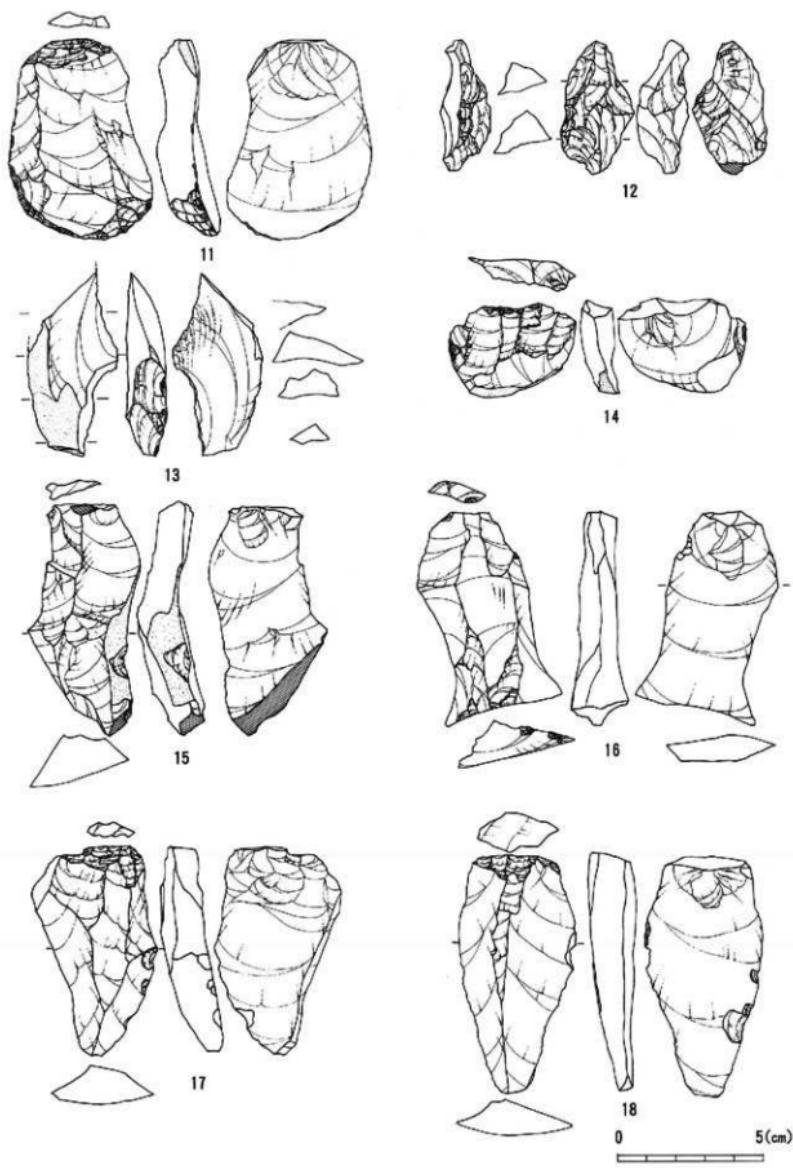
両縁より面的な剥離が連続的に行われ、断面が凸レンズ状になるよう丁寧に仕上げられる。尖端部と基部の両方を折損しているが、全体的に細長い形状を呈していたと考えられる。

尖頭器（第32図8）

縦長剥片の両縁に加工を行い成形し尖頭状に仕上げられたものである。裏面に残る剥離面は素材時ものであったと考えられる。調整は面的ではあるものの剥片の断面に影響を与えるまでには至らない。縄文時代早期の石槍である可能性も考慮される。



第32図 出土石器実測図



第33図 出土石器実測図

細石刃核（第32図9, 10）

9, 10はどちらも黒曜石の小砾を用いたものである。9は打面に何度も調整を行い角度を整えた後に細石刃の剥離を行ったものである。10は打面に調整を一度加え、細石刃剥離を行ったものである。

スクレイバー（第33図11, 12）

幅広の縦長剥片の末端部を用いたエンドスクレイバーである。刃部調整は裏面からのみ行われる。12は残核の一端に連続的な調整を行い刃部としたと考えられる。

二次加工剥片（第33図13）

13は斜軸状に剥離された剥片のバルブを調整により除去した剥片である。

剥片（第33図15～22）

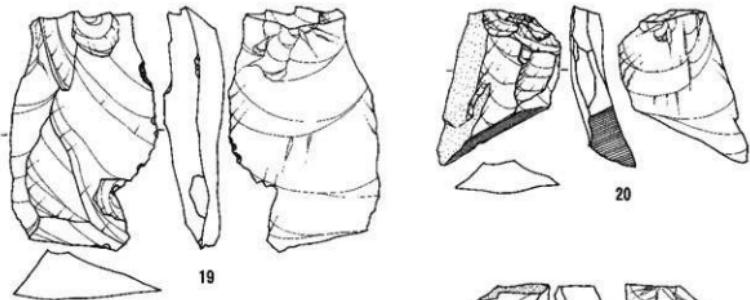
14は連続的な剥片剥離を行う工程中に剥離されたものである。急角度の加撃により作出されていることから、打面を再生する意図も窺うことができる。表面が被熱により赤変し、裏面下部は剥落が認められる。15は連続的な縦長剥片剥離技法を行う石核より剥離された剥片である。表面に残される剥離痕には、加撃が末端まで届かず途中で剥離されたものが多く、またウエーブも認められることから、これも14と同じく打面を再生する目的があったと考えられる。16は上下の両極より剥片剥離を行った石核から剥離されている。17, 18は共に砂岩製であり、縦長剥片剥離工程により作成されたものである。19～22はE区より出土したものである。このうち19と22の表面に残る剥離痕からは、明確な目的が感じられず、縄文時代早期段階の石器である可能性も考えられる。

縄文時代

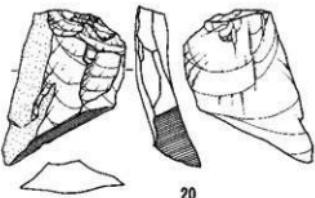
土器

草創期の土器（第35図23～33）

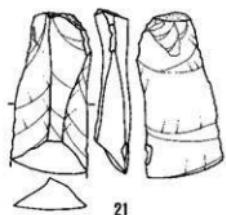
(23～25)は口縁部に粘土紐を貼り付けた後、爪形文を施すものである。(23)は口縁直下には大きめの爪形文を配置し、下位に二列、口縁部肥厚帯の最下部は細めのものと3種類の爪形文を使い分けるのに対し、(24)は同種のものを3列配置したものである。(26)は細い粘土紐を用い、両側に羽状の文様を施文しながら貼付を行ったものである。(29)は太めの隆帯を口縁部に2列貼付けた後、隆帶上に工具による押引文を施文したものである。30以降は草創期とは断言できないが、可能性が考えられる上器である。(30)は口縁端部に刺突と波状の条痕を行う。(31)は口縁部に貝殻腹縁による刺突を何列も施文したものである。(32)はナデにより器面を成形した後、口縁部及び口唇部に爪形状の刺突を施す。口縁部は外側に向かい傾斜する。(33)は(32)と同一個体である。



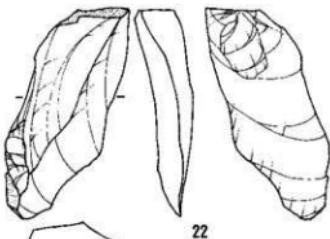
19



20



21



22

0 5(cm)

第34図 出土石器実測図

早期の土器（第35図34～45図）

I類：条痕文土器

a : 条痕文が浅く施文される土器（34～41）

貝殻条痕文を全面に施文し、口縁部に貝殻腹縁による刺突を行うものである。（34～37）は、口縁部に2列の刺突を行うが、（35、36）は2列とも同種の刺突文であるのに対し、（34）は上下の列で刺突の角度を変えている。また、（34）は口縁部が大きく外反しており、器形も異なる。（39）は貝殻条痕を施した後に磨きが加えられるが、（40）は磨を行った後に条痕を施文するなど、同じ分類にありながら製作技術に幾つかの相違が認められる。（41）は口縁部に刺突が行われるほか、比べ細かい条痕が施文されるなど様相を異にする。

b : 条痕文が深く施文された土器（42～48、50～53）

口縁部に太い刺突を行った後、下位に深く条痕を施文したものである。このうち（44～46）の口唇部は無文であるが、（47、48）は口唇部にまで刺突を行う。53は底部であり、横位の条痕文が施文された後に縦位の条痕文を施文していたことが分かる。

c : 押引文を施文した上器（49、54）

（49）は僅かに外反する器形を呈しており、薄い器壁に浅い横位の押引文を数列施文したものである。（54）は厚手の外反する口縁部と口唇部に深い押引を行うものである。

II類：沈線・刺突文土器

a : 羽状の短沈線を施文した土器（55～58）

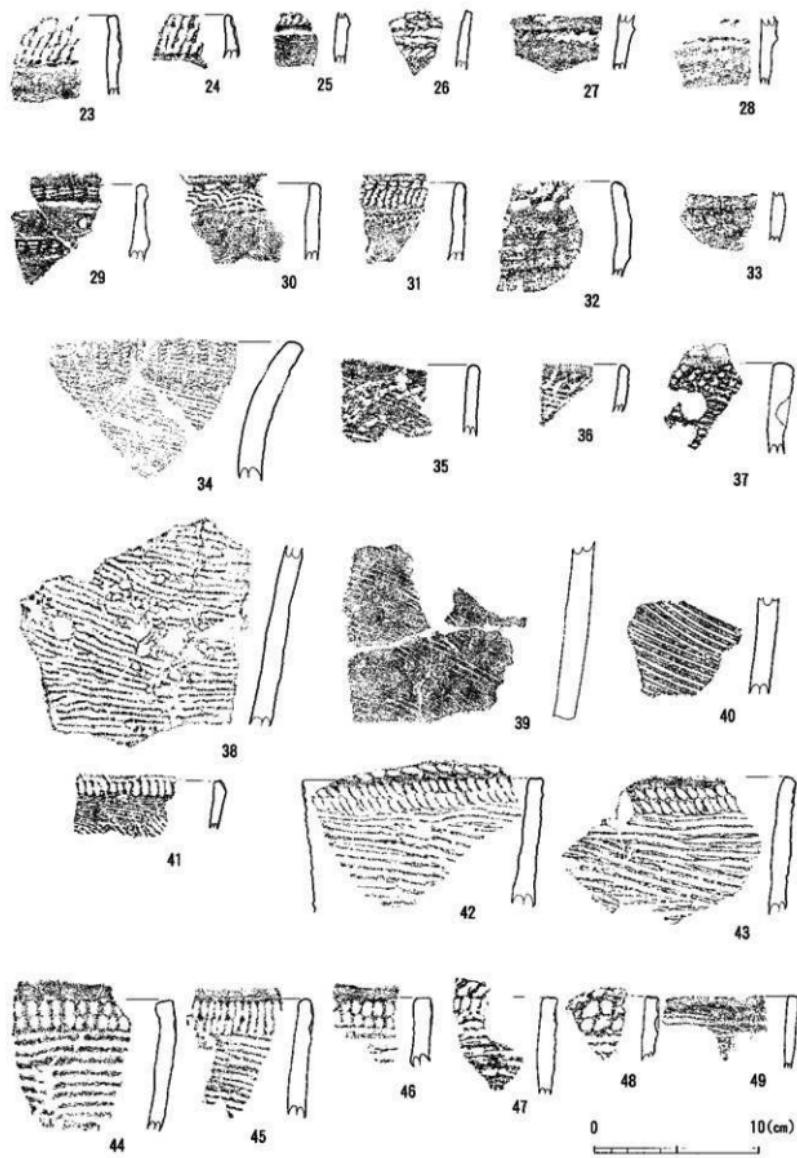
（55、56）は2叉状の工具を用い、横位の羽状文を施文した土器である。（57）は鋭利な工具により文様が付けられる。（58）の文様は縦位に施される。（56、57）は口唇部が内傾し、器壁が厚く作られる。また、いずれも口縁部断面が方形になるよう磨きによる成形が行われている。

b : 細かい刺突を施文した土器（59～70）

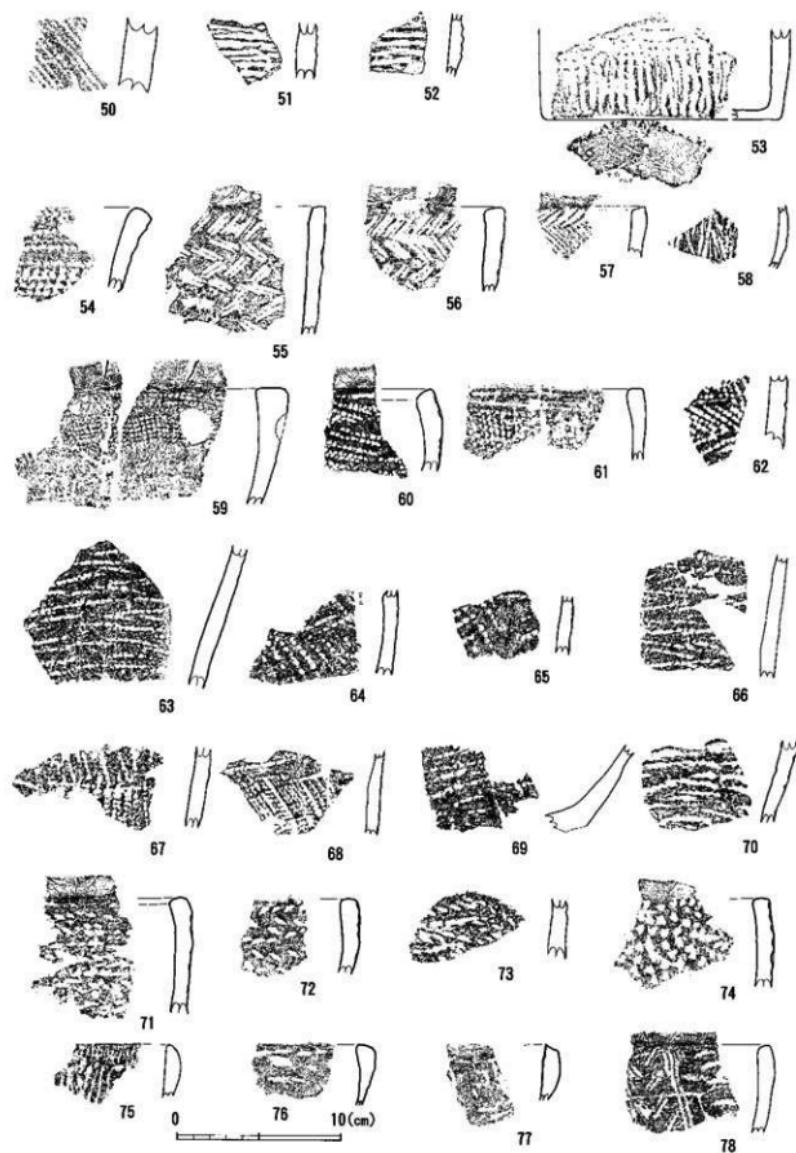
（59、63、70）は外向に横位の刺突文を巡らせた土器である。（60、62、64、69）は斜位に施文しており、（67）はやや傾けた縦位の施文を行い、（68）は斜位ながら、列ごとに角度の変更が認められる。また（61）は、口縁直下を横位、下位を縦位に施文する。このように、同類の土器にも様々な文様の変化が見られるほか、器面に残された文様より推測される施文工具も、それぞれ大きな開きがあったと考えられる。器形はどれも口縁部付近で僅かな内傾が認められる。また、（55～58）と同様口唇部に磨きによる成形が行われている点は共通するものの、（61）で口縁部が極端に厚みを増すのに対し、（60）ではほとんど厚みの変わらぬ断面である。

c : 刺突を施文した土器（71～78）

（71～73）は短沈線状とも取れる沈線を羽状に施文し、（55～58）との共通点を窺うことができる。（74）は棒状工具による刺突がランダムに施文される。（75～77）は鋭利な工具を用いたものである。（78）は、2叉状の短沈線と貝殻腹縁刺突を縦位の区画の上に併用したものである。口唇部は上記の土器と同様磨きによる手法を使用するが、断面が方形になるよう入念な成形は行われない。



第35図 出土土器実測図



第36図 出土土器実測図

Ⅲ類：押型文土器

a : 楕円押型文

1 : 楕円が細粒で、縦位の施文が行われるもの (79~89)

外面に細粒の楕円文が縦位に施文されるものであり、施文は口唇部及び内面にも及ぶ。但し外面以外は横位に文様が施される。なお、(80) の口唇部は細かい沈線が施文され、他のものとは異なる様相を示す。

2 : 楕円が細粒で、横位の施文が行われるもの (90~96)

(90) は内面にも楕円押型文が施されるが、その上部には沈線が施文される。器壁は薄く、口唇部は無文である。(96) は大きく傾いており、底部付近であると考えられる。

3 : 粗大な楕円文が施文されるもの (97~102, 108)

(97) は口縁部が大きく外反しながらも、胸部が膨らみ最大径となる器形を呈す。押型文は胴部上半部までは縦位に施文されるが、下部は縦位になり、最大径付近は双方向の文様を見ることができる。内面は丁寧になでられた後、口縁部直下に横位の押型文の施文が行われる。(98) は口唇部に沈線が巡る。(99~102) は粗大な楕円文であり、施文方向を断定し難い。これらの胎土には、金色に変色した雲母片が多く混入する。(108) は粗雑な施文の痕跡を認めることができるが方向は不明である。また、口唇部にも文様が施される。

4 : 口縁直下に無文帯を形成するもの (103~107, 109)

どれも分類上は細粒でありながら、口縁部に無文帯を持つ一群である。施文方向は縦位に近いものの、やや斜走ぎみである。(104) の原体は溝状に彫り込まれるのではなく、立体的に作出されたと考えられる。(105~107) の外面は無文であるが、これも(103)と同じく無文帯下に施文されたと判断した。器形は(103)を除けばどれも外反が目立ち、無文帯と外反部が重なる傾向にある。

5 : 不定方向に施文されたもの (110, 111)

(110) は斜方向に数回にわたって施文されたものと考えられるが、文様の重複はそれほど認められない。(111) は複数回施文されており、その度の文様が重複し、原体の文様が判別し辛い。

b : 山形押型文

1 : 横位の施文が行われるもの (112~119)

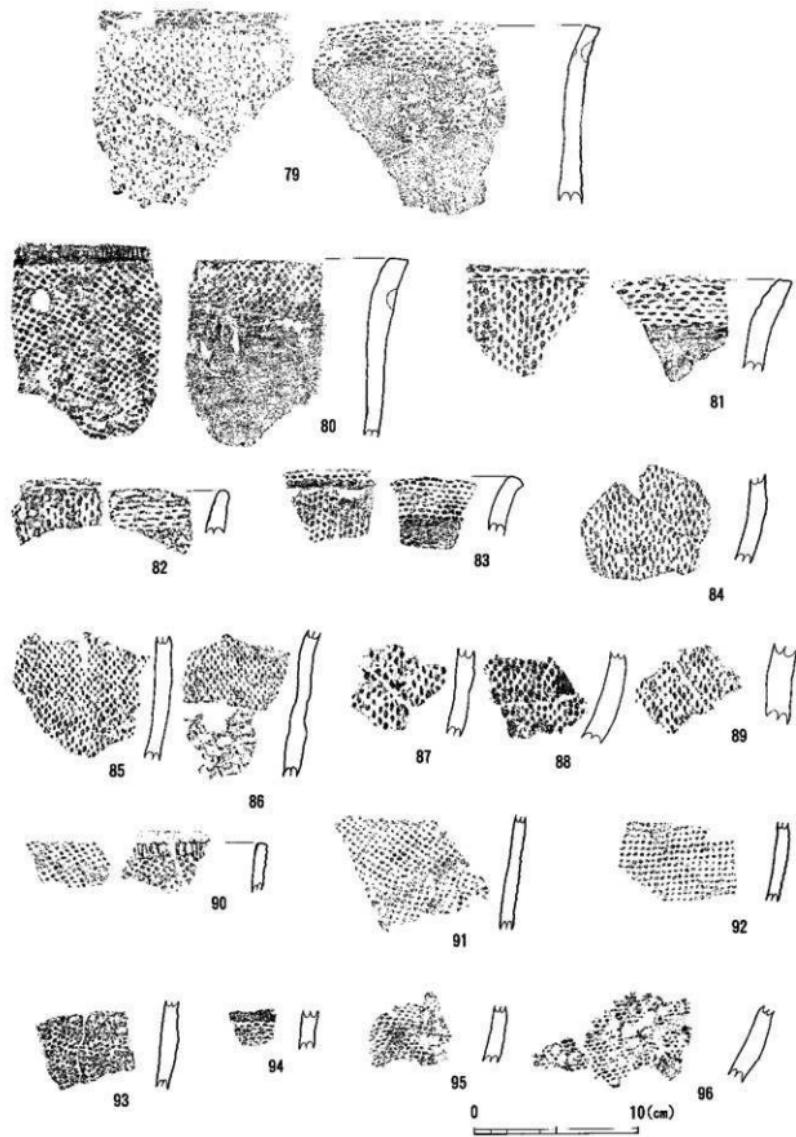
(112~115) は同一個体である。波状口縁であり、器壁は薄く、口縁部で外反する器形を呈す。内外面の押型文は細かく、口縁断面は丸くなり施文は行われない。内面には他に太い沈線も施文される。(116) の山形文は(112~115)に似通っているが山形がそれぞれ平行せず、ところにより格子目状の文様となる。また、器壁は厚手である。(117~119) は同一個体であり、厚手の器壁の外面に横位の山形押型文が浅く施文される。

2 : 縦位の施文が行われるもの (120)

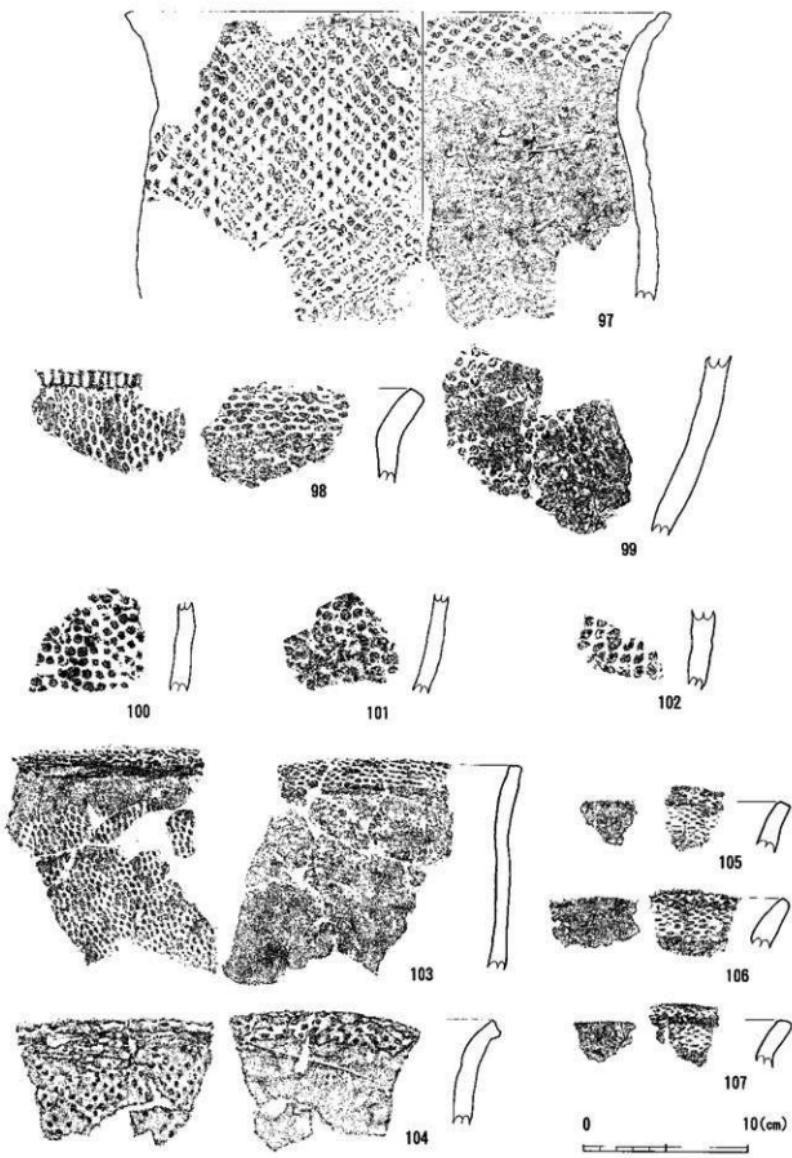
厚手の器壁の外面に、粗大な山形押型文が縦位に施文される。外面は大きく剥落しており、胴部ではあるものの全体の器形は想定しがたい。

3 : 上記以外の山形押型文 (121~127)

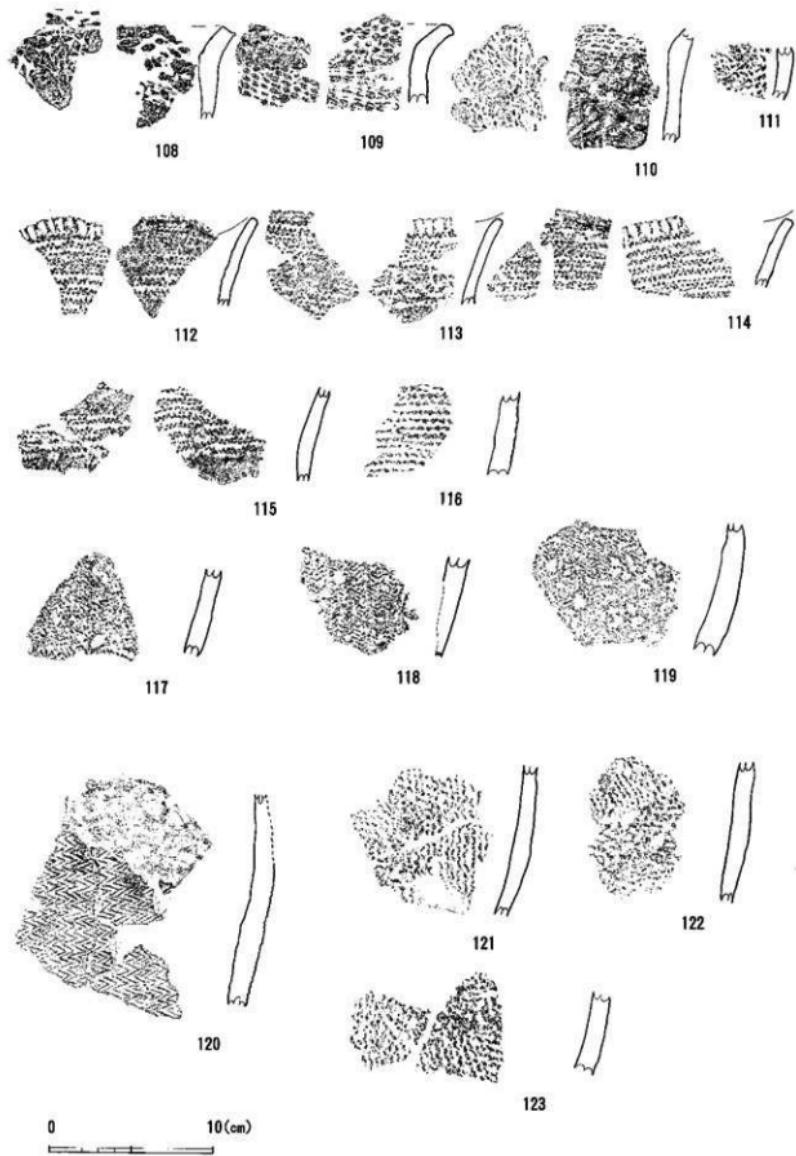
(121~123) は不定方向の施文が外面全面に施文されたものである。同一個体であるが、(123) の



第37図 出土土器実測図



第38図 出土土器実測図



第39図 出土土器実測図

脣部のみ大きな膨らみが見られる。(124)は口縁部に縦位の施文が認められ、口縁直下と脣部は横走する。口唇部は刺突とも取れる短沈線を施し、内面上部の押型文は、横走するものの何度も施文した痕跡を見ることができる。(125)は、大きく外反した厚手の口縁部である。内面及び口唇部に押型文が横走するほか、外面には斜方向の施文が行われている。(126)は傾きの度合いから底部付近と考えられるが、押型文が縦横に施文した痕跡が残される。(127)は主に横位であるが、幾重にも施文が繰り返されたことを物語る。

c : それ以外の押型文土器 (128~131)

(128)は山形押型文に類似するが、山にあたる部分が丸くカーブしているため、波状の押型文であるような印象を受ける。縦位に施文されており、器壁は厚い。(129, 130)は、残存状態が悪く判別が困難であるが、どちらも幅の広い格子目状の原体を使用したと考えられる。

IV類：手向山式土器 (131~136)

(131)は外面に菱形押型文が施文される。上部で外反が認められるため、頸部にあたると考えられる。(132)は厚手であるが、これも頸部にあたる。山形押型文が横位に施文される。(133, 134)は極めて薄手である。外面に口縁部より横走する山形押型文が見られ、内面にも横位の山形押型文が施文されている。なお、内上面に沈線は認められない。(135)は内外面に横位の山形押型文を施すが、外面はその上に波状の沈線を施文する。なお、口唇部には竹管状の工具による刺突が連続的に行われる。(136)は頸部から脣部にかけての屈曲部に粘土紐を貼り付け、その上に工具による刺突を行い、頸部には沈線を施文する。口縁部が大きく外反し、脣部以下が大きくすぼまる浅鉢状の器形を呈していたと考えられる。

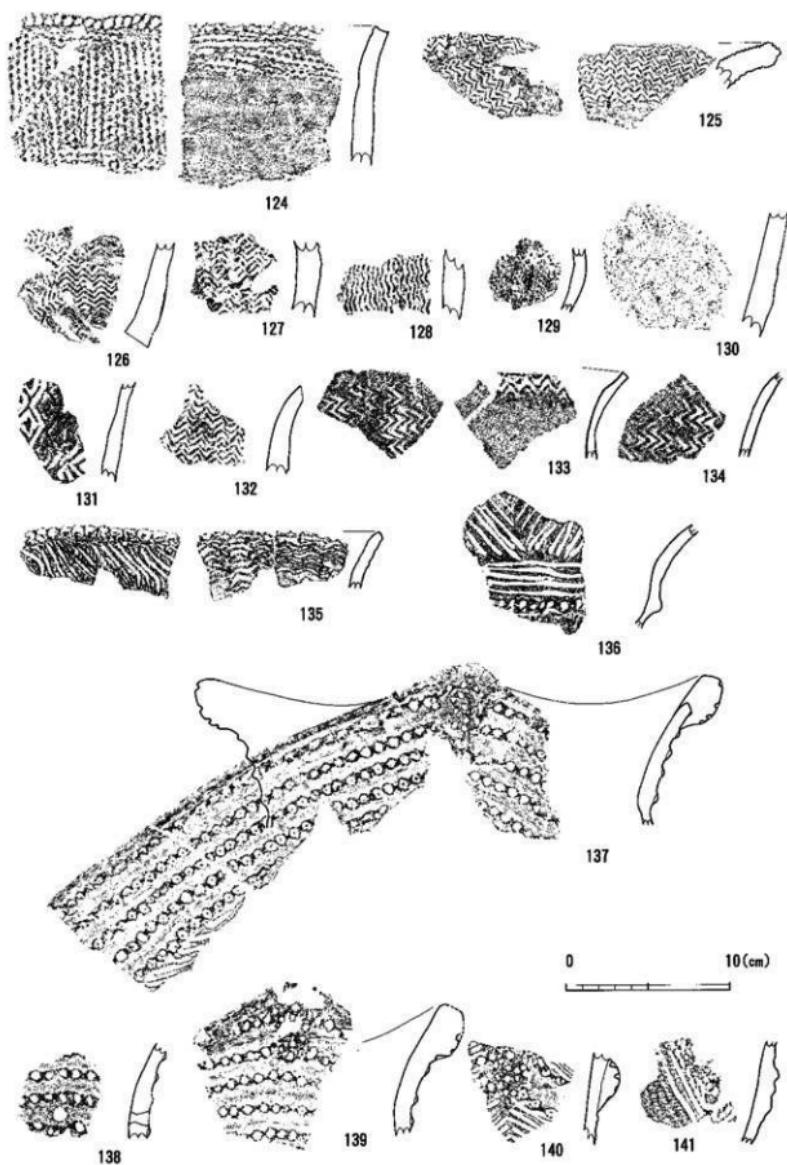
V類：天道ヶ尾式・妙見式土器 (137~143)

a : 天道ヶ尾式土器 (137~140, 142~143)

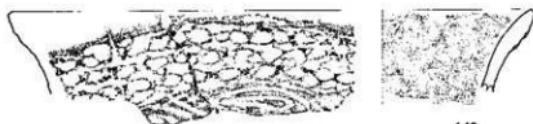
(137~140)は同一個体であり、波状口縁の波頂部に瘤状の突起を、また頸部にかけて等間隔に5本の隆帯をそれぞれ貼り付け、その上に竹管状の工具による刺突を連続的に施文したものである。(137)の下部及び(140)を観察すると、脣部以下にも瘤が貼り付けられていたほか、沈線も施文されていたようである。(142, 143)は平口縁である。(142)は隆帯が数状貼り付けられるが、前記のものと比べ隆帯間に間隔が置かれない。隆帯下には沈線による曲線が描かれる。(143)は2条の隆帯上に沈線を施し、山形押型文を施文している。内面には山形押型文を横走させた上に工具により斜方向の沈線を施す。いずれも口縁部が大きく外反しているが、脣部以下の器形は不明である。

b : 妙見式土器 (141)

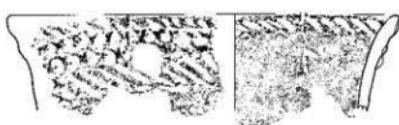
(141)は繩文地に隆帯を貼り付けた後、沈線を施文したものである。脣部片で、僅かな膨らみが認められる。地文が繩文であるため、妙見式と判断した。



第40図 出土土器実測図



142



143

0 10(cm)



144



145



146



147



148



149



150



151



152



153



154



155



156

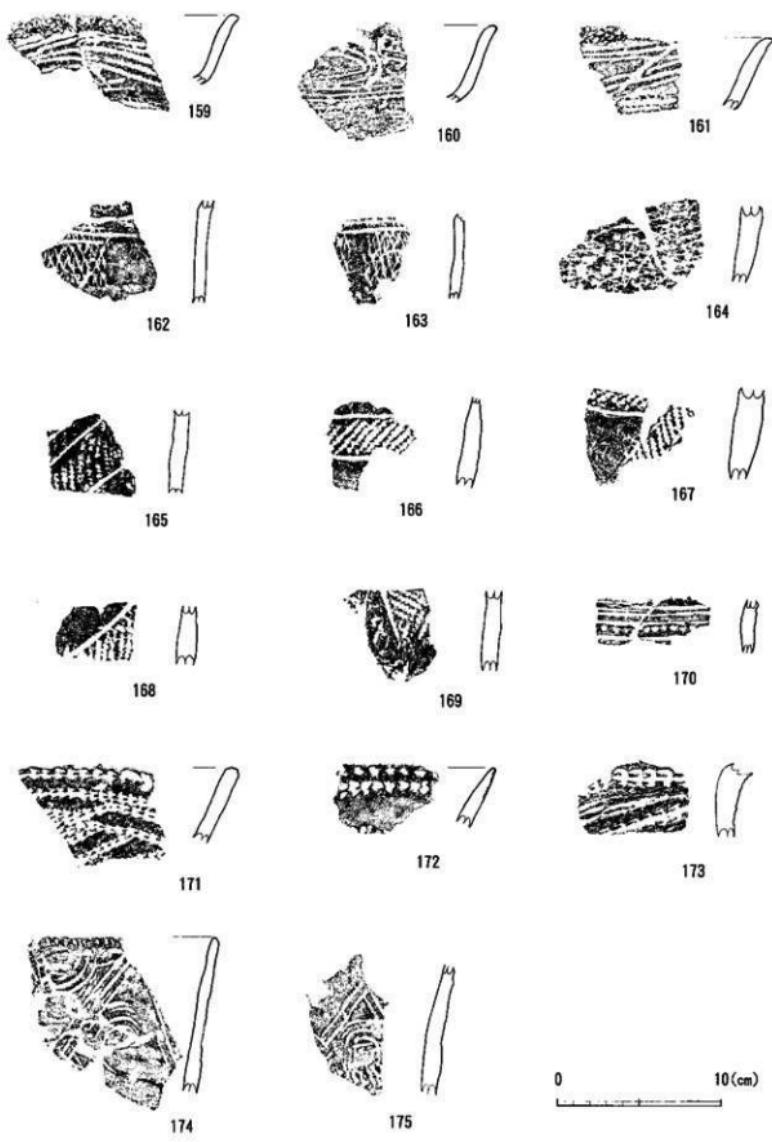


157



158

第41図 出土土器実測図



第42図 出土土器実測図

VI類：半縁式上器（144～158）

(144、146) は波状口縁であり、口縁部断面は三角形状を呈す。(145) は口縁部に肥厚帯を形成する。(147、148) は口縁部から頸部にあたり、大きく屈曲した口縁部の文様帶に曲線や刺突を施文する。(155) は口縁部の肥厚帯に縄文を施文する。(156) は口縁部が屈曲して垂直に立ち上がる。(157、158) には胴部に結節縄文が縦位に施文される。(157) は胴部が若干膨らむが(158) はそれが見られず、頸部との境界も器形に変化が見られない。

VII類：塞ノ神式土器（159～175）

(159～161) は二重口縁であり、外面には沈線文が二本単位で描かれ、沈線間に刻みを付ける。(162～164) は格子目の撚糸文が施文された後に沈線が巡る。(165～169) は二本単位の平行な沈線により区画を描出し、その間に縄文を施文するものである。(170) は胴部と口縁部の境界と考えられ、沈線を數状施文した後、沈線間に刺突文を施す。(171～173) は大きく外反する口縁部に貝殻腹縁による押引を行ったものである。(174、175) は沈線を主に施文するが、口縁直下と胴部との境界には貝殻腹縁による刺突が行われている。

VIII類：尖带と貝殻条痕文を施文する十器（176～178）

全て同一個体であり、F区にてアカホヤ火山灰層を挟み上下の層より確認された。隆帯を縦位に貼り付け口縁部から胴部にかけて貝殻条痕文を等間隔に施文し、その間に貝殻腹縁刺突を行ったものである。波状となる口縁部はやや外反し、胴部で僅かに膨らむ器形である。

IX類：鎌石橋式、轟I式土器（179～189）

IX類は、条痕文を施文する a (177～184) と、T具により微降起線文を持つ b (185～189) に二分した。a は鎌石橋式土器、b は轟 I 式土器である。

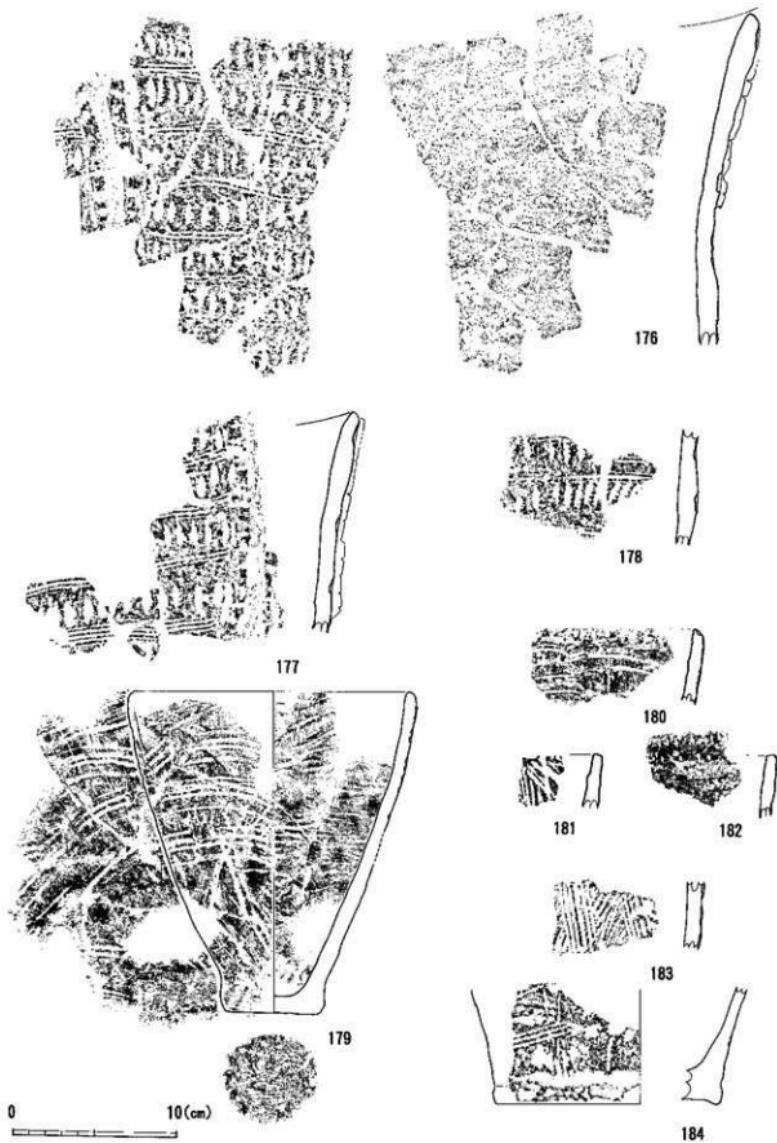
a : (179、180) はC区のIV層南東部の傾斜下部より出土したものである。底部から胴部にかけてはラッパ状に開き、口縁で僅かに内湾する器形を呈す。外面に縦方向から斜方向に条痕を施文する。内面は横位の条痕の後にナデによる成形が行われる。(181、183) も同一個体であり、条痕が縦位及び斜位に深く刻まれる。(182) には条痕文こそ認められないものの、口縁端部に刻みが入っており、同類と判断した。(184) は底部である。(179) の底部と比較し大型であるが、外面に残された条痕文より鎌石橋式土器とした。

b : (185、186、189) は同一個体である。C区より、(179、180) に隣接して出土が確認された。工具による条痕文が口縁部付近は横位に、頸部以下は縦位に施文される。この条痕により微降起が生じる。(187) にはそれが顯著に認められ、(188) はその極端な例である。

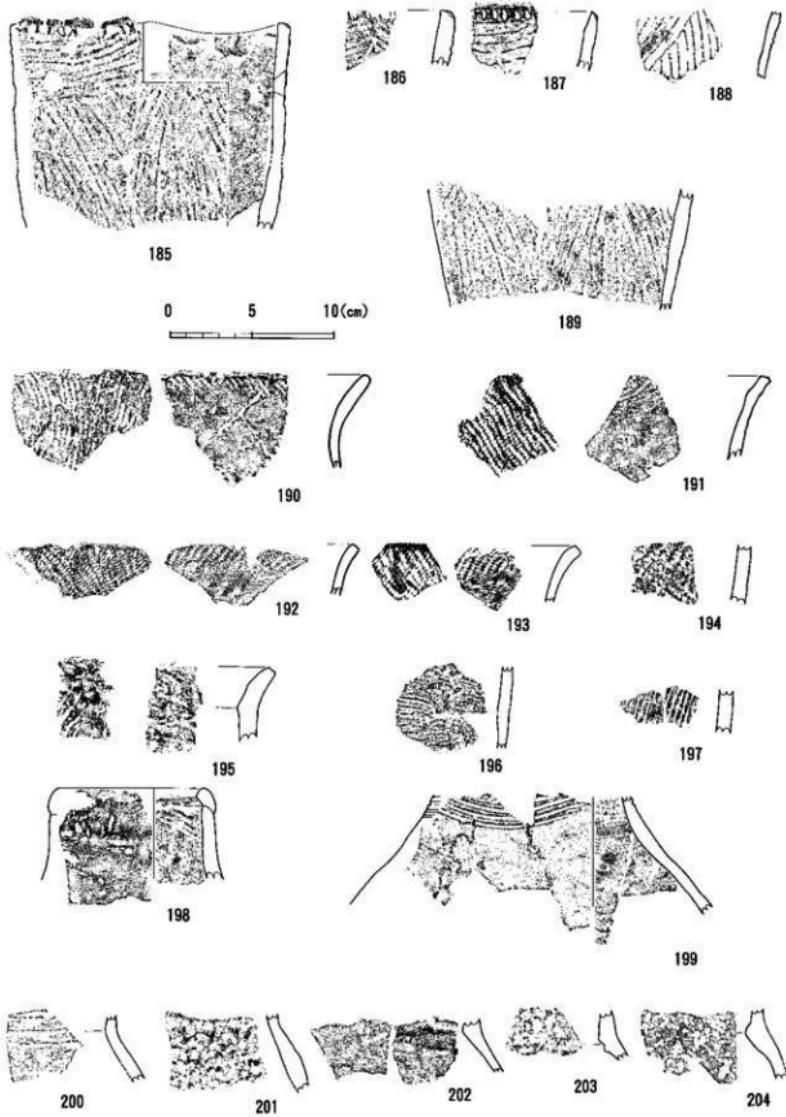
X類：縄文上器、撚糸文上器（190～197）

a : 縄文土器（190～194）

(190～193) は薄手であり、口縁部が大きく外反する器形を呈す。外面及び内面上部に縄文が縦位



第43図 出土土器実測図



第44図 出土土器実測図

に施文される。(194) は羽状の網文が施文される。

b : 撫糸文土器 (195~197)

(195) は口縁部が外反し、内面には段を形成する。撫糸文は外面の一部に施文される。(196、197) は外側の全面に撫糸が施文される。

XI類：壺形土器 (198~204)

(198) は頸部から口縁に向かいやや内湾する器形を呈す口縁部に、粘土紐を貼り付けることで内湾させたものである。(199) は頸部から肩部に至る部位であり、沈線を数条施文することで境界を作り出す。(200) も同じ部位であり、刻み目を持った微隆起を数条配置する。(201~204) は無文の壺形土器である。このうち(202) は内面に屈曲が見られる点を考慮すると上下を逆として窯ノ神式土器の破片とも考えられるが無文であることから壺形土器として分類した。また、それ以外の土器に関しては上下が定かでないが、内面の調整、特に肩部と口縁部の繋ぎ目の処理が殆ど行われていない点を考えて壺形土器として判断した。

XII類：その他の縄文時代早期の土器 (205~217)

(205~208) は無文の土器である。(205) は口唇部に指頭によると思われる押圧が行われる。(206) は浅鉢状の器形を呈す。(209) は薄手の土器である。口縁部がキャリバー状に屈曲し、内面に刺突等を施文する。(210~212) は沈線が施されたものである。(213) は細めの隆帯を貼り付けた上に刻みを付け、下位に撫糸文と思われる文様を施文する。(214) は粗い条痕が施文されたものである。(215、216) は沈線が施文される。

縄文時代前・中期の土器 (第46図218~240)

I類：尾田式土器 (218~226)

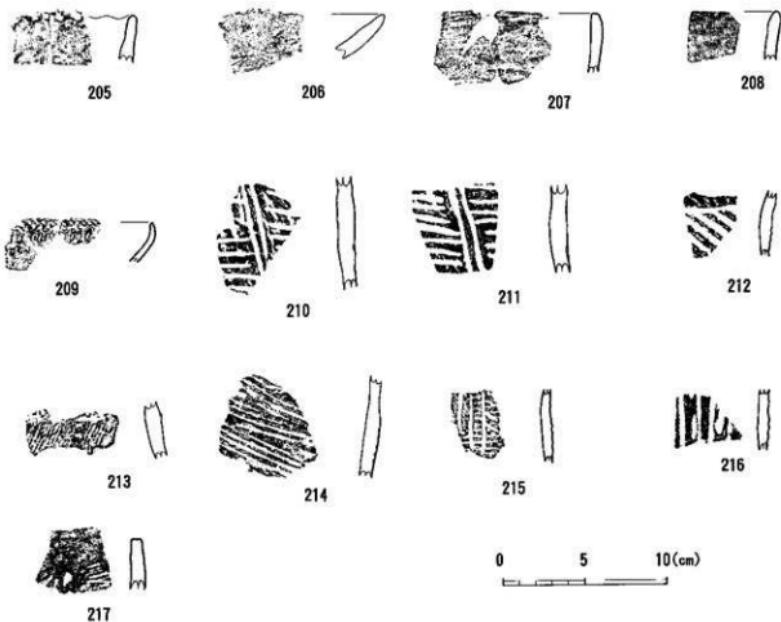
(218~221, 223~226) は同一個体である。口縁は僅かに外反し、胴部でやや膨らむ器形を呈す。口縁部に隆帯を数条貼り付けた後に刺突を行い、胴部以下に工具で押引文を縦位と斜位に施す。(222) は薄手ではあるが、同様の文様パターンであったと考えられる。なお、口縁部は主に平口縁であるものの、(220) にも見られるような突起を持っていたものと考えられる。

II類：曾畠式土器 (227~230)

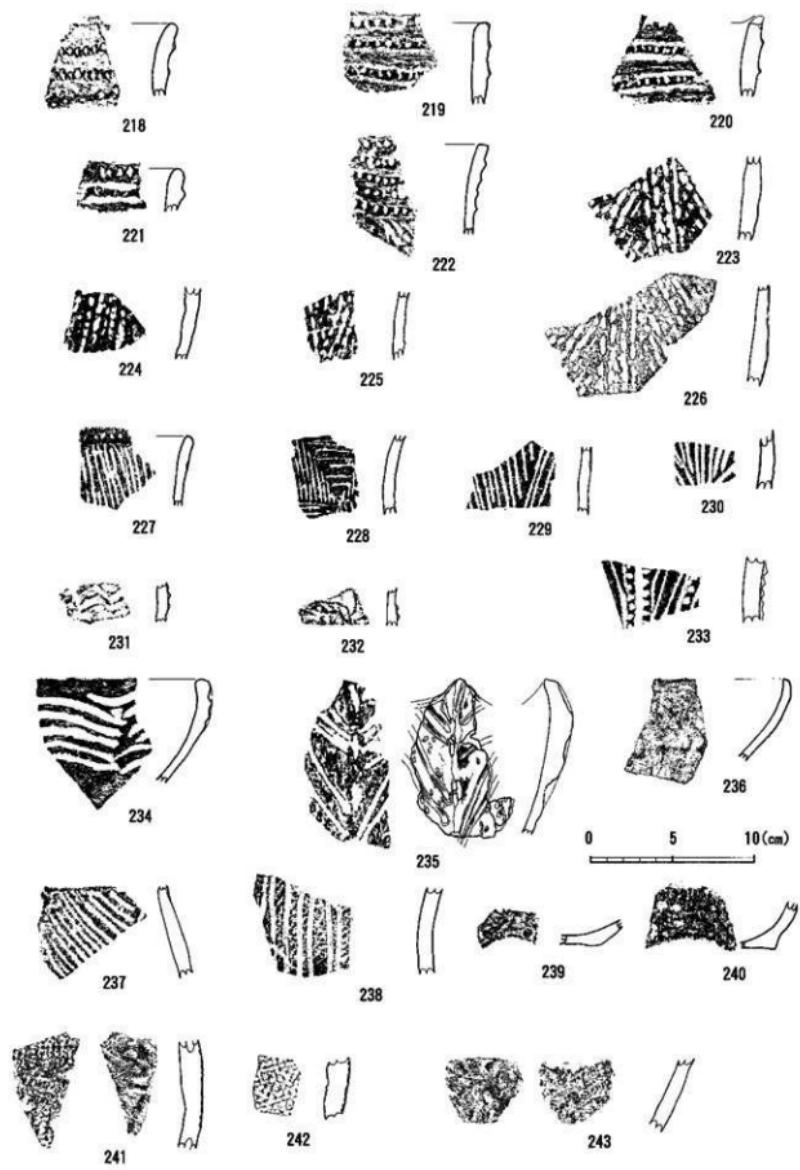
(227) は薄手であり、断面の丸い口唇部に細い棒状工具を用いた刺突を連続的に行う。内面は施文されない。(228) は鋭利な工具を用いており、幾何学的な文様が描出される。

III類：微隆起線文を有する土器 (231, 232)

細いミミズ腫れ状の隆帯が貼り付けられる一群である。(231) は3条の隆帯を波状に貼り付ける。



第45図 出土土器実測図



第46図 出土土器実測図

IV類：深浦式土器（233）

(233) は縁位に隆帯を貼り付けた上に刻み目をつけ、隆帯間に鋭利な沈線を施文したものである。E区アカホヤ上層で1点のみ確認された。

V類：春口式土器（234, 235, 238）

(234) は口縁部がキャリバー状の屈曲を見せ、外面に沈線により連弧文が施文される。春口式土器の中でも初期のものに分類されよう。(235) は波状口縁を呈し、波頂部には隆帯を貼り付け強調されている。器面は縄文の後に沈線が施文される。これは(238)でも共通する。文様帶が胴部にまで及んでいたと考えられることから、春口式の最古段階である北手牧段階に位置付けられる。

VI層：その他の前・中期土器（236, 237, 239, 240）

(236) は器壁が極めて薄手であり、口縁部がキャリバー状に屈曲する。春日式土器に類する若しくは時期的に近い上器と推測される。(239, 240) は底部である。僅かであるが上げ底である。

石器

石鐵（244～323）

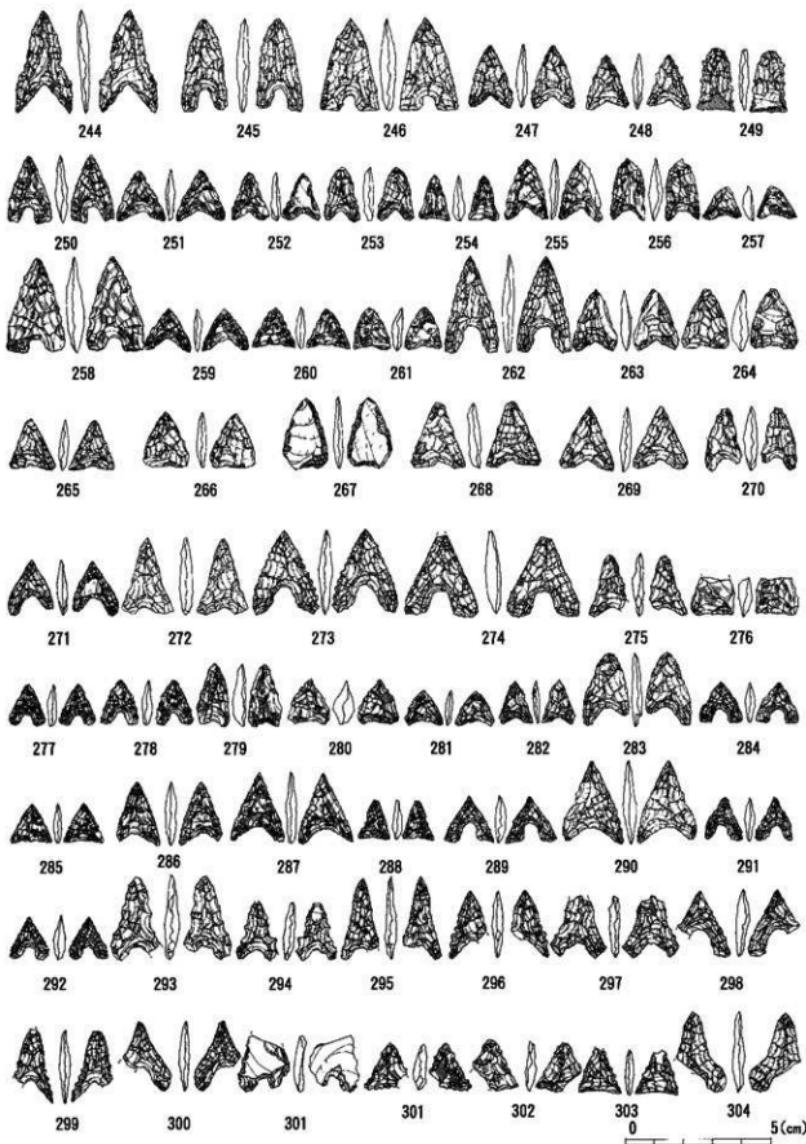
未製品や欠損品も含めると、調査区全体で138点出土した。図示されているものは、そのうち残存状態の良好なものである。出土した石器の形態は、程度の差はあれ全て基部に抉りの入るものであるが、抉りの深さや脚部の尖端の形状等、多くのバリエーションが見られる。特にA区で約半数の石鐵が出土した。また、(313～316)は欠損後に再利用の痕跡が認められるものである。(313)は尖端部に、残りは脚部にそれぞれ再利用を図った調整が行われる。(317～323)は、尖頭状石器より小型であるため石鐵の未製品とした。なお、尖頭状石器も含む石鐵類全点の石材利用頻度は以下の通りである。

調査区	黒曜石 (姫島産)	黒曜石 (その他)	張質 安山岩	流紋岩 (2,3含む)	チャート	その他	計
A区	21	11	10	3	16	6	67
B区	2	2	0	1	5	6	16
C区	0	0	0	1	6	0	7
D区	0	1	0	0	0	1	2
E区	1	6	0	3	8	4	22
F区	3	4	1	0	14	2	24
計	27	24	11	8	49	19	138

第1表 調査区分別石鐵・尖頭状石器利用石材表

尖頭状石器（324～331）

厚手の剥片を利用し、両面に調整が加えられたものである。縁辺部には成形の為の小規模な剥離が行われるが、尖端部に対する目的的な意図は希薄である。



第47図 出土石器実測図

石鎚 (332～334)

(332) は欠損した石鎚を利用し、残存する片脚部に調整を行い尖端状に仕上げたものである。
(333, 334) は剥片剥離を行う際に剥離された剥片の縁辺部に両縁から加工を行う。

石匙 (335～338)

周縁より面的な剥離を連続的に施し、一端に両側より剥離を行いつまみ部を作出したものである。
(335) は鍤状に尖端部を成形する。(336) は三角形状の尖端につまみが設けられる。対して (337) は逆三角形状であり、調整が縁辺部のみに留まっているため、裏面に素材時の剥離面が残される。(338) は弧状に刃部を作出したものである。これらは全て A 区で出土しているほか、張賛安山岩製である。

スクレイパー (339～347)

(339) は円錐を分割し、一端に連続的な剥離を行い刃部を作出したものである。剥離は側面にも行われるが、剥離角や部位から、刃部と考えるよりも柄に装着する際の成形によるものと考えられる。
(340) は薄手の剥片の側縁及び末端に刃部を設定したものである。(342, 343) は砂岩製であり、どちらも側縁に刃部調整を行っている。(346) は礫面除去の際に作出された剥片の末端部に刃部を設けたものである。(347) は右核成形の際の厚い剥片の側縁に調整を加えたものである。

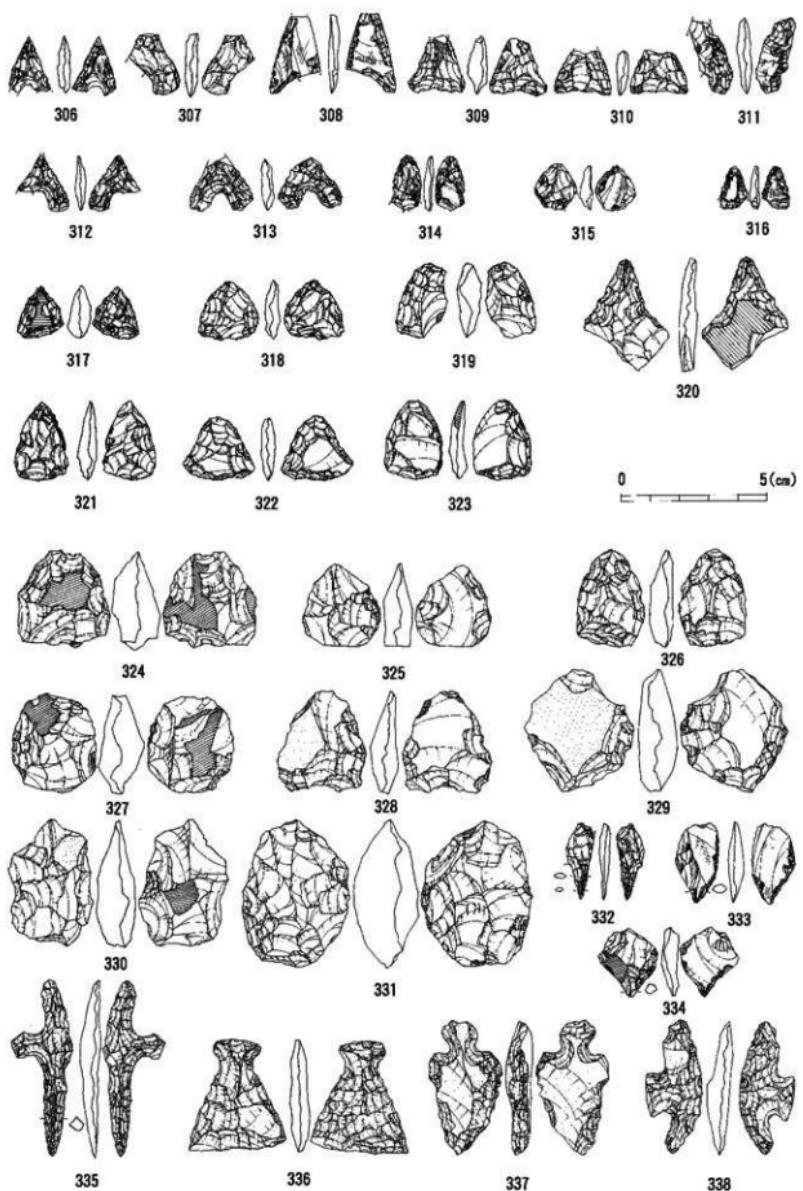
石斧 (348～352)

(348) は小型の右斧である。器面はローリングが激しいものの、刃部付近は磨きによる成形が行われた痕跡が認められる。(350) は刃部に研磨痕が顕著に残される。(349, 351, 352) は剥離による大まかな成形を行ったのち、敲打を主に縁辺部に行い、刃部に部分的な研磨を加える。(351, 352) は A 区南部にて密接した位置から確認された。

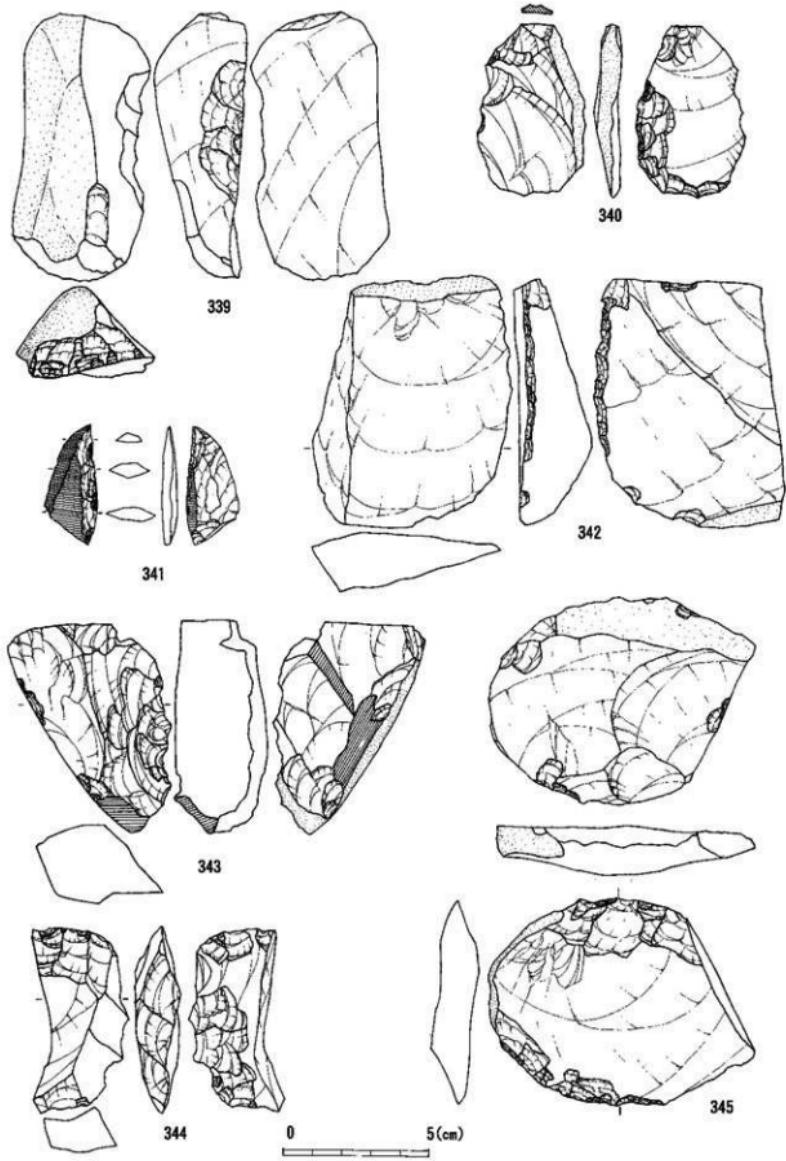
剥片 (353～359、368)

剥片類は多量に確認されたが、ここではごく一部のみ図示し紹介したい。

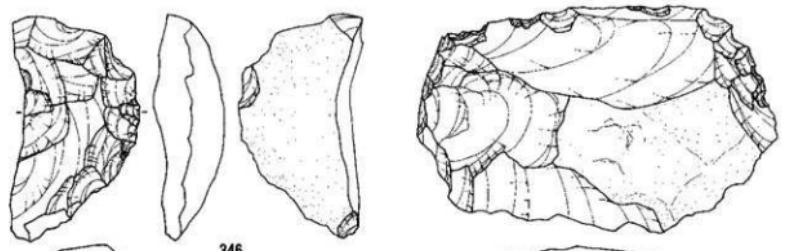
(353) は綾長剥片を連続的に剥離する際に作出されたものである。縁辺部が刃こぼれ状に剥離しており、使用痕である可能性が高い。(354, 355) は二次加工が両面に行われる。(356) は薄手の剥片の側縁に刃こぼれ状の使用痕が残る。(357) の縁辺には連続的な小剥離痕が認められるが、これは使用痕ではなく、二次的な加工によるものと考えられる。(358) は厚手の剥片の両面に面的な調整を行ったものである。(359) は斜軸状に剥離された剥片である。打点が二次加工により除去されている。
(368) は打面を転移しながら剥離された、極めて薄手の剥片である。二次的な加工が両面に行われる。



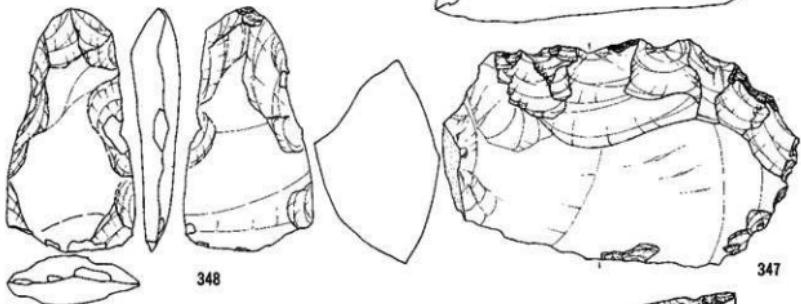
第48図 出土石器実測図



第49図 出土石器実測図

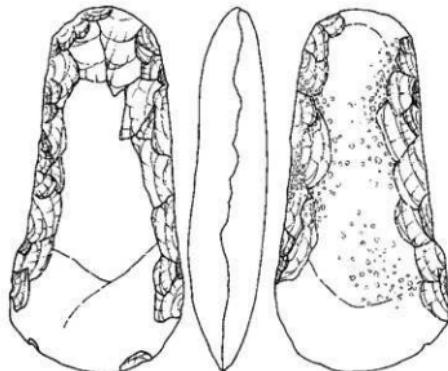


346

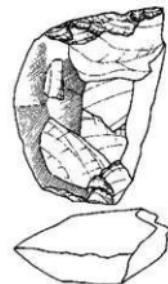


348

347



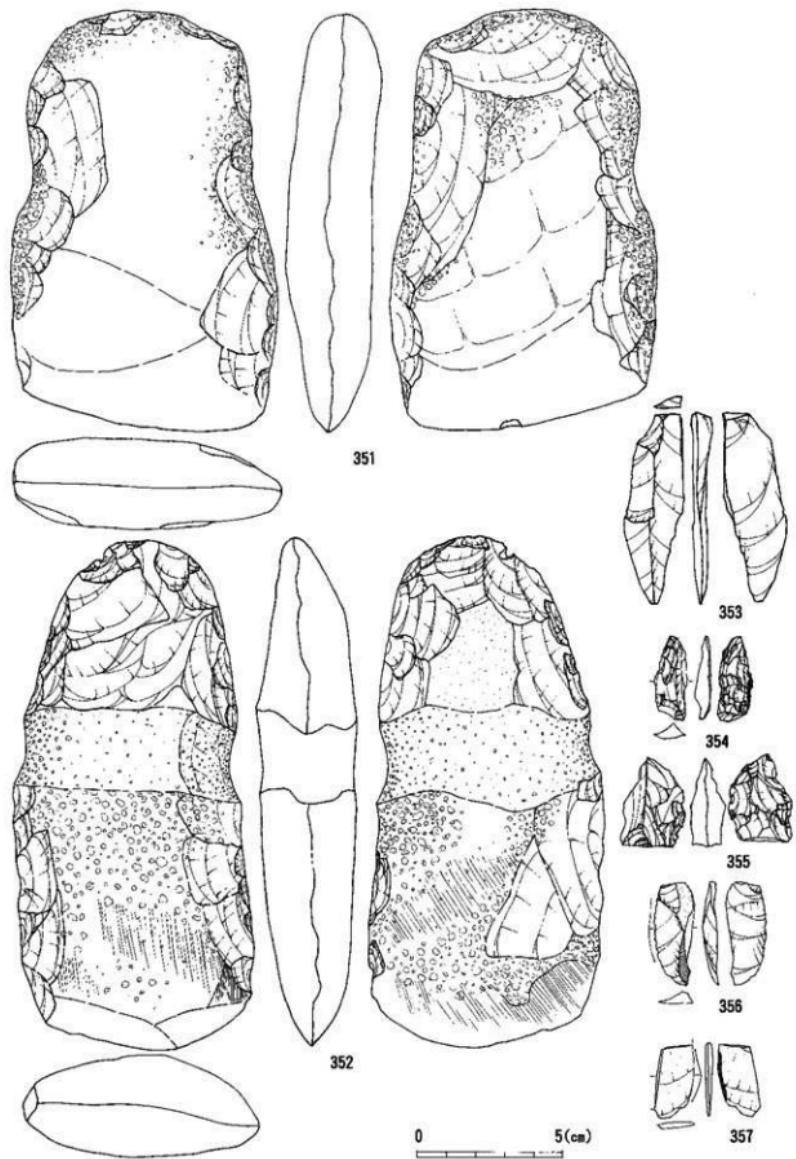
349



350

0 5(cm)

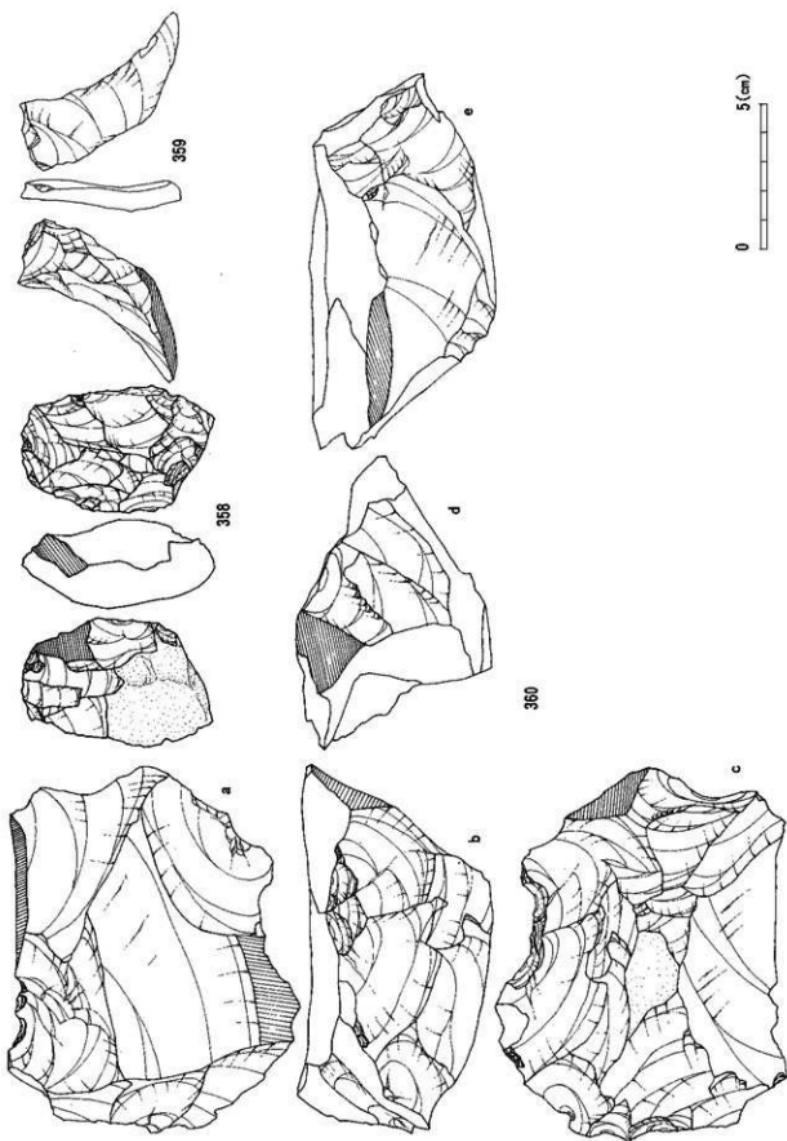
第50図 出土石器実測図



第51図 出土石器実測図

第52圖 出土石器實測圖

0 5(cm)



石核（360）

a面を打面とし、b面に連続的な加撃を行いながら打点を後退させた石核である。c面、d面の剥離痕は、石核成形段階のものと考えられる。b面に残される剥片剥離の規模はまちまちであり、目的が希薄である。

礫器（361）

円礫を用い、薄手になる一端に剥離を行い刃部としたものである。剥離は部分的に密になるものの、全体的に一定の間隔を置きながら加撃が行われており、刃部が鋸歯状になるよう配慮される。

原石（364）

張質安山岩、いわゆるサヌカイトの原石である。一端に数回の剥離が行われる以外は剥離作業を全く行わず、原礫のまま遺跡内に持ち込んだものと考えられる。

磨石（365～367）

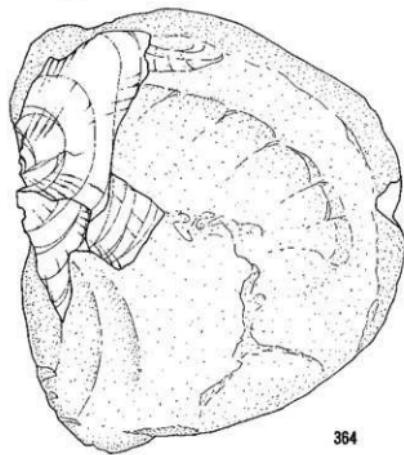
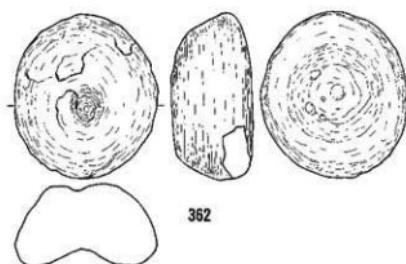
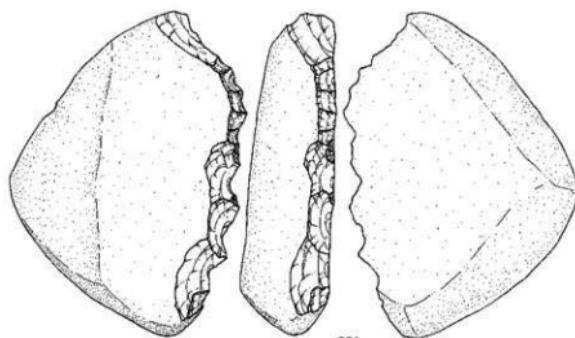
いずれも砂岩製である。（365）は円礫を用い、縁辺部に顕著に使用による敲打痕が認められる。（366）も同じく円礫であるが、縁辺部に敲打痕ではなく、平坦部に研磨痕が認められる。（367）は縁辺部には敲打痕が、平坦部には研磨痕がそれぞれ顕著に残される。平坦部にはこのほか、敲打による使用痕も僅かに見ることができる。

用途不明石器（362, 363, 369～371）

（362）は両面共に中央が窪んだものであるが、加工によるものではない。（363）は両面に剥離を行い、アルファベットのHにも似た形状を呈すが、目的は不明である。（369～371）も人為的な加工を行った痕跡がなく、用途を伺い知ることはできない。（369）は叩き石のような形状であるが、重量が見た目以上に大きく、叩き石としての使用は不可能である。

古代の土器（第46図241～243）

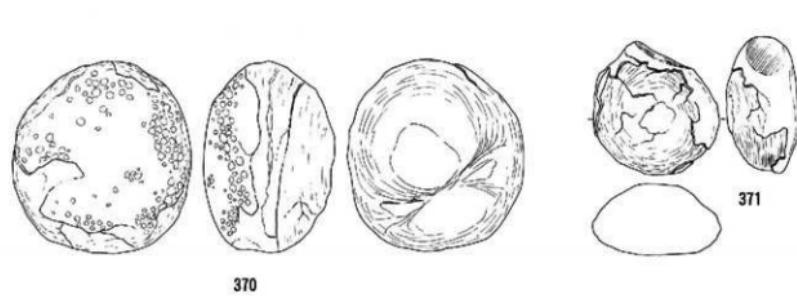
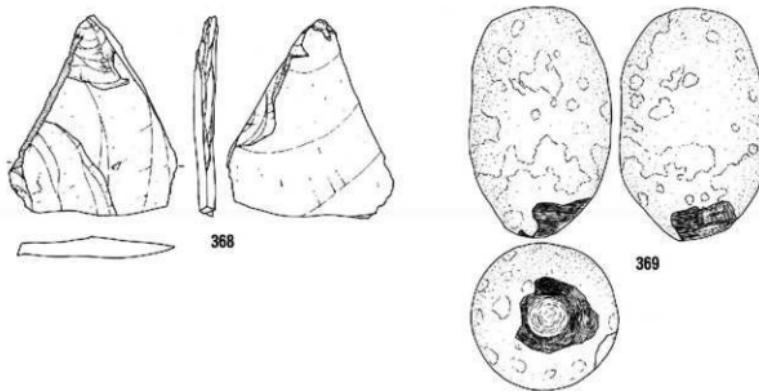
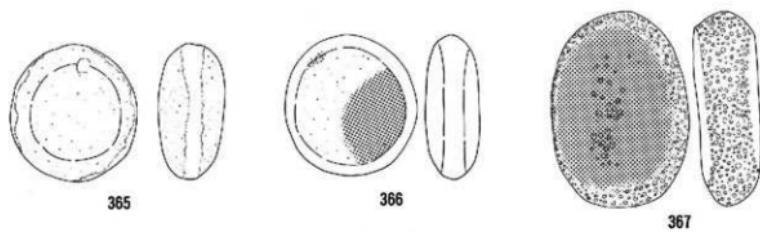
（241, 242）は須恵器である。外面は格子目の叩きが行われており、内面にも叩きが行われた痕跡が残る。器壁は厚い。（243）は内面に布の痕跡が残る土師器である。



0

5(cm)

第53図 出土石器実測図



0 5 10(cm)

第54図 出土石器実測図

No	出土区	品種	長さ(打面長)	幅(打面幅)	厚さ(作業面長)	石材	備考
1	F区	ナイフ形石器	4, 2	1, 8	1, 1	チャート	
2	E区	ナイフ形石器	3, 4	1, 2	0, 5	流紋岩 - 2	
3	C区擾乱	角錐状石器	9, 4	3, 05	0, 95	流紋岩 - 1	
4	C区擾乱	剥片尖頭器	10, 3	3, 15	1, 3	砂岩	
5	C区擾乱	角錐状石器	10, 3	3, 2	1, 9	硬質頁岩	
6	E区表採	三棱尖頭器	10, 3	2, 6	1, 9	張質安山岩	三面加工
7	E区	槍先形尖頭器	11, 4 (欠損)	2, 25	1, 1	流紋岩 - 1	
8	B区	尖頭器	2, 55 (欠損)	2, 2	0, 65	安山岩質	
9	A区	細石刃核	1, 5	1, 6	1, 1	黒曜石	
10	E区	細石刃核	2, 2	0, 65	0, 5	黒曜石	
11	C区擾乱	スクレイパー	6, 9	4, 95	2, 2	硬質頁岩	刃部は短軸
12	C区擾乱	スクレイパー	4, 6	2, 5	1, 75	チャート	石核転用
13	C区擾乱	二次加工剥片	6, 85 (欠損)	3, 1	1, 9	硬質頁岩	
14	C区擾乱	剥片	3, 3	4, 3	1, 4	不明	表面被熱
15	C区擾乱	剥片	7, 9	4, 05	2, 35	硬質頁岩	
16	C区擾乱	剥片	7, 4	5, 0	1, 95	流紋岩 - 1	
17	C区擾乱	剥片	7, 3	4, 3	2, 1	砂岩	
18	C区擾乱	剥片	8, 15	3, 95	1, 7	砂岩	
19	E区	剥片	8, 2	5, 1	2, 1	硬質頁岩	
20	E区	剥片	5, 3	4, 25	2, 2	硬質頁岩	
21	E区	剥片	5, 6	3, 0	1, 3	硬質頁岩	
22	E区	剥片	7, 25	4, 3	1, 9	硬質頁岩	

* 石材の名称については

金丸武司1999「宮崎平野の旧石器時代の石材利用状況について」

『九州地方における石器石材と旧石器時代文化研究（I）』

九州旧石器文化研究会 第24回研究会 発表要叢集 に従う。

表2 出土石器観察表 (1)

胎土（長石：A、角閃石：B、白色粒：C、石英：D、砂粒：E、雲母片：F、多量：多、中量：中、少量：少、微量：微）

No.	出土	部 位	外 面 調 整	内 面 調 整	色 調	胎 土	備 考
23	E区	口縫部	ナデ→爪形刺突	横ナデ	5Y7/1	A:多、B:少、C:多	
24	E区	口縫部	突帯貼付→爪形刺突	ナデ	2, 5Y6/2	A:多、B:少、C:多	23と同一個体
25	E区	胸部	突帯貼付→爪形刺突	ナデ	2, 5Y7/3	A:多、B:少、C:多	23と同一個体
26	A区	胸部	突帯貼付→爪形刺突	不明	10YR8/4	A:少、B:微、C:多	
27	F区	胸部	微隙帶貼付→刺突→ナデ	横ナデ	2, 5Y8/3	A、B、C:多、E:少	
28	E区	胸部	微隙帶貼付→刺突→ナデ	ナデ	10YR8/4	A、B、C:多、E:少	
29	A区	口縫部	突帯貼付→貝殻腹縫押引	ナデ	10YR7/3	A、B:多、C:少	
30	F区	口縫部	ナデ→条痕、刺突	横ナデ	5YR5/6	A:多、C:多、E:多	
31	F区	口縫部	横ナデ→貝殻腹縫刺突	横ナデ	7, 5YR5/4	A:多、C:少	
32	E区	口縫部	横ナデ→爪形刺突	横ナデ	10YR6/4	A:多、B:少、C:多	
33	E区	胸部	横ナデ	ナデ	10YR6/4	A:少、B:少、C:多	
34	B区	口縫部	斜二枚目条痕→刺突	横ケズリ	2, 5Y5/2	A:多、B、C:少	
35	B区	口縫部	斜二枚目条痕→刺突	横ケズリ	10YR8/4	A:多、C:少	
36	F区	口縫部	斜二枚目条痕→刺突	ナデ	2, 5Y8/4	A:多	
37	E区	口縫部	斜二枚目条痕→刺突	ナデ	10YR8/4	A、B:多、C:少	
38	A区	胸部	斜方向条痕	縦ナデ	10YR7/4	A、B、C:多	
39	E区	胸部	斜方向条痕→ミガキ	ミガキ	10YR8/4	A、B、C:多	
40	F区	胸部	ミガキ→斜二枚目条痕	横ミガキ	2, 5Y7/3	A:多、E:少	
41	E区	口縫部	横条痕→貝殻腹縫刺突	斜条痕	7, 5YR6/8	A:多、B:少、C:多	
42	A区	口縫部	連点→深い条痕	横ナデ	2, 5Y8/4	AB:多、C:少、E:少	
43	A区	口縫部	連点→深い条痕	横ナデ	2, 5Y8/4	AB:多、C:少、E:少	41と同一個体
44	A区	口縫部	連点→横向向深い条痕	斜条痕→ナデ	10YR7/6	A:少、B、C:多	
45	A区	口縫部	連点→斜方向条痕	横条痕→ナデ	10YR7/4	AB:多、C:少	
46	A区	口縫部	連点→横向向条痕	縦ナデ	2, 5Y7/4	A:多、B、C:少	
47	E区	口縫部	工具刺突→横条痕	縦条痕	7, 5YR7/6	A:多、B:少、C:多	
48	A区	口縫部	連点→横向向条痕	横ナデ	5YR7/8	A、B:多、C:少	
49	E区	口縫部	横ナデ→押引	不定方向ナデ	10YR7/4	A:多、B:少、C:多	
50	F区	胸部	斜方向条痕→ナデ	ナデ	10YR8/4	A:多、B:少、C:多	
51	A区	胸部	斜方向深い条痕	縦ナデ	2, 5Y8/4	A:多、B:少、C:多	
52	A区	胸部	斜方向深い条痕	縦ナデ	7, 5YR7/6	A:多、B:少、C:多	51と同一個体
53	A区	底部	横方向条痕→縦方向条痕	縦粗いナデ	5YR6/6	A:多、B、C:少	
54	F区	口縫部	横ナデ→貝殻腹縫押引	横丁寧なナデ	10YR7/6	A:多、B、C:少	
55	E区	口縫部	ナデ→羽状沈線	ナデ	10YR6/6	B:微、CF:多、E:少	
56	E区	口縫部	ナデ→羽状沈線	横ナデ	7, 5YR5/6	B:微、CF:多、E:少	
57	A区	口縫部	羽状沈線	横ナデ	2, 5Y8/4	A:多、B、C:少	
58	E区	胸部	ナデ→羽状沈線	横ケズリ	7, 5YR4/4	A:多、B:少、C:多	
59	A区	口縫部	ナデ→刺突	ミガキ	5YR6/6	ABD:少、CE:多	
60	A区	口縫部	横ナデ→斜位の刺突	入金なミガキ	10YR4/2	A、C:多、F:少	
61	F区	口縫部	ナデ→横位の刺突	横ミガキ	7, 5YR5/6	A、C、F:少	
62	F区	胸部	ナデ→羽状刺突	横ナデ	7, 5YR6/4	A:少、B:少、C:多	
63	E区	胸部	刺突→ケズリ	横ケズリ	7, 5YR6/6	A、E:少、C、F:多	
64	A区	胸部	ナデ→羽状刺突	ナデ	10YR5/4	C:多、E:少	
65	A区	胸部	ナデ→羽状刺突	ミガキ	10YR5/3	C:多、E:多	
66	E区	胸部	刺突→ケズリ	横ケズリ	7, 5YR6/6	A、E:少、C、F:多	63と同一個体
67	E区	胸部	刺突→ケズリ	横ケズリ	7, 5YR6/6	A、E:少、C、F:多	63と同一個体
68	F区	胸部	ナデ→刺突	横ミガキ	7, 5YR6/6	A:多、B:少、C:多	
69	F区	底部	ナデ→刺突	横ミガキ	7, 5YR6/6	A:多、B:少、C:多	
70	A区	胸部	縦ナデ→貝殻腹縫刺突	縦入金なナデ	5YR6/6	A:多、B:少、C:多	
71	E区	口縫部	ナデ→羽状刺突	横ミガキ	5YR6/8	A:多、B:多、C:少	
72	F区	口縫部	ナデ→羽状刺突	入金なミガキ	5YR5/6	A:多、B:少、C:多	
73	F区	胸部	ナデ→刺突	横ミガキ	7, 5YR6/6	A:多、B:少、C:多	

表3 出土土器觀察表(1)

胎土（長石：A、角閃石：B、白色粒：C、石英：D、砂粒：E、空母片：F、多量：多、中量：中、少量：少、微量：微）

No	出土 部位	外 面 装 整	内 面 装 整	色 調	胎 土	備 考
74	F区 口縁部	ナデ→棒状工具刺突	人念なミガキ	5YR5/6	A:多、B:少、C:多	
75	E区 山縁部	横ナデ→沈線	継ミガキ	7, 5YR5/8	A:少、B:少、C:多	
76	F区 口縁部	横ナデ→貝殻縫合刺突	横ナデ	2, 5Y6/3	A、B:少、C、E:多	
77	F区 口縁部	粗い横ナデ→刺突	ミガキ	10YR7/6	A:少、C:多、F:多	
78	E区 口縁部	ナデ→沈線、刺突	横ナデ	7, 5YR7/6	A:多、B、C:少	
79	F区 口縁部	継位の横円押型文	横ナデ→押型	10YR7/4	A、B、C:多、F:少	穿孔有り
80	F区 口縁部	継位の横円押型文	横ナデ→押型	10YR2/1	A:多、B:多、C:多	穿孔有り
81	F区 口縁部	継位の横円押型文	横位横円押型	10YR5/6	A:多、B、C、E:少	口唇部押型
82	A区 口縁部	継位の横円押型文	横位横円押型	2, 5Y5/2	A:多、B:少、C:多	口唇部押型
83	F区 口縁部	ナデ→継位横円押型文	横ナデ→押型	7, 5YR7/6	A:多、B:少、C:少	口唇部押型
84	A区 制部	継位の横円押型文	継粗いナデ	10YR6/4	A:少、C:多、F:多	
85	F区 制部	継位の横円押型文	横ナデ	7, 5YR7/6	A:少、B:少、E:少	
86	A区 制部	継位の横円押型文	ナデ	10YR7/6	A、D:少、B、E:多	
87	F区 制部	継位の横円押型文	ナデ	10YR7/4	A:多、B:多、C:少	内面に焼付着
88	F区 制部	継位の横円押型文	ナデ	10YR7/4	A:多、B:多、C:少	
89	F区 制部	継位の横円押型文	横ナデ	7, 5YR7/6	A:多、B:多、C:多	
90	E区 口縁部	継位の横円押型文	押型→沈線	2, 5Y7/3	A:多、B:少、C:多	口唇部無文
91	E区 制部	横位の横円押型文	横ナデ	2, 5Y7/4	A:多、B:多、C:少	
92	E区 制部	横位の横円押型文	横ナデ	2, 5Y7/4	A:多、B:多、C:多	91と同個体
93	F区 制部	横位の横円押型文	横ナデ	7, 5YR7/6	A:多、B:多、C:多	
94	A区 制部	ナデ→横位の横円押型文	ナデ→押型	5YR5/6	C:多、D:少、E:少	
95	A区 制部	横位の横円押型文	横ナデ	7, 5YR6/6	A:少、C:多、F:多	
96	A区 制部	横位の横円押型文	横ナデ	5YR6/8	A:多、B、C、E:少	
97	A区 口縁～	継位の粗大な横円押型文	横ナデ→押型	7, 5YR7/6	A:多、B:少、C:少	穿孔有り
98	F区 口縁部	継位の粗大な横円押型文	横粗いナデ	7, 5YR6/4	B:少、C、D、F:多	口唇部刻目
99	F区 制部	粗大な横円押型文	粗いナデ	2, 5Y4/6	A:多、D:少、F:多	
100	F区 制部	粗大な横円押型文	粗いナデ	10YR6/4	A、F:多、C、E:少	
101	F区 制部	粗大な横円押型文	粗いナデ	10YR6/4	A、F:多、C、E:少	100と同個体
102	A区 制部	粗大な横円押型文	ナデ	7, 5YR7/6	A:多、B:少、C:少	
103	F区 口縁～	横ナデ→斜位の横円押型	横ナデ→押型	7, 5YR7/6	A、C:多、B、D:少	口唇部押型
104	F区 口縁部	ナデ→横円押型文	横ナデ→押型	5YR6/8	A:多、B:少、C:多	口唇部押型
105	F区 山縁部	横ナデ	横位の横円文	7, 5YR7/3	A:少、E:多	口唇部押型
106	F区 山縁部	横ナデ	横位の横円文	7, 5YR7/3	A:少、E:多	105と同個体
107	F区 山縁部	横ナデ	横位の横円文	7, 5YR7/3	A:少、E:多	105と同個体
108	F区 山縁部	不定方向ナデ→横円押型	横ナデ→押型	5YR4/4	A:少、C:多、F:少	口唇部押型
109	F区 山縁部	横ナデ→斜位の横円押型	横ナデ→押型	6YR4/6	A、C、E:多、B:少	口唇部押型
110	F区 制部	ナデ→横円押型文	ケズリ→押型	7, 5YR7/6	A:多、B:少、C:少	
111	F区 制部	斜位の横円押型文	横ナデ	10YR7/4	A:多、B:多、C:少	
112	E区 口縁部	横位の山形押型文	押型→沈線	10YR7/4	A:多、B:少、C:多	波状口縁
113	E区 口縁部	横位の山形押型文	押型→沈線	10YR7/4	A、C、F:多、B:少	112と同個体
114	E区 口縁部	横位の山形押型文	押型→沈線	10YR7/4	A、C、F:多、B:少	112と同個体
115	E区 口縁部	横位の山形押型文	山形押型	10YR7/4	A、C、F:多、B:少	112と同個体
116	A区 制部	横位の山形押型文	横粗いナデ	5YR6/8	D:多、F:多	
117	A区 制部	横位の山形押型文	ナデ	2, 5Y8/4	A:少、B:多、C:多	
118	A区 制部	横位の山形押型文	ナデ	2, 5Y8/4	A、B、C:多、E:少	118と同個体
119	A区 制部	横位の山形押型文	不明	2, 5Y8/4	A:少、B:多、C:多	
120	A区 制部	継位の山形押型文	ナデ	7, 5YR6/4	A:少、C:少、F:少	
121	E区 制部	主に継位の山形押型文	横ナデ	7, 5YR6/6	A、B、E:多、C:少	
122	E区 制部	主に継位の山形押型文	横ナデ	7, 5YR6/6	A、B、E:多、C:少	121と同個体
123	E区 制部	主に継位の山形押型文	横ナデ	7, 5YR6/6	A、B、E:多、C:少	121と同個体
124	A区 口縁部	上縁、下縁の山形押型	横ナデ→押型	7, 5YR6/6	C:多、E:少、F:多	

表4 出土土器観察表(2)

胎土（長石：A、角閃石：B、白色粒：C、石英：D、砂粒：E、雲母片：F、多量：多、中量：中、少量：少、微量：微）

No.	山上	海抜	外面調整	内面調整	色調	胎土	備考
125	F区	口縫部	横ナデ→斜位の山形押型	横ナデ→押型	10 YR 4/4	B:少、E:少、F:多	口縫部押型
126	F区	胸部	不定方向山型押型	横ナデ	10 YR 8/4	A:少、B:少、F:多	
127	F区	胸部	横位の山型押型	ナデ	10 YR 7/4	A:多、B:少、E:少	
128	E区	胸部	縦位の山型に近い押型	ナデ	10 YR 8/4	A:少、B:少、F:多	
129	E区	胸部	ナデ→斜位の押型	横斜いナデ	7, 5 YR 7/6	C:多、F:少	
130	C区	胸部	押型	不明	7, 5 YR 8/6	A:少、B:多、C:少	
131	F区	頸部	縦位の菱形押型	横ナデ	5 Y 1/2	A:多、C:多、E:少	
132	F区	頸部	縦位の山型押型	ナデ→押型	10 YR 7/3	A:多、B:多	
133	B区	口縫部	縦位の山型押型	山型押型	7, 5 YR 3/3	A:多、B:多、C:多	口縫部不明
134	B区	頸部	縦位の山型押型	不明	7, 5 YR 3/3	A:多、B:多、C:多	
135	F区	口縫部	山型押型→棒状工具	横ナデ→押型	2, 5 Y 7/3	A:多、F:少	口縫部刺突
136	F区	頸部	突帯貼付→刻み目、沈線	ナデ	2, 5 Y 8/6	A:多、B:多、C:多	基形は浅鉢形
137	A区	口縫部	突帯贴付→横条痕	ナデ	10 YR 6/4	A、B、C:多、E:少	波状口縫
138	A区	口縫部	突帯貼付→横条痕→刺突	ナデ	10 YR 6/4	A、B、C:多、E:少	137と同個体
139	A区	口縫部	突帯貼付→横条痕→刺突	ナデ	10 YR 6/4	A、B、C:多、E:少	137と同個体
140	A区	頸部	ナデ→突帯貼付→沈線	ナデ	7, 5 YR 7/6	A、B、C:多、E:少	137と同個体
141	A区	頸部	網文→突帯貼付	粗いナデ	10 YR 4/6	AB:少、C:多 F:微	
142	A区	口縫部	突帯→沈線・刻目→ナデ	ナデ	10 YR 8/4	A:多、B、C、E:少	
143	F区	口縫部	突帯→沈線・刻目→押型	10 YR 7/4	A:少、B:少、E:少		
144	A区	口縫部	突帯→ナデ→沈線・刺突	入念なナデ	10 YR 7/4	A、D:少、C、F:多	口縫部刺突
145	A区	口縫部	横ナデ→刺突→沈線	横ナデ	5 Y 6/6	A:多、B、C:少 F:微	口縫部刻目
146	A区	口縫部	突帯貼付→ナデ→沈線	横ナデ	7, 5 YR 6/6	D:多、F:多	口縫部刺口
147	E区	頸部	ナデ→沈線、刺突	横ナデ	2, 5 Y 8/4	A:多、B、C、E:少	
148	E区	頸部	突帯貼付→沈線・刺突	ナデ	10 YR 7/4	A:多、B:多、C:少	147と同個体
149	A区	胸部	隆起→沈線・連点	横ナデ	7, 5 YR 7/6	A:少、B:少、C:多	
150	D区	胸部	沈線	ナデ	10 YR 7/4	A:多、B:多、C:多	
151	F区	胸部	突帯貼付→沈線、刺突	ナデ	10 YR 7/4	A、C、E:多、F:少	
152	F区	胸部	沈線、刺突	ナデ	10 YR 7/4	A、C、E:多、F:少	
153	F区	胸部	沈線、刺突	横粗いナデ	10 YR 7/4	A、C、E:多、F:少	
154	A区	頸部	沈線、刺突	横粗いナデ	10 YR 7/4	A、C、E:多、F:少	
155	A区	口縫部	網文→刻目	不明	2, 5 Y 6/2	A:多、B:多、C:多	
156	F区	口縫部	横ナデ→沈線・刻目	ナデ	10 YR 7/4	A:多、B:多、C:少	
157	A区	胸部	突帯貼付→刻目→撚糸	横ナデ	10 YR 5/3	A:多、B:少、E:少	
158	C区	胸部	沈線・刺突→撚糸	ナデ	7, 5 YR 5/8	A:少、B:多、E:多	
159	A区	口縫部	ナデ→沈線	横ナデ	5 YR 6/8	A:多、B:少、C:多	口縫部刻目
160	A区	口縫部	ナデ→沈線	横ナデ	5 YR 6/8	A:多、B:少、C:多	159と同個体
161	A区	口縫部	ナデ→沈線	横ミガキ	5 YR 6/8	A:多、B:少、C:多	159と同個体
162	E区	胸部	横ナデ→撚糸→沈線	横ナデ	10 YR 8/4	A:多、B:少、E:少	
163	E区	胸部	ナデ→撚糸→沈線	横入念なナデ	10 YR 6/4	A:多、B:少、C:多	
164	F区	胸部	横ナデ→撚糸	横ナデ	10 YR 7/3	A:多、B:少、E:少	
165	F区	胸部	ナデ→沈線→網文	不明	10 YR 6/3	A:多、B:少、C:多	
166	F区	胸部	ナデ→沈線→網文	不明	2, 5 Y 7/4	D:多、F:多	
167	F区	胸部	ナデ→沈線→網文	不明	10 YR 7/4	D:多、F:多	
168	F区	胸部	ナデ→沈線→網文	不明	2, 5 Y 8/4	A:少、C:多、F:多	
169	F区	胸部	沈線→ナデ→網文	ナデ	2, 5 Y 3/2	AF:少、B:微 C:多	
170	A区	頸部	ナデ→沈線・刺突	横ミガキ	10 YR 6/2	C:多、D:少、F:多	
171	A区	口縫部	貝殻腹縫押引	横入念なナデ	2, 5 Y 8/6	C:少、E:多	口縫部刺目
172	E区	口縫部	横ナデ→貝殻腹縫押引	横ナデ	5 YR 6/6	A:多、B、C、E:少	口縫部刺目
173	A区	頸部	横条痕→貝殻腹縫押引	横ミガキ	7, 5 YR 6/6	A:多、B:少、C:多	
174	A区	口縫部	沈線→ナデ	横ナデ	10 YR 6/4	A:多、B:多、C:少	口縫部刺目
175	A区	口縫部	沈線→ナデ	横ナデ	10 YR 6/4	A:多、B:多、C:少	174と同個体

表5 出土土器観察表(3)

胎土（長石：A、角閃石：B、白色粒：C、石英：D、砂粒：E、雲母片：F、多量：多く、中量：中、少量：少、微量：微）

No.	出土	部位	外 面 調 整	内 面 調 整	色 調	胎 土		備 考
						A	B	
176	F区	口縁	突帯→鰐堤沈線→刺突	横条痕→ナデ	7, 5YR6/3	A、C: 多、B、E: 少		波状口縁
177	F区	口縁	突帯→鰐堤沈線→刺突	横条痕→ナデ	7, 5YR6/3	A、C: 多、B、E: 少		176と同體
178	F区	胴部	突帯→鰐堤沈線→刺突	横条痕→ナデ	7, 5YR6/3	A、C: 多、B、E: 少		176と同體
179	C区	口縁	縦位条痕→横位条痕	斜条痕→ナデ	7, 5YR8/4	A: 多、B: 少、C: 少		口縁部割目
180	C区	口縁	縦位条痕→横位条痕	斜条痕→ナデ	7, 5YR7/6	A: 多、B: 少、C: 少		179と同體
181	B区	口縁部	不定方向条痕	横条痕	7, 5YR7/6	A: 少、B: 少、C: 多		
182	A区	口縁部	横ナデ→刺突	横ナデ	5YR5/6	A、B、E: 多、C: 少		
183	B区	胴部	斜方向条痕	ナデ	7, 5YR7/6	A: 少、B: 少、C: 多		
184	C区	底部	ナデ→横条痕	ナデ	7, 5YR7/6	A: 多、B: 少、C: 少		
185	C区	口縁	工具ナデによる微隆帯	ミガキ	7, 5YR7/6	A: 少、B: 多、C: 少		口縁部割目
186	C区	口縁部	工具ナデによる微隆帯	ミガキ	7, 5YR7/6	A: 少、B: 少、D: 多		185と同體
187	A区	口縁部	工具ナデによる微隆帯	横ナデ→柔痕	10TR6/3	A: 多、B: 微、D: 少		
188	C区	胴部	工具ナデによる微隆帯か	丁寧なナデ	10YR7/4	A: 多、B: 少、C: 少		
189	C区	口縁部	工具ナデによる微隆帯	ミガキ	10YR8/3	A: 少、B: 少、D: 多		185と同體
190	F区	口縁部	ナデ→繩文	横ナデ→繩文	2, 5Y7/3	A: 多、B: 少、C: 少		口唇部繩文
191	F区	口縁部	ナデ→繩文	横ナデ→繩文	"2,5Y1,7/1"	A: 多、B: 少、C: 少		口唇部繩文
192	F区	口縁部	繩文	横ナデ→繩文	2, 5Y4/2	A: 多、C: 少		口唇部繩文
193	F区	口縁部	ナデ→繩文	横ナデ→繩文	"2,5Y1,7/1"	A: 多、B: 少、C: 少		191と同體
194	F区	胴部	ナデ→繩文	ナデ	7, 5YR7/6	A: 多、B: 少、C: 多		
195	F区	口縁部	ナデ→撲糸	横ナデ	7, 5YR8/4	A: 多、B: 少、C: 少		口唇部無文
196	F区	胴部	粗いナデ→撲糸	不明	10YR7/4	A: 多、B: 少、C: 多		
197	F区	胴部	ナデ→撲糸	横入念なナデ	10YR7/4	A: 多、B: 少、C: 多		
198	A区	口縁部	入念なナデ	ミガキ→条痕	10YR7/4	C: 多、C: 少、F: 多		器形は壺形
199	A区	胴部	ナデ→沈線	ナデ	7, 5YR6/6	A: 多、B: 少、C: 多		器形は壺形
200	A区	胴部	不明	不明	7, 5YR7/6	A: 多、B: 多、C: 少		器形は壺形
201	A区	肩部	不明	不明	10YR7/4	A: 多、B: 多、C: 少		器形は壺形
202	A区	肩部	不明	不明	2, 5Y4/2	A: 多、B: 多、C: 少		器形は壺形
203	A区	肩部	不明	不明	2, 5Y4/2	A: 多、B: 多、C: 少		器形は壺形
204	A区	肩部	不明	不明	10YR7/4	A: 多、B: 少、C: 多		器形は壺形
205	A区	口縁部	不明	不明	2, 5Y7/3	A: 少、C: 少		口唇部押圧
206	A区	口縁部	ナデ	ナデ	7, 5YR8/6	A: 多、C: 多、E: 多		
207	E区	口縁部	横ナデ	横入念なナデ	10YR7/4	A: 多、C: 多		
208	A区	口縁部	横ナデ	横ナデ	10YR8/6	A: 多、B: 少、C: 少		
209	A区	口縁部	横ナデ	横ナデ→沈線	10YR2/2	A: 多、B: 少、C: 少		
210	A区	胴部	沈線→ナデ	ナデ	10YR5/3	A: 多、B: 多、C: 少		
211	A区	胴部	沈線→ナデ	ナデ	10YR8/3	A: 多、B: 多、C: 少		
212	E区	胴部	斜位条痕→沈線	横ナデ	10YR7/4	A: 多、B: 少、C: 少		
213	A区	胴部	斜位条痕→突帯貼付	横ナデ	2, 5Y8/4	A: 多、B: 多、C: 少		
214	A区	胴部	斜位の深い条痕	横ナデ	7, 5YR7/6	A: 多、B: 少、C: 少		
215	A区	胴部	斜方向沈線	ナデ	10YR7/4	A: 多、B: 少、C: 多		
216	A区	胴部	ナデ→沈線	横ナデ	10YR6/3	A: 多、B: 少、C: 多		
217	E区	口縁部	横位条痕→横ケズリ	横ナデ	10YR8/4	A: 多、B: 微、C: 少		口唇部ケズリ
218	F区	口縁部	突帯貼付→横ナデ→刺目	横ナデ	10YR8/4	A: 多、C: 多		外面に煤付着
219	F表	口縁部	突帯貼付→横ナデ→刺目	条痕→横ナデ	5Y5/2	A: 多、B: 少、C: 多		220と同體
220	F表	口縁部	突帯貼付→横ナデ→刺目	横ナデ	10YR8/4	A: 多、B: 少、C: 多		口唇部突起有
221	F表	口縁部	突帯貼付→横ナデ→刺目	条痕→横ナデ	5Y5/2	A: 多、B: 少、C: 多		220と同體
222	F表	口縁部	突帯→ナデ→刺目・押引	横ナデ	10YR8/4	A: 多、C: 多		
223	F表	胴部	ナデ→棒状工具刺突	ナデ	2, 5Y8/3	A: 多、C: 多		外面に煤付着
224	F表	胴部	ナデ→棒状工具刺突	ナデ	2, 5Y8/3	A: 多、C: 多		223と同體
225	F表	胴部	ナデ→棒状工具刺突	ナデ	2, 5Y8/3	A: 多、C: 多		223と同體
226	F表	胴部	ナデ→棒状工具刺突	ナデ	2, 5Y8/3	A: 多、C: 多		223と同體

*出土区に“表”とあるものは
表面採集による遺物である。

表6 出土土器観察表(4)

胎土（長石：A、角閃石：B、白色粒：C、石英：D、砂粒：E、萤石片：F、多量：多、中量：中、少量：少、微量：微）

No	出土	部位	外面調整	内面調整	色調	胎土	備考
227	D区	口縁部	沈線文	横ナデ	5 YR 6/6	A:多、B:多、C:多	
228	D区	胴部	ナデ→沈線	ナデ	10 YR 8/3	A:多、B:少、C:少	外面に煤付着
229	D区	胴部	ナデ→沈線	ナデ	7, 5 YR 7/6	A:多、B:少、C:多	
230	E区	胴部	ナデ→沈線	横ナデ	7, 5 YR 6/6	A:多、C:多	
231	B表	胴部	ナデ→突帯貼付	ナデ	7, 5 YR 7/4	A:多、B:少、C:少	
232	D区	胴部	ナデ→突帯貼付	不定方向条痕	7, 5 YR 6/4	C:多、D:少、F:少	
233	E表	胴部	突帯→ナデ→刻目・沈線	横ナデ	7, 5 YR 5/4	A:多、B:多、C:多	
234	D区	口縁部	ナデ→沈線	刷目状の条痕	5 YR 6/8	A、C、D:少、B:多	
235	D区	口縁部	突帯→觀文→沈線	ナデ	2, 5 Y 8/3	C:少、D:多、E:少	
236	D区	口縁部	継ケズリ→口縁部横ナデ	横ナデ	10 YR 5/4	A:多、B:少、C:少	
237	D区	胴部	沈線文	ナデ	7, 5 YR 6/6	A:少、B:少、C:多	
238	D区	胴部	觀文→沈線	横ナデ	10 YR 6/3	A:多、B:少、C:多	
239	D区	底部	ナデ	ナデ	7, 5 YR 7/4	A:少、C:少	
240	D区	底部	横ナデ	ナデ	2, 5 Y 8/4	A:多、B:少、C:多	
241	E表	胴部	格子目の叩き	叩き	10 Y 6/1		須恵器
242	E表	胴部	格子口の叩き	叩き	10 Y 6/1		須恵器
243	E表	胴部	ナデ	布压痕	10 YR 8/4		布壓土器

*出土区に“表”とあるものは
表面採集による遺物である。

表7 出土土器観察表(5)

No	出上区	品種	長さ(打面長)	幅(打面幅)	厚さ(作業面長)	石材	備考
244	A区	石鐵	3, 55	1, 95	0, 45	張質安山岩	
245	A区	石鐵	3, 7	1, 6	0, 45	張質安山岩	
246	A区	石鐵	3, 2	2, 1	0, 55	張質安山岩	
247	A区	石鐵	2, 2	1, 6	0, 4	張質安山岩	
248	A区	石鐵	1, 9	1, 55	0, 5	張質安山岩	
249	A区	石鐵	2, 15	1, 3	0, 35	張質安山岩	
250	A区	石鐵	2, 3	1, 45	0, 45	姫島黒曜石	
251	A区	石鐵	1, 7	1, 6	0, 4	姫島黒曜石	
252	A区	石鐵	1, 65	1, 3	0, 4	姫島黒曜石	
253	A区	石鐵	1, 6	1, 35	0, 35	姫島黒曜石	
254	A区	石鐵	1, 8	1, 3	0, 3	姫島黒曜石	
255	A区	石鐵	1, 5	1, 05	0, 45	姫島黒曜石	
256	A区	石鐵	2, 1	1, 2	0, 5	姫島黒曜石	
257	A区	石鐵	1, 05	1, 4	0, 4	姫島黒曜石	
258	A区	石鐵	3, 3	2, 0	0, 6	姫島黒曜石	
259	A区	石鐵	1, 55	1, 55	0, 35	姫島黒曜石	
260	A区	石鐵	1, 45	1, 6	0, 35	姫島黒曜石	
261	A区	石鐵	1, 45	1, 3	0, 4	黒曜石	
262	A区	石鐵	3, 3	1, 85	0, 45	黒曜石	
263	A区	石鐵	2, 15	1, 55	0, 35	黒曜石	
264	A区	石鐵	1, 95	1, 6	0, 6	チャート	
265	A区	石鐵	1, 65	1, 6	0, 35	チャート	
266	A区	石鐵	1, 9	1, 55	0, 35	チャート	
267	A区	石鐵	2, 95	1, 55	0, 35	砂岩	
268	A区	石鐵	2, 25	1, 9	0, 5	砂岩	
269	B区	石鐵	2, 2	1, 85	0, 45	砂岩	
270	B区	石鐵	2, 2	1, 3	0, 45	流紋岩-2	
271	B区	石鐵	1, 9	1, 56	0, 4	姫島黒曜石	
272	B区	石鐵	2, 55	1, 65	0, 5	硬質頁岩	
273	C区攪乱	石鐵	2, 9	2, 2	0, 5	チャート	
274	C区攪乱	石鐵	2, 7 (欠損)	2, 5	0, 55	チャート	
275	D区攪乱	石鐵	2, 1	1, 3 (欠損)	0, 35	硬質頁岩	
276	D区攪乱	石鐵(未製品)	1, 3 (欠損)	1, 45	0, 45	黒曜石	
277	E区	石鐵	1, 45	1, 25	0, 35	黒曜石	
278	E区	石鐵	1, 5	1, 3	0, 35	黒曜石	
279	E区	石鐵	2, 2	1, 15	0, 5	黒曜石	
280	E区	石鐵	1, 6	1, 4	0, 7	黒曜石	
281	E区	石鐵	1, 2	1, 3	0, 35	黒曜石	
282	E区	石鐵	1, 5	1, 15	0, 25	チャート	
283	E区	石鐵	2, 45	1, 55	0, 4	チャート	
284	F区	石鐵	1, 4	1, 5	0, 35	チャート	
285	F区	石鐵	1, 35	1, 4	0, 3	姫島黒曜石	
286	F区	石鐵	2, 2	1, 5	0, 4	姫島黒曜石	
287	F区	石鐵	2, 4	1, 95	0, 4	姫島黒曜石	
288	F区	石鐵	1, 35	1, 05	0, 3	黒曜石	
289	F区	石鐵	1, 6	1, 75	0, 45	チャート	
290	F区	石鐵	2, 9	2, 1	0, 55	チャート	
291	F区	石鐵	1, 5	1, 3	0, 4	チャート	
292	F区	石鐵	1, 45	1, 35	0, 45	チャート	
293	A区	石鐵	2, 9	1, 65 (欠損)	0, 55	張質安山岩	
294	A区	石鐵	2, 0 (欠損)	1, 5 (欠損)	0, 45	張質安山岩	

表8 出土石器観察表(2)

No.	出上区	品種	長さ(打面反)	幅(打面幅)	厚さ(作業面長)	石材	備考
295	A区	石鎚	2, 8	1, 4 (欠損)	0, 45	姫島黒曜石	
296	A区	石鎚	3, 4	1, 25 (欠損)	0, 5	姫島黒曜石	
297	A区	石鎚	2, 15 (欠損)	2, 0	0, 4	チャート	
298	A区	石鎚	2, 3	1, 8 (欠損)	0, 5	チャート	
299	A区	石鎚	2, 05 (欠損)	1, 3 (欠損)	0, 4	チャート	
300	A区	石鎚	2, 45	1, 75 (欠損)	0, 4	チャート	
301	A区	石鎚	1, 95	1, 8	0, 45	チャート	
302	A区	石鎚	1, 65	1, 45 (欠損)	0, 5	黒曜石	
303	A区	石鎚	1, 75	1, 55 (欠損)	0, 4	黒曜石	
304	A区	石鎚	1, 55 (欠損)	1, 4	0, 3	硬質頁岩	
305	A区	石鎚	2, 8	1, 65 (欠損)	0, 4	チャート	
306	B区	石鎚	1, 95 (欠損)	1, 45 (欠損)	0, 45	黒曜石	
307	B区	石鎚	2, 1 (欠損)	1, 8 (欠損)	0, 45	張賀安山岩	
308	B区	石鎚	2, 7 (欠損)	1, 75 (欠損)	0, 4	姫島黒曜石	
309	E区	石鎚	2, 0 (欠損)	1, 85	0, 75	チャート	未製品か
310	E区	石鎚	1, 55	1, 95 (欠損)	0, 4	チャート	
311	E区	石鎚	2, 5 (欠損)	1, 5 (欠損)	0, 4	黒曜石	
312	E区	石鎚	1, 9 (欠損)	1, 85 (欠損)	0, 35	硬質頁岩	
313	A区	石鎚	1, 8 (欠損)	2, 25	0, 45	チャート	再加工有り
314	A区	石鎚	1, 85 (欠損)	1, 2 (欠損)	0, 35	姫島黒曜石	再加工有り
315	A区	石鎚	1, 55 (欠損)	1, 45 (欠損)	0, 45	姫島黒曜石	再加工有り
316	F区	石鎚	1, 5 (欠損)	1, 55 (欠損)	0, 4	黒曜石	再加工有り
317	B区	尖頭状石器	1, 8	1, 65	0, 8	黒曜石	
318	B区	尖頭状石器	2, 0	2, 1	0, 5	チャート	
319	B区	尖頭状石器	2, 6	1, 8	0, 85	蛋白石	
320	B区	両面加工石器	3, 85	2, 9	0, 65	硬質頁岩	
321	E区	尖頭状石器	2, 7	1, 8	0, 65	硬質頁岩	
322	E区	尖頭状石器	2, 2	2, 55	0, 5	流紋岩 - 2	
323	E区	尖頭状石器	2, 7	2, 0	0, 6	流紋岩 - 2	
324	E区	両面加工石器	3, 4	3, 7	1, 7	チャート	
325	E区	両面加工石器	2, 85	2, 7	1, 0	流紋岩 - 2	
326	E区	両面加工石器	3, 35	2, 3	0, 8	流紋岩 - 1	
327	E区	両面加工石器	3, 4	2, 85	1, 95	流紋岩 - 1	
328	E区	両面加工石器	3, 45	3, 05	0, 95	流紋岩 - 2	
329	E区	両面加工石器	4, 2	3, 8	1, 3	流紋岩 - 3	
330	E区	両面加工石器	4, 4	2, 95	1, 35	硬質頁岩	
331	E区	両面加工石器	5, 1	3, 65	2, 25	流紋岩 - 2	
332	A区	石鎚	2, 65	0, 9	0, 35	チャート	
333	A区	石鎚	2, 65	1, 5	0, 55	姫島黒曜石	
334	F区	石鎚	2, 25	2, 05	0, 6	チャート	
335	A区	石匙	6, 1	2, 05	0, 7	張賀安山岩	
336	A区	石匙	3, 8	3, 4	0, 75	張賀安山岩	
337	A区	石匙	4, 55	2, 5	0, 95	張賀安山岩	
338	A区	石匙	4, 55	1, 9	0, 9	張賀安山岩	
339	A区	スクレイパー	9, 25	4, 7	3, 25	砂岩	
340	F区	スクレイパー	5, 9	3, 7	1, 0	流紋岩 - 2	
341	E区	スクレイパー	3, 65	0, 85	0, 5	硬質頁岩	
342	A区	スクレイパー	8, 6	6, 8	2, 65	砂岩	
343	E区	スクレイパー	6, 6	5, 65	3, 2	硬質頁岩	
344	E区	スクレイパー	6, 4	3, 25	1, 6	頁岩	
345	E区	スクレイパー	9, 1	7, 05	1, 7	砂岩	

表9 出土石器観察表(3)

No.	出土区	品種	長さ(打面長)	幅(打面幅)	厚さ(作業面)	石材	備考
346	F区	スクレイパー	7, 8	4, 4	2, 45	頁岩	
347	E区	スクレイパー	11, 85	7, 8	4, 3	硬質頁岩	
348	A区	石斧	8, 3	5, 05	1, 7	頁岩	
349	A区	石斧	12, 5	6, 0	2, 7	硬質頁岩	
350	F区	石斧	5, 3 (欠損)	6, 8	2, 65	頁岩	
351	A区	石斧	14, 45	9, 15	3, 8	硬質頁岩	
352	A区	石斧	18, 0	8, 2	3, 45	硬質頁岩	
353	E区	剥片	6, 5	2, 05	0, 8	頁岩	
354	A区	二次加工剥片	2, 9	1, 2	0, 55	チャート	
355	B区	二次加工剥片	3, 1	2, 15	1, 2	チャート	
356	A区	使用痕剥片	3, 55	1, 45	0, 55	硬質頁岩	
357	A区	使用痕剥片	2, 0 (欠損)	1, 35	0, 25	張賀安山岩	
358	E区	二次加工剥片	6, 65	4, 4	3, 1	流紋岩 - 2	
359	A区	剥片	6, 85	2, 7	1, 1	硬質頁岩	
360	F区	石核	7, 5	9, 5	12, 7	硬質頁岩	
361	A区	砾器	11, 2	7, 2	2, 85	砂岩	
362	A区	用途不明石器	5, 75	5, 0	2, 85	不明	
363	A区	用途不明石器	2, 25	1, 65	0, 6	チャート	
364	A区	原石	15, 3	13, 5	6, 5	張賀安山岩	
365	A区	磨石	7, 8	7, 9	3, 74	砂岩	
366	A区	磨石	8, 1	7, 8	3, 1	砂岩	
367	A区	磨石	11, 4	9, 5	1, 3	砂岩	
368	B区	剥片	9, 5	7, 85	3, 65	張賀安山岩	
369	E区	叩石	13, 3	8, 0	8, 3	不明	
370	A区	用途不明石器	11, 0	10, 0	7, 4	不明	
371	A区	用途不明石器	8, 55	7, 1	4, 15	不明	

表10 出土石器観察表 (4)

第三章 まとめ

今回の調査は、当初調査区南部に流れる、元野地区を横断する少河川より離れた位置にあるため、遺跡は小規模であると考えられていた。ところが本調査では多くの遺構・遺物が出土し、先史時代、この地点において生活が営まれていることが明らかとなった。これは、調査区を東西に横断する湿地が、かつては河川として水利を供給していたことを裏付けるものである。この河川は、調査区南西よりA区の北部を隣接しながら流れるものと、調査区北西よりE区の南部に深い谷を刻みながら流れる二つの河川があり、調査区周辺は二つの河川の合流点であったと考えられる。

旧石器時代は、その殆どがC区及びE、F区にて出土している。このうちC区は表土層下の擾乱層より出土しているが、これは西部にある台地の一部が崩落した際の流れ込みと考えられる。この地点は既に大規模な削平を受けているため、遺跡の規模等を図り知ることはできないが、出土した石器はナイフ形石器文化期に相当し、編年的に大きなずれは認められない。E、F区は少量ではあるもののナイフ形石器文化期と細石刃文化期の遺物が確認された。なお、E区表面より採集された三稜尖頭器と、F区より確認されたナイフ形石器は時期差が考えられ、ナイフ形石器文化期の中でも、幾つかの時期にわたって遺跡が形成されたことを窺わせる。

細石器文化期の遺物は2点のみであり、黒曜石の小礫を利用したものである。型式上は野岳型細石刃核に分類され、細石器文化期の古相に位置づけられる。また、E区からは槍先形尖頭器が出土しているが、これは両縁から規則的な調整が行われており、IH石器時代終末から繩文時代草創期に東日本を中心に分布する長者久保・神子柴文化段階に位置づけられる。槍先形尖頭器は、町内では井手ノ尾遺跡等でも出土が確認されているが、両縁からの規則的な剥離は行われない。繩文時代早期の包含層からの出土であるといえ、貴重な遺物と言える。

繩文時代は、草創期より遺物の出土が確認された。主にE区に分布するが、一部A、F区にも及んでいる。E区から出土した(23~25)は爪形文上器である。これは井手ノ尾遺跡ほか、芳ヶ迫第3遺跡でも類例を見ることができる。(26~28)は隆帯に爪形文を残しながら貼り付けたもので、周辺では宮崎市堂地西遺跡や、同椎屋形第1遺跡で確認されている。また、(29)の隆帶上押引文は、鹿児島県中種子町奥ノ仁田遺跡に類似する。このように、草創期の上器は少量ながらも幾つかに分類が可能である。IH石器時代末から繩文時代草創期にかけての遺物はこれらの土器と、槍先形尖頭器があるが、出土層位が同じであるため両者の関係は不明である。

早期は、遺構・遺物を通じ調査区内に最も多くの痕跡が残される。全ての調査区で出土が確認されたが、D区は西部からの流れ込みであると考えられる。前葉から後葉にかけて、川を挟んだ両岸であるA区とE、F区、また川の中州と考えられるB区に集中的に痕跡が残される。以下、これら早期の土器について、時期的に順を追って検討を加えたい。

I類は、円筒形の器形を呈し条痕を施した土器である。

I類aは、貝殻条痕文土器である。これらの上器は町内の縄文時代早期の遺跡で頻繁に出土が確認されている土器であり、町内では田野町鹿村野地区ズクノ山第2遺跡E地区にて多量に確認されたほか、県内では西都市別府原遺跡でも多く確認されている。本遺跡ではごく少量に留まり、その多くがE、F区からの出土である。なお、(41)については、前平式土器に該当する。

I類bは、深い条痕文を持つ前平式土器と考えられる。これも芳ヶ迫、札ノ元遺跡をはじめ、町内に多くの出土例がある。殆どA区から出土したものである。

I類cに分類された2点のうち(54)は吉田式土器である。町内の遺跡から出土が確認されるのはごく稀であり、この時期の大規模な遺跡密集地である前平遺跡群でも出土は数点のみである。

II類は、円筒形の器形を呈し沈線及び刺突を施した土器である。

II類aは桑ノ丸3類に該当する。札ノ元遺跡や井手ノ尾遺跡、昨年調査が行われたズクノ山第2遺跡F地区からも出土が確認されている。

II類bは下剥峰式土器である。町内の山上遺跡を見ると、桑ノ丸3類とほぼ重なる傾向にある。うち(70)は器面の成形時に貝殻条痕を粗く刺突したものであり、磨き等の処理が行われず、他の分類の土器とは様相を異にする。

II類cには多種の文様があるが、この中に(71~73)は羽状の短沈線が連続する文様構成であり、近年辻タイプと呼称される一群に該当する。また、それ以外の土器も、刺突を行うことや口縁部断面形より、それに類するものと考えられる。

以上II類は、大部分がE、F区で出土しているが、一部A区でも確認されている。

III類は、押型文土器である。a類は、そのうち楕円押型文が施された一群である。

III類a1は、内面及び口唇部には外面と同じ原体が横位に施文されるが、(80)の口唇部は、浅い刻みが見られる。他の分類の上器にもしばしば見られるが、これは原体条痕の名残りであると考えられる。器形は口縁部で外反する器形を呈す。(79、80)は、胸部には僅かな膨らみがある程度だが、(84)の胸部は若干強調されている。多くはF区より出土したものであるが、一部A区からも確認された。細粒ではあるが、縦位に施文されることや器壁の厚さから、押型文土器の編年中ではやや後出である可能性も考えられる。

III類a2は、出土数は少量であるものの、A、E、F区に分散して出土した。(90)は内面上部に原体条痕が巡る。これらの特徴は、東九州において設定される早水台式土器のそれに近い。他の分類の楕円押型文土器と比較すると、最も古い時期と考えられる。

III類a3は、A区とF区より出土が確認された。このうち(97)は縦方向への施文が口縁~胸部に至ることや、粗大な楕円文を持つこと、原体条痕の省略等、下生B式と同じ特徴を持つ。また、(98)は屈曲気味に外反する口縁部を持つことや、口唇部に原体条痕を行うなど、(97)とは異なる属性が見られる。(99~101)は器形が不明ではあるものの、粗大な楕円文は田村式土器のそれと酷似する。また、この十器には胎土に雲母片が多く含まれることも特徴として挙げられる。

III類a4は口縁部の断面形及び傾きはまちまちである。全てF区でのみ確認された。(103)の施文方向は縦位の崩れたものと考えられる。但し押型文は細粒の部類に入り、東九州における押型文の編

年を以て特定の型式に分類することはできない。

III類a 5 もF区のみの出土である。幾重にも施文を行っており、下背生B式土器またはその前後の時期と考えられる。

b類は山形押型文が施文された一群である。

III類b 1 のうち、器壁の薄い(112~115)は同一個体であり、E区から出土した。波状口縁を呈し、内面には外面と同じ原体の施文が見られるが、その上部には短沈線(原体条痕)を行う。編年的には東九州における早水台式土器の段階に属する。残りは全点A区から出土したものである。横位施文ではあるものの、器壁が厚く、上記の土器よりは後出と考えられる。

III類b 2 はA区からの出土であるが、1点のみしか確認されなかった。山形押型文を縦位に施文する点は、押型文土器編年の終末期にあたるヤトコロ式土器に類似する。

III類b 3 となる(124)は、口縁部から下へ横→縦→横という方向で施文される。内面施文も複数回にわたって施文が行われる。また、口唇部には刺突とも思われる刻みが行われる。これらの様相は、押型文の編年の中でも後出にあたる。またこの他の土器も、それに前後する時期が予想される。

III類c のうち(129, 130)の外面に施文される幅広の格子目は、近隣では天ヶ城跡に類例がある。

IV類は、胴部で「く」の字に屈曲する手向山式土器である。(131~134)の外面は山形や菱形の押型文が施文されるが、これらは手向山式土器の中でも初期のものと考えられる。(135)は押型文の施文の後に沈線による曲線が施文される。(136)の外面に押型文は見られず、沈線と隆帯により構成される。なお、器形は浅鉢形であり特異である。

V類は刻み目を有す突帯が連続して巡る一群である。

このうち、V類aとした(137~140, 142, 143)は天道ヶ尾式土器である。(137~140)は4単位の波頂部には瘤が貼り付けられる。この瘤の貼付は、えびの市妙見遺跡を標識とする妙見式土器にも行われており、両者の密接な関係を示す。(142)の口縁部は隆帯が密に貼り付けられているが、この隆帯とその間隔は、天道ヶ尾遺跡の出土資料に近い。(143)は器面には押型文の施文も見られるが、隆帯を数条貼り付ける点を考慮し、天道ヶ尾式土器の範疇とした。

V類bの(141)は繩文を地文とし、突帯を貼り付ける特徴から妙見式土器と考えられる。町内ではこの他に高野原遺跡(A区)、前ノ原第2遺跡からも出土している。なお、このV類は(143)を除く全てがA区より出土した。

VI類は平柄式土器である。このうち(144, 146)の断面が一三角形を呈す幅狭となる口縁部の特徴は、高橋信武氏の設定する平柄I式の内容に近い。また、口縁部文様帶の幅が広がった(147~150)はIII式に、I式とIII式の中間である(145, 155)はII式にそれぞれ文様構成が類似する。I式はA区のみから出土するが、それ以降はA、D、E、F区からそれぞれ少量ずつ出土する。

VII類は塞ノ神式土器である。これも同様に、高橋氏の論考中で行われた分類に従い分類を行いたい。

(159~161)は口縁部が「く」の字状に屈曲し、沈線文を施文したものである。これらは塞ノ神I式古段階のそれに近い。これらは同一個体であり、A区から集中して出土した。また、胴部に撫糸文を縦位に施文した(162~164)も、I式のいずれかに属すると考えられる。E、F区から出土した。(165~169)の、二本の沈線による区画内に繩文を施文したものや、(170)に見られる頸部~胴部の

境界に沈線・刺突を施す点は、塞ノ神II式に相当する。(170)がA区から確認された以外は、全てF区から出土したものである。また、(172~173)の口縁部の傾きや貝殻腹縁による押引きは塞ノ神III式中段階と考えられる。A、E区から出土した。また、(174, 175)は口縁部に沈線による曲線が施されるが、これは塞ノ神III式新段階からIV式に該当すると思われる。どちらもA区からの出土である。

VII類は特異であり、既存の型式名で判断するのは困難が生じる。但し「陸帯を貼り付け、貝殻条痕による曲線が横位に施す。」という外面施文の手法のみに着目すれば、鹿児島県中種子町苦浜貝塚を標識とする苦浜式土器に共通点を見ることができる。この土器型式は、隣町の橋山第1遺跡A地区から確認され、宮崎県央部も分布域であることが明らかとなつた。近隣では平成12年度に調査が行われた黒草第2遺跡からも出土している。

IX類は、一部を除きC区のIV層中から出土した。

IX類aの(181, 183)は、器面に斜方向からの粗い条痕文が深く刻まれており、鎌石橋式土器に該当する。(179, 180)の外面の条痕文は、一般的な鎌石橋式上器と比べ條痕に規則性があり、また内面も条痕の後にナデが行われている点も特異であるが、バリエーションとして範疇に含めた。この土器型式は、調査区近隣の黒草第2遺跡でも出土が確認されている。

IX類bは轟I式土器である。付近では清武町赤坂遺跡や橋山第1遺跡からも確認されているが、町内では初の出土例である。施文によって微隆起線文を作出する。

X類である網文土器、撲糸文土器は、押型火土器と同時期若しくはその前後の時期と考えられる。全てF区から出土した。

XI類は壺形土器である。(198)の口縁部は肥厚部を貼り付けるものであり、こうした製作手法は鹿児島県鹿屋市前畠遺跡の資料に類例を見ることができる。(200)の頸部~胴部の境界部にある微隆起は鹿児島県知覧町西垂水遺跡のものと共通する。

検出された集石遺構は、全てこの早期に構築・使用されたものである。

A区からは最も多くの集石遺構が検出されたが、それは調査面積が広大であったためであり、B、E区と比較すると密度は疎らであった。検出面はIV層~V層と幅広く、出土した遺物からも分かるように、早期の全般にわたってこの地で生活が営まれていたことを示している。この調査区からは石器の出土が多く、石鐵をはじめ石錘、石匙、石斧等の製品も多くがこのA区にて出土したものである。また、特筆すべきは張質安山岩、いわゆるサヌカイトの比率であり、その高い使用頻度は表1の石鐵の石材比率にも反映されている。A区からはこの石材の原石も出土しているが、この他にもサヌカイトの持ち込みが恒常的に行われていたことを示している。

B区の集石遺構の検出面はV層の上部と下部にあり、36基と最も多く検出された。しかし、出土遺物は土器、石器共に時期は多彩である反面量的には少なく、中州である地形を活かし、獲物を陸上に引き上げる場所として利用されたことを窺わせる。

C区は傾斜面上にあり、傾斜面からは集石遺構が若干検出された。また、C区の南東部からは鎌石橋式土器や轟I式土器が集中的に出土しており、対岸のA区等で遺物の出土が殆ど見られなかった早期末に、河川の対岸であるこの地に集落が築かれた可能性が考えられる。

D区は崩落により少量の遺物が混入する程度であるが、擾乱層からの出土は、西側の高地にも早期の段階に遺跡が形成されたことを示す。

E、F区は調査区の中で最も高台があり、面積からすると最も遺物・遺構の集中が見られた区域である。特にV層上面より確認された大規模な疊群や、下位から検出された集石遺構の集中は、ここが生活を行う上で重要な地点であったことを表しており、またその下位より検出されたS I-05のような大型の集石は、宮崎県央部の縄文早期の遺跡において、しばしば検出される遺構である。

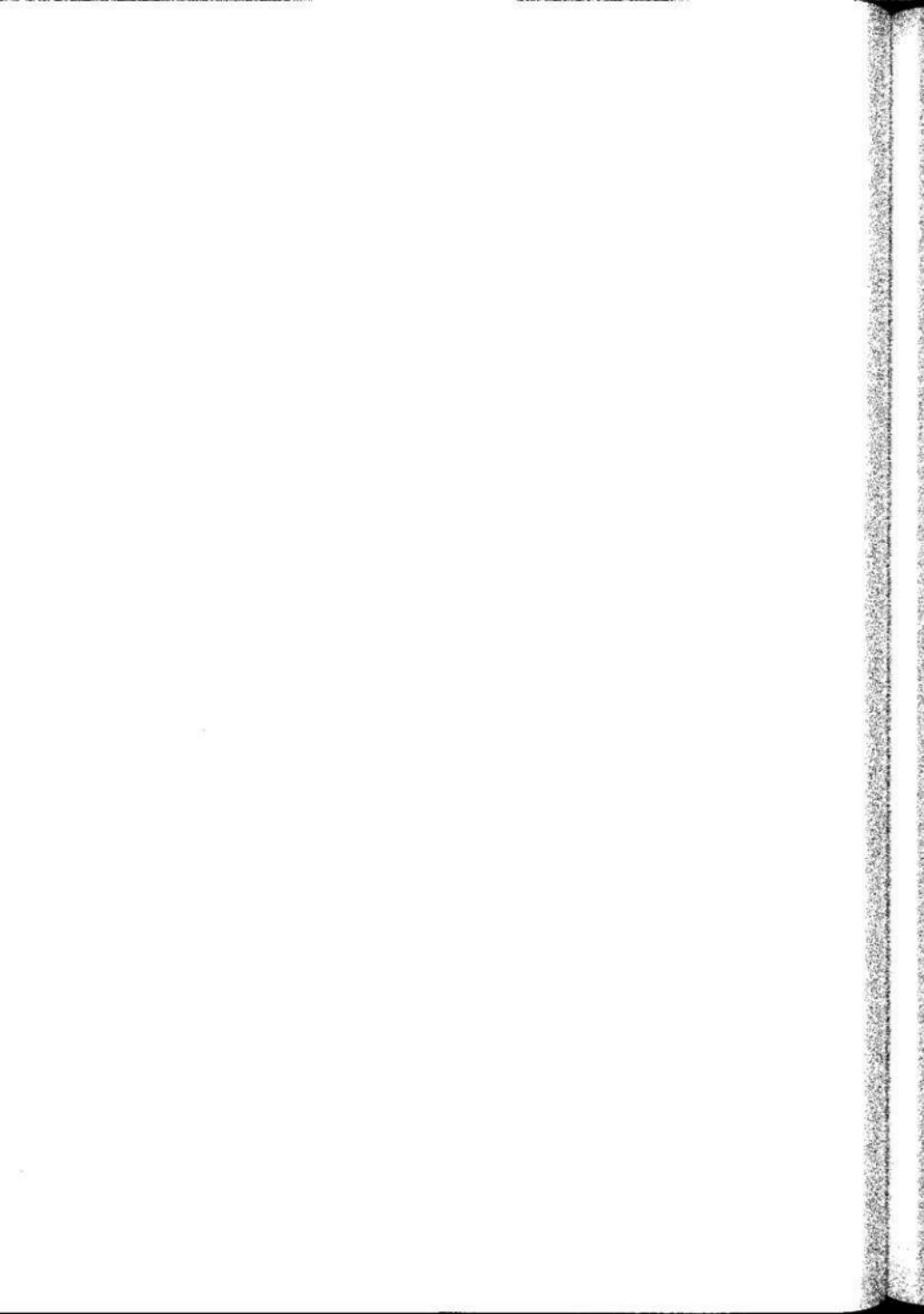
縄文時代前・中期はII類の舟形式土器が最も古く、I類の尾田式土器、IV類の深浦式土器が後続する。III類の微隆起線文は轟B式上器のものに類似するが、文様の構成が異なっており、前期から中期にかけて南九州において見られる微隆起線文を持つ一群に属すると考えられる。V類は春日式土器であるが、段階的には古いもののみである。

前・中期の土器は、F区のアカホヤ上面で少量確認されたもの以外は、D区の擾乱層からの出土であり、遺物包含層や生活面は確認されなかったため、当時の集落の様子を伺い知ることはできなかった。ただしE、F区で検出された土坑の構築時期は、若干の時期差を置きながらも縄文時代前・中期に構築されたと考えられる。

また、古代の須恵器等も表面採集されているが、調査区内から包含層や遺構等は確認されなかった。

(参考文献)

- 鎌田洋昭 「ナイフ形石器文化の終末の様相と細石器文化の開始期について」
「九州の細石器文化」 九州旧石器文化研究会 1997
- 杉原敏之 「福岡地域における細石刃核の研究」
「九州の細石器文化」 九州旧石器文化研究会 1997
- 桑波田武志 「細石器の生産技術」「九州の細石器文化」 九州旧石器文化研究会 1998
- 高岡町教育委員会 「天ヶ城跡 上巻」「高岡町埋蔵文化財調査報告書第16集」 1998
- 宮崎県教育委員会 「野久首遺跡 平原遺跡 妙見遺跡」
「九州縦貫道（人吉～えびの間）建設工事にともなう埋蔵文化財調査報告書 第2集」 1994
- 高橋信武 「平柄式・塞ノ神式土器再論」「九州縄文土器編年の諸問題」
九州縄文研究会 1998
- 八木澤一郎 「平柄式土器様式の再検討」「九州縄文土器編年の諸問題」九州縄文研究会 1998
- 大分県教育委員会 「宇佐別府道路・日出ジャンクション関係埋蔵文化財調査報告書」 1993
- 荻町教育委員会 「右京西遺跡」「荻台地の遺跡X」 1986
- 東和幸 「春日式土器」「縄文時代」 第10号 縄文時代研究会 1999





元野河内遺跡調査前遠景（西より）

図版 2



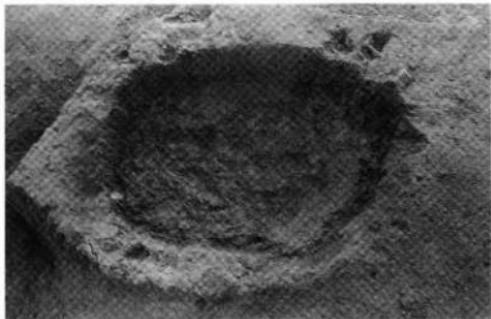
A区近景（西から）



A区遺構検出状況（西から）



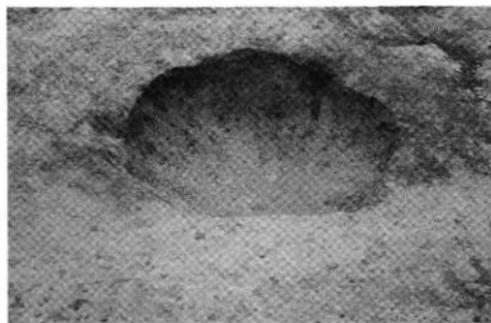
A区SI-01 検出状況



A区SI-01 完掘状況



A区SI-02 検出状況



A区SI-02 完掘状況

図版 4



A区SI-03 検出状況



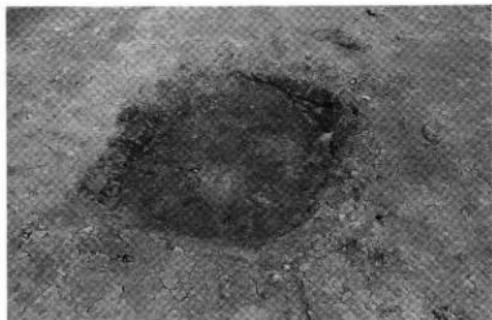
A区SI-04 検出状況



A区SI-05 検出状況



A区SI-06 検出状況



A区SI-06 完掘状況

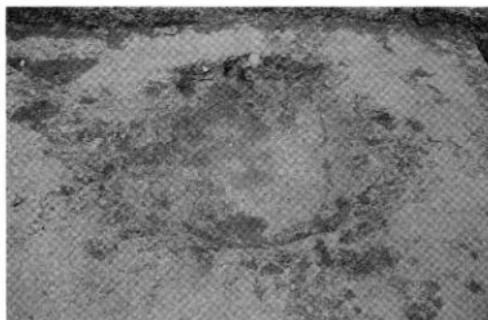


A区SI-07 検出状況

図版 6



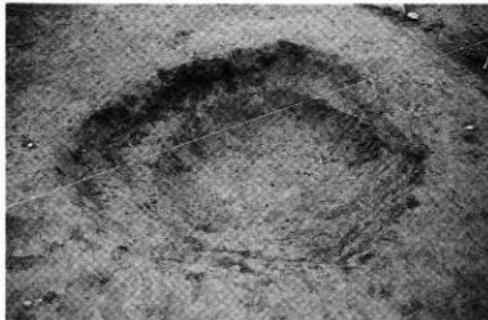
A区SI-08 検出状況



A区SI-08 完掘状況



A区SI-11 検出状況



A区SI-11 完掘状況



A区SI-12 検出状況



A区SI-14 検出状況

図版 8



A区SI-14 完掘状況



A区SI-16 検出状況



A区SI-17 検出状況



A区SI-17 完掘状況



A区SI-18 换出状況

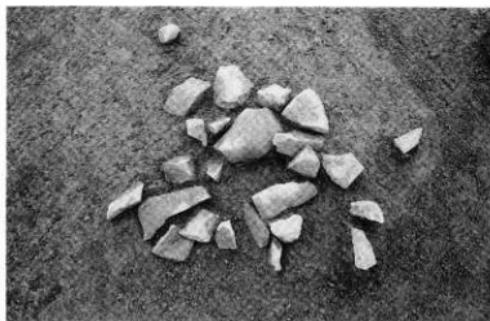


A区SI-19 换出状況

図版10



A区SI-20 検出状況



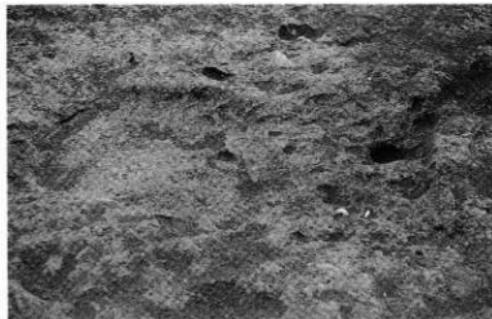
A区SI-21 検出状況



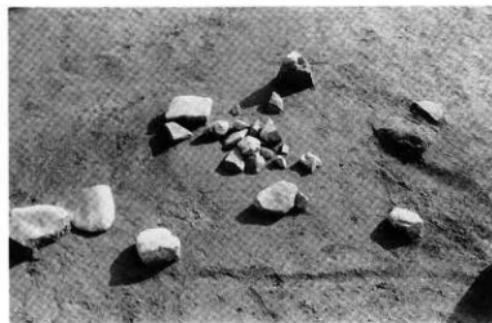
A区SI-22 検出状況



A区SI-23 挖出状況



A区SI-23 完掘状況



A区SI-24 挖出状況

図版12



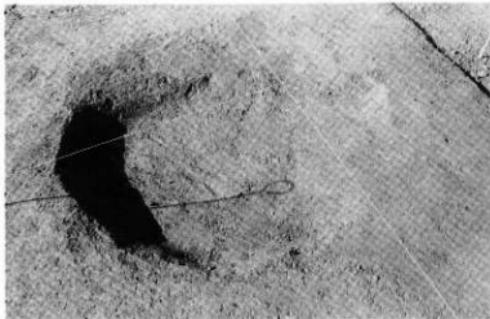
A区SI-25 検出状況



A区SI-26 検出状況



A区SI-27 検出状況



A区SI-27 完掘状況



A区SI-28 検出状況



A区SI-29 検出状況



A区SI-29 完掘状況



A区SI-30 検出状況



A区SI-31 検出状況